

若草物語

LITTLE WOMEN

ルイザ・メイ・オルコット L. M. Alcott

青空文庫

作者について

この「若草物語」（原名リツル、ウイメン）は、米国の女流作家ルイザ・メイ・オルコット女史の三十七才の時の作です。父を戦線におくり、慈愛ふかい聡明な母にまもられて、足らずがちの貧しい生活ながら、光りを目ざして成長していく四人の姉妹を描いています。それは、けつして坦々たる道ではなく、不平、憎悪、苦悶、嫉妬など、さまざまのものが、彼女たちの健気な歩みを妨げるのであります。そして、その多くの試練にたちむかう、四人の姉妹の、それぞれがった性格の描写は、まことに、明暗多彩、克明精細、しかも、この一篇にみなぎる愛と誠とは、いかなる読者の心をも魅了し、感激させずにはおきません。なお、この物語は、オルコット女史が、いつているように、ほとんどじぶんたちの姉妹をモデルにしたものであり、家で起った事件もとりにいれてあります。それがために、この物語の四人の姉妹は、ありふれた娘であるにかかわらず、心にせまる真実性があり、いつも生きているし、長くも生きるのであります。

それですから、この作は千八百六十八年に公にされて以来、全世界にむかえられ、もう

何十万部発行されたかわかりません。そして、今もなおベスト・セラー中にかぞえられています。

オルコット女史について、簡単に御紹介しますと、出生日は、千八百三十二年十一月二十九日、出生場所は米国ペンシルバニア州のジャーマン・タウン、父は教育家でした。この父は個性を尊重する理想主義の教育を主唱し、私学校を建設しましたが、経営に失敗しましたが、一家は物質的には恵まれませんでした。四人の娘たちは精神的にゆたかな生活をしました。

オルコット女史は、二女で、この「若草物語」のジヨウに作者の面影が出ていますが、文筆の才に恵まれ、教鞭をとるかたわら、作家志願の精進をつづけ、二十三才のとき、「花物語」という処女作を出しました。

千八百六十一年、女史の三十歳のときに、南北戦争が起り、女史は篤志看護婦となって献身的なはたらきをしました。その後、三十七歳に「若草物語」つづいて、「グッド・ワイブス」「リツル・メン」など大作を世に送りました。「若草物語」を公にしてからの女史は、物質的にもめぐまれ、父の負債をかえし、母を安楽にさせ、妹のメイには絵の修行をさせてやり、自分もあこがれのヨーロッパ旅行をして、イタリイに滞在しました。

けれど、母がなくなってから、女史の肩にまた重荷がかかってきました。妹のメイは結婚後しばらくして死に、残されたあかんぼを引きとらなければなりません。女史はいよいよはたらかきました。女史の知人は同情して補助をしようとしたが、女史は補助を受けるのがいやで、困難のなかにも忍耐して努力しました。そうして、女史は千八百八十八年三月六日、五十五歳で、父の死後わずか二日、最愛の父の後を追って、ボストン市で永遠の旅路にのぼりました。女史の一生は、愛と誠をもってする努力精進の一生でありました。

第一 巡礼あそび

「プレゼントのないクリスマスなんか、クリスマスじゃないわ。」と、ジョウは、敷物の上にねそべって不平そうにいいました。

「貧乏ってほんとにいやねえ。」と、メグはじぶんの着古した服を見ながらため息をつきました。

「ある少女が、いいものをたくさんもち、ある少女が、ちっとも、もたないなんて、不公平だと思うわ。」と、小さいエミイは、鼻をならしながらいいました。

「でもね、あたしたちは、おとうさんもおかあさんもあるし、こうして姉妹があるんだもの、いいじゃないの。」と、ベスが、すみのほうから満足そうにいいました。

ストーブの火に照らされた四つのわかわかしい顔は、この快活な言葉でいきいきとかがやきました。が、ジョウが悲しそうに、

「だって、おとうさんは従軍僧で戦争にいつておるすだし、これからも長いことお目にかかれなと思うわ。」と、いったとき、またもやくらい影におおわれ、だれもしばらく口

をききませんでした。けれど、やがてメグが調子をかえて、

「おかあさんが、今年のクリスマスは、プレゼントなしとおっしゃったのは、みんな暮しがつらくなるし、兵隊さんたちが戦争にいつているのに、たのしみのためにお金を使うのはいけないと、お考えになったからよ。あたしたち、たいしたことはできないけど、すこしの犠牲ははらえるし、よろこんではらうべきだわ。でも、あたしははらえるかしら？」

メグは、ほしいものを犠牲にするのがおしいというように頭をふりました。

「だけど、あたしたちのドルを献金したって、たいして兵隊さんの役にたつとは思えないわ。あたしはおかあさんやあなたがたから、プレゼントがもらえないのはいいとして、じぶんでアンデインとシントラム（本の名）を買いたいわ。前からほしかつたんですもの。」と、本の好きなジョウがさういふと、ベスはため息をつきながら、

「あたしはあたらしい譜本を買いたいわ。」

エミイも、きつぱりと、

「あたし、フェバアの上等の色鉛筆がほしいわ。ほんとにあたしいるんですもの。」と、いいました。ジョウは、

「おかあさんは、あたしたちのお金のこと、なんにもおっしゃらなかつたわ。だから、め

いぬいほしいものを買ってたのしみましょうよ。これだけのお金をもうけるのに、みんなずいぶん苦勞したんだもの。」と、紳士がやるように長靴のかかとをしらべながらいいました。

「そうよ、ほとんど一日中、あのやつかいな子供たちの勉強を見てやるのたまらないわ。」と、メグがまたも不平をいいますと、つづいてジョウが、

「そんなことあたしの半分の苦勞じゃないわ。あたしは、神経痛で気むずかしいおばあさんに使われてさ。どんなにしてあげても気にいらなくて、いつそのこと窓からとびだそうか、それとも、おばあさんの横つ面をはりとばしてやろうかと思うくらいよ。」

「不平、いつてもしょうがないけど、皿をあらったり、そこらを片づけたり、そんな家のなかの仕事は、ほんとにいやな仕事だわ。手がこわばって、ピアノひけないわ。」

ベスは大きなため息をついて、荒れたじぶんの手を見ました。すると、エミイも大声でいいました。

「あたしぐらい苦勞しているものないわ。だって、あなたたちは、勉強ができないといつていじめたり、服がおかしいといつて笑ったり、おとうさんが金持でないといつたり、鼻のかっこうがわるいといつてあざけつたりする生意気な連中と、いっしょに学校にいかな

くてもいいんですもの。」

こうして、みんなが不平をぶちまけたあげく、メグがいました。

「あたしたちの小さいとき、おとうさんのなくされたお金が、今でもあつたらいいと思わない？ そうしたら、どんなに幸福でしょう。」

すると、ベスが聞きとがめていいました。

「こないだ、ねえさんは、キングさんのところの子は、お金があつても、いつもけんかしたり怒ったりしてるから、あたしたちのほうはずっと幸福だっていったじゃないの？」

「ええ、いったわ。あたしたちは、はたらかなければならないけど、ジヨウのいうように、たのしいあいぼうですもの。」

「ジヨウねえさん、あいぼうだなんてぞんざいな言葉だわ。」と、エミイは、敷物の上にねそべっているジヨウのほうを見ていいました。ジヨウは、すぐに起きなおって、エプロンのかくしに、りょう手をつつこんで、口笛を吹きはじめました。

「ジヨウ、およしなさい。まるで男の子みたい。」

「だから、あたしするの。」

「あたし、下品な、女らしくない子は大きらい。」

「あたし、気どり屋のおすまし、大きらい。」

すると、仲裁者のベスがおどけ顔で、

「おなじ小さな巢にいる小鳥、いつもなかよしあらそわぬ。」と、うたいだしたので、二人のとがった声も笑い声となりましたが、メグがねえさんぶってお説教をはじめました。

「二人ともいけないわ。それにジョウは、もう男の子みたいなおいたはやめて、しとやかになさいよ。せいも高いし髪もゆつてるのですものもうわかい婦人だわ。」

「そんなら二十才まで、おさげにしとくわ。あたし、男の子のあそびごとや仕事や身なりが好きなのに、女に生れてつまらないわ。この頃は、おとうさんといっしょに、戦争がしたくてうずうずしてるのに、家にてよぼよぼあさんみたいに、編物をしてるだけなんだもの。」

「かわいそうなジョウねえさん、まあ名前でも男の子らしくして、あたしたちのにいさんになって、がまんしておくんだわねえ。」

ベスがなぐさめるようにいきました。メグは、またお説教をつづけました。

「それから、エミイは、気むずかし屋で、かたくるしいわ。今はかわいけれど、気をつけないと大人になったら、がちようみたいに気どり屋さんになるわ。上品ぶらないときは、

しとやかなのも、いい言葉も好きだけど、あんたのませた言葉は、ジヨウの下品な言葉とおなじように、よくないわ。」

「ジヨウがおてんばで、エミイが気どり屋さんなら、ねえさん、あたしはなあに？」と、ベスはじぶんもお説教されたがつて口をはさみました。

「あなたは、かわいい子、ただそれだけよ。」

メグは、やさしくそういいましたが、これには、だれも反対しませんでした。

ところで、みなさんは、この四人の姉妹がどんな人がらか、知りたいでしょう。おもてには十二月の雪がふり、家のなかには、たのしそうにストーブの火のもえている夕暮のうすやみのなかで、編物をしている四人姉妹をスケッチしてみましよう。その前に、部屋のようすをいえば、敷物の色はさめ家具類は質素ですが、壁にはりっぱな絵が一つ二つかけられ、本棚にはぎつしりと本がならび、出窓には菊やばらが咲いています。古い部屋ですが、平和な家庭のなごやかさが、隅々にまで充ちわたっていました。

長女のマアガレット（メグ）は十六で、かわいい娘です。ふとって、目が大きく、とび色の髪はふさふさとしており、口もとがかわいく、じぶんでもいくらか得意の白い手をしています。

十五になるジヨウは、せいが高く、やせて、小麦色の肌をして、すらりと長い手足をもてあましているようすから、なんとなく仔馬を思わせます。きりつとした口もと、おどけた鼻、きつい灰色の目をもつ顔は、ときにはするどくなり、ときにはおどけ、ときには思い深げになります。その長いゆたかな髪は、すぐれて美しいけれど、いつもむぞうさにネツトのなかに束ねています。

みんながベスとよぶエリザベスは、ばら色の血色の、くせない髪、あかるい目をした十三の少女で内気でおだやかですから、おとうさんが「ひっそり姫」という名をつけたのは、たしかにうってつけでした。

エミイは、一ばん下ですが、じぶんでは一ばんだいじな人物だと思っています。目は青く、ちぢれた金髪を肩までたらし、あどけない少女で、青白く、やせて、いつも起居ふるまいに気をつける、わかい貴婦人です。

時計が六時をうちました。ベスはストーブのまわりを掃いて、スリッパをならべてあたためました。やがて、おかあさんのお帰りです。四人の顔によろこびがかがやき、メグはお説教をやめてランプをともしました。

すると、その古いスリッパが問題になりました。みんなが、じぶんが買っておかあさん
にあげるといいはり、また、一もめ、もめそうでしたが、ベスが、

「みんなで、おかあさんにクリスマスプレゼントをあげましょうよ。じぶんのものは、
買わないで。」と、いったので、それはいい思いつきだということになり、あれこれ考え
たあげく、メグは上等の手袋、ジヨウは上等のスリッパ、エミイはへりのついたハンカチ、
ベスはコロン水の小瓶にきめました。

ジヨウは、せなかに手を組み、天井をあおいで部屋を歩きながらいいました。

「おかあさんには、わたしたちが、じぶんのものを買っているとかわせておいて、びっく
りさせてあげましょうよ。メグ、明日の午後に買物にいかないと、クリスマスのお芝居の
ことで、することがたくさんあるわ。」

すると、メグがいいました。

「あたし今度きりで、もうお芝居なんかしないつもりよ。あんなこと子供くさいもの。」
「だって、ねえさんは一ばんの役者ですもの、ねえさんがぬけたらおしまいよ。エミイ、
さあ、いらっしやい。おけいこしましょう。気を失うところをなさい。あんたは火ばし
みたいにかたくなるんだもの。」

「しかたがないわ。氣を失うとこなんか見たことないんですもの。」

「こうやるのよ。手を組み合せて、ロデリゴ！ 助けて、助けて！ と氣狂いみたいにさげびながらよろけて部屋を横ぎるの。」

ジョウは、ほんとに悲鳴をあげてやってみせました。それにならってエミイもやりましたが、まるでぎこちなく、おお！ という声だつて、絶望どころか、身体にピンでもささった時のようでした、ジョウががっかりしてうめくと、メグは笑いだすし、バスもおかしかつて、パンをこがしてしまいました。

「おけいこしてもむただわ、そのときになつて、できるだけになさい、見物が笑つても、あたしのせいにしてはいやよ、さあ、それでは、今度はねえさんよ。」

それからは、すらすらと進行しました、ジョウのドン・ペドロは長い科白をまくしたてて世をあざけり、魔女のハーガーは、ひきがえるのいっばいはいった釜をのぞいて呪文をとええ、ロデリゴは、おおしくも鉄のくさりをたちきり、ユーゴーは毒をあおいで苦しみながら死んでいきました。

「今までのおけいこのうちで、一ばんうまかつたわ、」と、メグがいうと、バスも「ジョウねえさん、どうしてこんなにつばなものが書けるの？ それに、お芝居もじょうずだわ

「それほどでもないけど、この『魔女の呪い』は、すこしはいいかもしれないわ、それはそうと、シエークスピアの『マクベス』がやってみたいのよ。」と、いつて、

「目の前にちらつくは短剣か？」と、有名な悲劇役者のしぐさをまね、目の玉を光らし、虚空をつかんでいました。すると、メグがさげびました。

「あら、フオークにさしてやいてるのは、パンじやなくて、おかあさんのスリツパよ、」なるほど、スリツパが火にかかっていました。ベスは、おけいこを見て夢中だったので、みんなは大笑いしました。

「ずいぶん、たのしそうね。」と、戸口でおかあさんの声がしました。ねずみ色の外套を着て、流行おくれのボンネットをかぶったおかあさんも、娘たちの目には、この世でならびない、すばらしい人としてうつりました。

「今日はべつになんにもなかつたの？ おかあさんは、明日送りだす慰問箱の仕度でいそがしくて、御飯までに帰れなかつたの。ベス、どなたかお見えになった？ メグ、かぜはどう？ ジョウ、あなたはひどく疲れているのね、さあさあ、みんな来て、キッスしてちようだい。」

マーチ夫人はぬれた外套をぬぎ、あたたかいスリッパをはき、ソファに腰をおろして、エミイを膝にのせ、多忙な一日の一ばんのしいときを、たのしむのでした、メグとジョウとベスは、さっそくとびまわって、食事の支度をし、すべてととのうと、みんなテーブルのまわりにつきましました。

「晩御飯がすんだら、みんなにおみやげをあげますよ。」

さつと、あかるいほほえみが、みんなの顔をかがやかせました。ジョウは、ナフキンをほうりあげてさげびました。

「手紙だ、手紙だ、おとうさん、ばんざい！」

「ええ、いいお便りです。おとうさんは、おたつしやで、案じていたほどでもなく、この寒い冬を元気でお過しなされそうですって。」

おかあさんは、そういつて、まるで宝物でもはいつているように、ポケットをたたいて見せました。さあ、もうゆるゆるの食事なんかしていられません。パンを床に落したり、お茶にむせたりしたいへんでした。

「さあ、それでは、お手紙を読んであげましょうね。」

みんなは、ストーブの前にあつまりました。おかあさんはソファにかけました。こうい

う非常のときの手紙は、つよい感動をあたえるものですが、この手紙もそうで、危険に身をさらしたとか、つらいとかということは、すこしも書いてなく、露営、進軍、戦況などがいきいきとした筆で書かれ、たのしく希望にみちていましたが、最後のところで、大きな感動をあたえました。

「娘たちに、わたしの愛とキスをあたえて下さい。昼は娘たちのこと思い、夜は娘たちのために祈り日夜娘たちの愛情のうちに慰めを見出しています。娘たちとあうまでの一年は、長く思われるが、待ちわびるそのあいだに、たがいに仕事につとめ、日々をむだにしないようにとお告げ下さい。娘たちは、御身には愛すべき子供であり、忠実に義務をおこなない心中の敵と勇ましく戦い、みごとにうち勝つて、わたしが凱旋のときには、以前にもまして愛らしく、誇りうるように生長しているように、出発のときに申し聞かせたことを、すべてよく記憶していると思います。」

ここまでくると、みんな鼻をすすりはじめました。涙をとめることはできません。

「あたしわがままだったわ、おとうさんが失望なさらないように、いい子になります。」と、エミイがいいいますと、メグが、

「みんないい子になりましょう！ あたし見栄ばかり気にして、はたらくこときらいだっ

たわ、もうやめるわ。」と、さげました。

「あたしも、いい子になって、らんぼうなまねよすわ。どこかへ、いきたいなんて思わずに、家でじぶんのつとめをするわ。」

ジョウは、家でおとなしくしてるのは、敵一人や二人にたちむかうよりむずかしいと思いながらいました。ベスは、だまっていたましたが、青い軍用靴下でそつと涙をふき、身近の義務を果すための時間のむだにしまいとして、せつせと編みました。

おかあさんは、ジョウの言葉につづいた沈黙を、快活な声でやぶりました。

「あなたたちが小さかったとき、「巡礼ごっこ」の遊びをしたことおぼえていますか？みんなせなかに、あたしの小布のふくろをしょって、帽子をかぶり杖をつき、まいた紙をもつて、破滅の市の地下室から、日の照っている屋根の上までいき、そこで天国をつくるために、いろいろな美しいものをいただくくらい、うれしいことはなかったでしょう。」

みんなは、そのときのいろんなできごとを思いだして話しましたが、エミイまでが、もうこんなに大きくなつては、あんなあそびできないというのをとがめて、おかあさんはいました。

「いいえ、年をとりすぎてはいません。あたしたちは、まあお芝居をしているようなもの

です。荷物はここに、道は目の前にあります。よいことと、しあわせを求める心が、たくさん苦勞や、あやまちのなかを通りぬけて、ほんとの天国、いいかえれば平和に導いてくれるのです。さあ、小さい巡礼さんたち、今度はお芝居あそびではなく、本気でやって、おとうさんがお帰りになるまでに、どのあたりまで巡礼ができるか、やってみてはどう？」「おかあさん、それで、荷物つてどこにありますの！」と、エミイが尋ねました。

「ベスのほかは、みんながじぶんの荷物が、なにか、いいましたよ。ベスは、きつとなにもないのでしよう。」

「いいえ、ありますが、あたしのはお皿とはたきと、いいピアノをもっている娘をうらやむしがることですわ。」

「それでは、みんなでしましょう。巡礼ごつことというのは、よい人になろうと努めることね。」

メグは、考えこむように、そういいました。

「あたしたちは、今夜は、絶望の沼にいたのね、すると、おかあさんが来て、あの本のなかで、救助がやったように、ひきあげて下すつたんです。だけど、掟の巻物を、どうしましよう？」

ジヨウが、そういうと、おかあさんが答えました。

「クリスマス朝、枕の下をごらん下さい。見つかるでしょうよ。」

ばあやのハンナが、テーブルを片づけているあいだに、四人の少女たちは、あたらしい計画について話し合い、それからマーチおばさんの敷布をつくるために、四つの小さな仕事かごがもちだされ、せつせと針をはこぶのですが、今夜はこれおもしろくない仕事に、だれも不平をいいませんでした。

九時に仕事をやめて、いつものとおり、おわる前に歌を合唱しました。バスはおんぼろピアノで、こころよい伴奏をしました。メグは笛のような声で、おかあさんと二人で、この合唱隊をリードしました。姉妹たちは、この歌を、

「きらりきらり、ちっちゃな、星さま」と、まわらぬ舌でうたったところから、今だにつづけています。おかあさんは生れつきうたがじょうずなので、これが行事の一つとなつたわけでした。朝、まず聞えるのは、家のなかを、ひばりのようにうたうおかあさんの声で、晩に聞える最後の声も、おなじたのしいその声でした。姉妹たちはいくつになつても、そのなつかしい子守唄を、聞きあきるといふことはありませんでした。

第二 たのしいクリスマス

クリスマスの朝、まだほのぐらい明方に、ジョウが一ばんさきに目をさました。ジョウは、おかあさんとの約束を思いだして、枕の下へ手をさしこみ、小さい赤い表紙の本をひきだしました。それはこの世でもっともすぐれた生活をした人の美しい物語で、よい道案内だと思いました。ジョウは、「クリスマス、おめでとう。」といって、メグを起し、枕の下を見てごらんさいといいました。ありました。やはり、あかい絵のある緑の表紙の本で、おかあさんの手でみじかい言葉が書かれていました。まもなく、バスとエミイが目をさまし、枕の下に本を見つけました。一冊は鳩羽色、一冊は空色の表紙でした。みんなは起きなおり、本をながめて話し合いましたが、そのうちに東の空がばら色に染ってきました。

メグがいました。

「まい朝、目がさめたらすこしずつ読んで、その日一日、あたしを助けてもらいましょう。」

メグが読みはじめると、ジョウは片手をメグの身体にかけ、ほおをすりよせました。ほ

かの二人もしずかに頁をくりました。三十分ばかりして、メグはジヨウといっしよに、おあさんにプレゼントのお礼をいいに階下へかけおりていきました。

「おくさまは、どこかの貧乏な人がおもらいにきたので、なにかいるものを見に、すぐお出かけになりました。おくさまみたいに、食物や着物や薪までおやりになる方はありませんよ。」と、ハンナが答えました。ハンナは、メグが生れてから、この家族といっしよに暮してきて、女中というよりは、友だちとしてあつかわれているのです。

「すぐにお帰りになると思うわ。だから、お菓子をやいて、すっかり用意しておいてね。」と、メグはかごにいれてソファの下にかくしておいたプレゼントを、いざというときに、とり出せるようにしてから、

「あら、エミイのコロン水の瓶は？」

「エミイが、リボンをかけるとかといつて、もっていったわ。」と。ジヨウがいました。「ねえ、あたしのハンケチいいでしょう。ハンナが洗ってアイロンをかけてくれたのよ。マークはあたしがつけたの。」とベスは、ぬいどりの文字をほこらしげにながめました。

「まあ、この子は、エム・マーチでなく、マザアなんてぬいどりして、おかしいね。」と、ジヨウがいうと、ベスはこまったような顔をして、

「いけないの？、エム・マーチだと、姉さんもおなじだから。」

「いいのよ、それならまちがいつこないから。きつとおかあさんの気にいるわ。」と、メグは、ジョウには顔をしかめ、バスには笑顔を見せていました。そのとき、扉の音がしたので、ジョウは、「そろおかあさんだ、かごを早くかくしなさいよ。」

エミイが、いそいで入ってきました。

「どこへいつていたの？ うしろに、かくしているのなあに？」

メグは、怠け者のエミイが、朝早く外出してきたのを見てびっくりして尋ねました。

「笑っちゃいや。あたし小瓶を大瓶にかえてきたの。これでお金はないわ。もうよくばりはやめにするのよ。」

エミイのかわいい努力に感じて、メグはさっそく彼女を抱きしめ、ジョウは窓へいき、じぶんの一ばんいいばらの花をとってきて、その瓶をかざりました。

また扉の音がしました。かごはソファの下にかくされ、姉妹たちはテーブルにつきました。おかあさんがくると、姉妹たちは口をそろえていました。

「クリスマス おめでとう 本をありがとうございました。もう読みはじめました。まい日読もうと思います。」

「みなさん、クリスマス、おめでとう！ さっそく読みはじめてうれしく思いますよ。つづけて読むようになさいね、とここで、食事の前に一言いいたいことがあります。すぐ近くに、あかちゃんを生んだ貧乏な女の人があります。火の気がないので、六人の子供たちが、こごえないように、一つのベッドにだき合ってねています。それに、なにも食物がないので、一ばん上の子が寒くてひもじくて、とても苦しんでいるといいにきました。みなさん、あなた方の朝御飯を、クリスマスのプレゼントにあげませんか？」

みんなは一時間近くも待つていたので、ひどくお腹がすいていたので、ちよつとのあいだ、だまつていました。が、ジョウが勇ましくさげびました。

「食べないうちに、おかあさんが帰つていらして、ほんとによかった。」ベスは御飯を運ぶお手伝いをしたいといい、エミイは、クリームと軽焼を持っていつてあげるといいました。その二つともエミイの一ばん好きなものでした。メグは、早くもそばをつつみ、パンを大きな皿にもりました。おかあさんは、満足そうにほほえみながらいいました。

「きつと、みなさんは賛成すると思つていました。さあ、来て手伝つて下さい。帰つたらパンとミルクで朝御飯をすませて、夕飯にそのうめ合せをしましょう。」

すぐ仕度をして、みんなで出かけました。いつてみておどろきました。なんと、あわれ

な部屋でしょう。窓はやぶれ火の気はなく、蒲団はぼろぼろでした。おかあさんは病気で、あかんぼうは泣き、青い顔のひもじい子供たちは、一枚の蒲団にくるまってかたまっていました。みんながはいつていくと、子供たちは目を大きく見はり、青ざめた唇にほほえみをうかべました。

「ああ、神さま！ 天使たちがいらした！」と、そのあわれな女は、うれし泣きに泣きながらさげびました。ジヨウは、

「頭をかけ手袋をはめたおかしな天使でしょう。」と、家中の者を笑わせました。たちまち、この家にやさしい精霊がはたらきだしたように思われました。薪を運んできた。ハンナは火をおこし、古い帽子や、じぶんの肩かけで窓のやぶれをふさぎました。おかあさんは、母親にお茶やかゆをあたえ、あかんぼうをじぶんの子供みたいに着物を着せ、これからお世話をしますと約束してなぐさめました。姉妹たちは、そのあいだにテーブルの支度をし、子供たちを炉のまわりにすわらせ、お腹のすいている小鳥たちを養うように食べさせました。

「ああ、おいしい、子供の天使！」と、子供たちは食べながらいつて、紫色にこごえた手をあたたかい火であたためました。

帰ってから、姉妹たちは、パンとミルクしか食べませんでした、それはたのしい朝御飯でした。おそらくこの市で、この少女たちより、幸福であった人はなかったでしょう。

おかあさんが、すしおくれて帰って来たとき、プレゼントはもう用意され、バスの陽気な行進曲とともに、メグがおかあさんを、ていねいに設けの席につけました。おかあさんは、ほほえみをたたえて、プレゼントについている札を読み、スリッパをすぐにはき、ハンケチにコロナ水をかけて、かくしにしまい、ばらの花を胸にさし、きれいな手袋をはめました。それから、たのしい談笑とくちづけがつづき、よい思い出してみんなの心に残ることばかりでした。

やがて、めいめい仕事をはじめました。仕事は晩のお芝居の支度で、金をかけずにあり合せのもので、気のきいた小道具や衣装をつくるのでした。

その晩、招かれた十人あまりの少女たちが、上等席のベッドの上にならびました。まもなくベルがなり幕が上がりました。「魔の森」です。鉢植や箆筒を利用して森と洞穴をあらわしました。魔女が、洞穴の炉にかかっている鍋をのぞきこんでいると、悪漢ユーゴーが腰の剣をがちやつかせて登場しました。ユーゴーは、ロ德里ゴへの憎しみと、ザラへの愛をうたい、ロ德里ゴを殺してザラを手にいれたい決心をのべ、洞穴へしのびより、「お

い、女、御用だぞ。」と、いつてハーガーに出てくるように命じました。

メグは、白い馬の毛を顔にたらし、赤と黒の衣をまとい、杖をもってあらわれます。ユーゴーが愛の魔薬と死の魔薬を求めると、ハーガーは、あたえることを約束し、愛の魔薬をもつてくるように歌で妖精をよびました。

すると、やわらかな音楽につれて、洞穴のかげから、きらきらした翼をつけ、金髪にばらの花冠のかわいい妖精があらわれ、愛の魔薬をいれた金色の瓶をおとして、すがたをけます。そこで、ハーガーがもう一度うたうと、ものすごいひびきとともに、真黒な小鬼があらわれ、しゃがれ声で返事をしたかと思うと、黒色の瓶をユーゴーに投げつけてすがたをけしました。すると、ハーガーは、ユーゴーに、むかしじぶんの友人を二三人殺したことがあるから、じぶんは彼の計画のじやまをするつもりだといいます。かくて、幕はさがりました。

第二幕の舞台はりっぱでした。城の塔が高くそびえ、窓にランプがともっていました。青と白の衣をつけてザラがあらわれ、ロデリゴが来るのを待っていると、まもなく、羽かざりのある帽子をかぶり、赤い外套を着て、ギターをもったロデリゴが来て、塔の下でやさしく小夜曲をうたいました。ザラは、城をぬけだすことを歌で答えます。そこで、ロデ

リゴは縄梯子をかけ、ザラはそれをつたっておりのでした。

ところが、とんだことが起りました。それはザラが、衣の裾の長いことを忘れ、ロデリゴの肩に手をかけておりようとしたとき、裾がからまり塔はすごい音とともに倒れ、二人はその下敷になったのです。芝居はめちやめちやになりそうでしたが、気をきかしたドン・ペデロがとびこんできて「笑つちやだめ、知らん顔をしてやるのよ。」といいながら、じぶんの娘のザラをすばやくひきだし、ロデリゴにむかつて立てと命じ、怒りと嘲りを浴せながら王国から追放するぞと宣告しました。ロデリゴはなにをと、その老人をののしり、立ち退くことを拒みました。その勇ましい態度に、ザラもちからを得て、父である領主にたてついたので、彼は二人を城の牢屋にほうりこむことを命じますと、家来がだまってひきたてていきました。

第三幕は、城の広間で、魔女ハーガーが、牢屋の二人を救い出し、ユーゴーを殺そうと思つてあらわれます。魔女はユーゴーの足音を聞いてかくれます。ユーゴーは二つのコップに魔薬をつぎ、小女に、「これを牢屋にいる囚人にあたえ、わしがすぐに行く」と告げよ。」「と、いいつけます。家来はそばへいつて、なにかを告げる間に、ハーガーは二人のコップを害のないものにかえます。小女はそれを運んでいき、ユーゴーはうたった後に魔薬

のはいったほうを飲み、もだえ死にます。そこで、ハーガーは、じぶんのしたことを告げますが、その歌は、一ばんすばらしいできばえでした。

第四幕、ロ德里ゴが、ザラにうらぎられたと知って、絶望して胸に短刀をつきさそうとします。そのとき部屋の下で歌がうたわれザラの心はかわらないが、今あぶない目にあっているから、ロ德里ゴにもし真心があるなら、ザラを救いだせると告げます。ロ德里ゴはよろこび、投げあたえられたかぎで扉を開け、くさりをたち切って愛人を救いに走ります。

第五幕は、ザラと父ドン・ベデロのはげしい争いからはじまります。父はザラを尼寺へやろうとしますが、ザラは聞き入れず、悲痛な訴えをつづけ、気絶しそうになったとき、ロ德里ゴがきて結婚を求め、つれていこうとします。父はロ德里ゴが金持でないのを理由にこばみます。そこへ、家来がハーガからの手紙と袋をもってきますが、手紙にはハーガーは、わかい二人に遺言によつて莫大な財産をあたえ、もしザラの父がわかい二人を幸福を妨げるならば、その身におそろしい呪いがかかると書いてありました。そして、袋を開けると、ブリキの金貨がきらめきました。これで、頑迷な領主の心もとけ、わかき二人の結婚を許したので、一同はたのしい合唱をして、感謝のいのりのうちに、愛する二人は、ザラの父の前にひざまずき、祝福をうけるところで幕がおりました。

嵐のような喝采がおこりましたが、上等席のベッドが、きゆうにたたまれ、大さわぎになりました。幸にけがもなく救い込まれましたが、そのさわぎのおさまらないうちに、女中のハンナがあらわれ、

「おくさまが、みなさんに、夕飯に階下へ来るようにとおっしゃってです。」と、いいました。

これは、ふいうちで、食卓を見たとき、息がとまるほどおどろきました。だって、アイスクリームが、赤と白と二皿、お菓子、果実、フランスボンボン、そして、食卓の上には、温室咲きの大きな花束がありました。

「妖精が下すつたの？」と、エミイ。すると、ベスは、

「サンタ・クロースよ、きつと。」

メグは、白いひげをはやし、白い眉毛をつけたまま、

「おかあさまだわ。」と、いいました。ジョウは、

「マーチおばさまが、すてきな思いつきで、とどけて下さったのよ。」と、いいました。

おかあさんは、にっこり笑いながら、

「みんなちがいます。ローレンスさまが、下すつたのです。」

「ローレンスの、ぼっちゃんのおじいさまですって？ どうしてでしょう？ わたしたちを、ごぞんじないのに。」と、メグが、おどろいていいました。

「ハンナが、ローレンスさんの家の女中さんに、今朝のことを話したのです。ローレンスさんは、それを感心なさって、ていねいな手紙で、今日のお祝いにプレゼントをしたいといつて、およこしになったのです。」

「ぼっちゃんが、思いついたんだわ。いいぼっちゃんだわ。お友だちになりたいたいけど。」と、ジヨウがいますと、それをきっかけに、ローレンス家のうわさに花がさきました。

ローレンスさんは、お金持だが、ちよつとかわつていて、あまりつきあいもしませんが、ぼっちゃんは、いい子で遊びにきたいらしいけど、はにかみ屋だもので、遊びに来れないらしいというようなことが話されました。すると、おかあさんは、

「ぼっちゃんは、りっぱな紳士のようにです。いい折があつたらお友だちになるといいと思います。この花は、じぶんで持っていらつしやいました。二階のさわぎを耳にして、さびしそうに帰られたのです。」

「では、いつか、ぼっちゃんが見てもいいお芝居をしましょう。」と、ジヨウがいました。

「あたし花束なんか、もらったことないわ。きれいねえ。」と、メグは花束に見入っていました。そのとき、おかあさんが、

「花束はかわいいけれど、ベスさんのぼらはなおかわいい。」と、いつて、胸にさしたベスのしほみかけたばらをかきながらいますと、ベスはおかあさんに身をすりよせて、

「あたし花束をおとうさんのところへお送りしたかったの、おとうさんは、あたしたちみたい、たのしいクリスマスをしてはいらっしやらないでしょう。」と、小さい声でいきました。

第三 ローレンスのぼつちちゃん

「ジョウ、どこ！」と、メグが屋根部屋の梯子の下からよびました。

「ここよ。」

かけあがつていくと、ジョウは日なたぼっこをして林檎をかじりながら本を読んでいます。した。

「とても、いいニュース。明日の晩、来てほしいという、ガーデイナアのおくさんの正式

会のお仕度という、きわめて重要なお仕事に夢中でした。化粧はかんたんでも、二階へかけあがったり、かけおりたり、笑ったりしやべったり大きわぎで、メグが額の上にするし捲髪がほしかつたので、ジヨウがこてで焼いたら、つよい髪の焼けるにおいが家中にただよいました。その失敗に、メグは泣きだすしジヨウは心苦しうでした。このほか、小さい失敗は、かず知れず、それでもやつと二人の仕度はできあがりしました。メグは、銀褐色の服、空色ビロウドの、リボンに、レースのふち飾り、そして、真珠のピンをさしました。ジヨウは、海老茶色の服に、かたい、男のするようなカラア、それに白菊を飾りにしただけでしたが、ともかく、二人ともすつきりとしていました。二人とも、きれいな手袋を片方ずつはめ、よごれた方をもちました。苦心のお仕度でありました。

姉妹が、すまして歩道へ出ると、おかあさんは、

「いつてらつしやい、お夜食はたくさん食べちやいけませんよ。ハンナを十一時に、お迎えにあげるから、帰っていらつしやい。」と、いつて、窓をしめましたが、すぐに、また、「もしもし、二人ともきれいなハンカチもつていますか?」と、念をおしました。

「ええ、まつ白よ、ねえさんはコロン水もかけました。」と、ジヨウは答えました。

二人は、カーデナア夫人の家に行くと、その化粧室で、かなり長いあいだ鏡をのぞいて

から、すこしびくびくしながら、階下においていきました。二人は、めったに舞踏会などに招待されたことがないので、今晚の会は略式でも、二人にとつては大きな事件でした。

りっぱな老夫人カーテイナ夫人は、にこやかに二人を迎えてくれ、六人の娘のなかの長女に二人を渡しました。メグはサーリーさんを知っていたので、すぐに親しく話し出しましたが、女の子らしいおしゃべりに興味をもたないジヨウは、服に焼けこがしがあるので、用心ぶかく壁をせにして立っていました。部屋のむこうで、快活な五六人の男の子が、スケートの話をしていたので、ジヨウはそこへいってもいいかと、メグに合図をしました。が、メグの眉がおどろくほどあがったので、動くことができませんでした。しかたなしに、ジヨウは、ただ一人とりのこされ、ダンスがはじまるまで、人々をながめているばかりでした。

ダンスがはじまると、メグはすぐに相手ができて、にこにこして踊りましたが、きゆうくつな靴の痛さをがまんしていることは、だれにも気がつかれませんでした。ジヨウは、髪の毛の赤い青年がやってくるのを見て、ダンスを申込まれては大へんだと思い、いそいでカーテンのかげに入ると、そこには、はにかみ屋さんの「ローレンスのぼっちゃん」がいました。ジヨウは、さつそく、クリスマスのプレゼントのお礼をいいますと、

「あれは、おじいさんのプレゼントです。」

「でも、おじいさんにおっしゃったのは、あなたでしよう？」

ぼっちゃんは笑っていました。それから、いろいろ話しているうちに、ジヨウは、このぼっちゃんが、ローリイという名で、長いあいだ、外国にいたことを知りました。

「まあ、外国へ、あたしは旅行の話を書くのは大好き！」

ローリイは、どう話したらいいかわからないようでしたが、ジヨウが熱心にいろいろ質問したのでエヴェの学校のことや、この前の冬、パリイにいた話をしました。ジヨウは、めずらしい外国の話にたまらなくなつて、

「ああ、いつてみたい！」と、いいました。

それから、話はフランス語のことになり、ジヨウが、じぶんは読めてもしやべれないだけれど、ちよつと話してみてもほしいといいますと、ローリイは、フランス語でいいました。「あのかわいいスリツパはいた人はだれですか？」

ジヨウは、わかつたので、すぐに答えました。

「あれは姉のマーガレットです。あなたは、わたしのねえさんをおかわいと思えますか？」
「ええ、おねえさんは、なんとなくドイツの少女を思わせます。いきいきして、それでし

とやかで、りっぱな淑女みたいに踊りますね。」

ジヨウは、姉をほめられてうれしく、ぜひメグに話してやろうと思いました。ローリイは、もうすっかりはにかみもせず、心を開いて話し、ジヨウも、今は服のことなど忘れて、快活ないつものジヨウになり、ローリイが好きになりました。それで、ローリイのことを、姉妹に話してやるために、顔かたちや身体つきなどをよく憶えておこうと思っていくども見なおしました。けれど、年はいくつでしょう？ ジヨウは、おいくつといいそうにしましたが、やつとこらえて、遠まわしに尋ねることにしました。

「もうじき大学へいらつしやるんでしょう？」

「まだ二三年はだめです。十七にならなくてはいけません。」

「では、まだ十五ですか？」

「来月、十六です。」

「あたしは大学へいきたいけれど、あなたはいきたそうではありませんのね。」

「ぼくはいやです。ぼくはイタリイに住んでじぶんの好きなように暮りたい。」

ジヨウは、ローリイのいう、その好きなように暮したいということを、くわしく聞きたいと思いましたが、眉をひそめてふきげんに見えたので、気をかえさせようと思って、足

拍子をとりながら、

「ああ、いいポルカね。あなたなぜいつてダンスなさらないの？」と、尋ねました。

「あなたもいけば。」

「あたしはだめ。あたし姉さんに踊らないといったの、なぜって、いうと……」

ジヨウが、いおうか、笑ってすまそうかとしていると、ローリイは、しきりにわけを尋ねます。だれにもいわないならばと念をおして、

「服にやけこがあるんです。あたしわるいくせがあつて、よくやけこがしするの。」

ローリイは笑いませんでした。

「そんなこと平気ですよ。それじゃ、あつちの細長い広間で踊りましょう。だれにも見られないから。」

ジヨウは感謝して、よろこんでついていき、だれもいない、その広間で、ポルカを踊りました。ローリイは、ダンスがじょうずで、ドイツ流を教えてくださいましたが、まわったりはねたりすることが多いのでおもしろく踊れました。音楽がやむと、二人は階段にやすんで話しましたが、つぎの部屋でメグが手まねきしたので、ジヨウがしぶしぶいってみると、メグは足をかかえ、青い顔をしてソファにすわっていました。

「高いかかどがひつくりかえって、くるぶしをひどくいためたの。痛くて立てそうもないわ。どうやって家へ帰ろうかしら？」

ジヨウは姉のくるぶしをそつとなでてやりながら、

「あんまりかかどが高いから、けがすると思ったわ。お気のどくね。だけど、どうしたらいいでしょう。馬車を頼むか、ここに夜通しいるか。」と、こまった顔をしました。

「馬車を頼めば高いし、頼みにいつてもらう人もいないし、ここへはとめてもらえないし、あたしハンナが来たら、なんとか考えるわ。あら、みんな夜食にいくわ。あなたもいつて、あたしにコーヒーもらって来てよ。あたし疲れて動けないわ。」

ジヨウは、いそいでいきましたが、あちこち部屋をまちがえて、やっと食堂にはいり、コーヒー茶わんに手をかけたたん、こぼして服の前をよごしてしまいました。それを、あわてて手袋でこすつたので、手袋もよごしてしまいました。

「お手伝いしましょう。」

親しみのある声がありました。それは片手にコーヒー茶わん、片手にアイスクリームの皿をもったローリイでした。

「あたしねえさんのところへ、コーヒーをもつていこうとしましたら、また、やりそな

いましたの。」

「ちようどいい。わたしがもって行ってあげましょう。」

ジョウがさきにいきました。ローリイは、なれたものごしで、コーヒーとアイスクリームを、メグにすすめ、ジョウのために、もう一度とりに行ってくれました。三人が、しばらく話しているうちにハンナが来ました。メグはびっこをひきひき帰り支度をしに二階へいきました。そのあいだに、ジョウは玄関へ行って、下男らしい人に、馬車をやとうことを頼みましたが、その人はその日だけやとわれた下男で、近所のことには知りませんでした。すると、ローリイが聞きつけて来ていいました。

「どうか送らせて下さい。道はおなじですし、それに雨もふっています。」

ローリイは、じぶんを迎えに来たおじいさんの馬車に、メグとジョウとハンナをのせました。みんなは、ぜいだくな箱馬車にのって、たのしい、ゆたかな気持ちにひたりながら帰りました。ローリイは馭者台にのつたので、メグは痛い足を出すことができ、姉妹は気がねなしに話をすることができました。

「あたし、とてもおもしろかったわ。」と、ジョウは髪をかきあげながらいいました。

「あたしもよ、けがするまでは、サーリイさんのお友だちの、マフォットさんという方と

仲よしになったのよ。サーリイさんと一週間とまりがけで来るようにと行って下すったわ。サーリイさんは、春になってオペラがはじまるといらっしやるんですって。あたしおかあさんがいかして下さるといいけど。」

メグは元気づきながらいいました。

「おねえさんは、あたしがにげ出したあの赤い髪の人と踊ったのね、あの人、いい人だった？」

「ええ、髪はとび色よ。ていねいな方で、あたし気持よく踊ったわ。」

「あの人、足を出すとき、ひきつった、きりぎりすみたいだったわ。ローリイさんとあたし笑ってしまったわ。あたしたちの笑うの聞えなかつた？」

「いいえ、それやぶしつけだわ。あなたたち、そこにかくれて、なにしてたの？」

ジヨウは、そこでじぶんたちのやったことを話しました。その話がおわったとき、馬車は家へつきました。姉妹は、あつくお礼をのべて馬車をおり、そつと家へはいりましたが、扉の音で二つの小さな頭がうごき、ねむそうな、けれど熱心な声がありました。

「ねえ、会の話をしてよ？」

ジヨウは、メグのいう、ひどいお作法をやつて、妹たちにボンボンをもってきてやりま

した。妹たちはそれをもらい、その夜の胸のわくわくするような話を聞いて、まもなく寝入ってしまった。メグは、ジヨウは、薬をぬってほうたいをしてもらいながら、

「馬車で夜会から帰り、ねま着のまますわって、女中に世話してもらって、りっぱな貴婦人みたいだわ。」と、いいました。

「あたしたちは、髪の毛をやいたり、服が古かったり、手袋が片方だけだったり、きつい靴をはいてくるぶしをくじいたり、とんまのまぬけだけどね、たのしかったわねえ。」と、ジヨウがいましたがほんとにそのとおりだったのです。

第四 重い荷をかついで

「やれやれ、またお荷物かついで仕事をはじめるの、なんてつらいんでしょう。」

会のある朝、メグはため息をつきました。一週間たのしく遊んだあとで、いやな仕事はやすやすはじめられませんでした。

「いつまでも、クリスマスかお正月だといい。そうしたらおもしろいでしょうね。」と、ジヨウは、あくびまじりに答えました。

「そしたら、今よりか半分もおもしろかないわ。だけど、お夜食や花束をいただいたり、会へいたり、馬車で帰ったり、読書したり、休養したりして、こつこつはたらかないですむような人、うらやましいわ。」と、メグがいました。

「でも、そんなことできないわ。だから、ぐちをこぼさないで、おかあさんみたいに、ほがらかに歩いていきましよう。」

けれど、メグの心は晴れません。髪をきれいにする元氣すらありません。

「ああ、いやだ。せつせとはたらいて、年をとって、きたない気むずかし屋になるんだわ。貧乏でおもしろく暮せないばかりに。」

こういつてメグは、ふくれた顔をして階下へいき朝の食事のときもふきげんでした。みんなも気分がひきたちませんでした。ベスは頭痛がするので、ソファの上に横になり、親ねこと三びきの子ねこを相手に気をまぎらそうとしました。エミイは勉強がはかどらないのに、ゴム靴が見つからないのでぷりぷりしました。ジョウは口笛をふいて、さわぎをひきおこしかねないようでした。おかあさんは、いそぎの手紙を書くのにいそがしく、ハナも前の晩おそかったので、ふきげんでした。

「こんないじわるの家ってありやしない！」

ジヨウは、インキのつぼをひっくり返し、靴のひもを二本とも切ったので、とうとうかんしゃくを起して、じぶんの帽子の上にどざりとすわり、大声でそうさげびました。

「なかで、あなたが一ばんいじわるよ。」と、エミイがやり返し、石盤の上にこぼした涙で、まちがいだらけの計算を消してしまいました。

「バス、こんなうるさいねこ。あなぐらにほうりこんでおかないと。水でおぼれさせれしもうわよ。」と、メグは、じぶんのせなかにかじりついたねこを、はなそうとしながらいきました。

ジヨウは笑う。メグはしかる。バスはあやまる。エミイは、十二の九倍がいくつになるか、わからなくて泣きました。

「さあ、しずかにしておくれ、今朝早く出さなければならぬのに、がやがやうるさくして、書けやしません。」と、おかあさんは手紙の書きそこないを消しながらいきました。

それで、ちよつと静まりました。ハンナが来て、熱いパイを二つおいて、出ていききました。姉妹たちのいく道は遠く寒く、三時前までに帰れないので、これはおべんとうでもあり、また、手をあたためることもできました。それでこのパイのこと「マフ」ともよんでいました。

「では、かあさんいつてまいります。今朝はあたしたちだだっ子でした。でも、天使になって帰って来ます。」

ジョウは、そういつて、メグといっしよに出かけました。町角でふりかえると、いつも窓でにつこり笑うおかあさんの顔があり、それが励ましになるのです。二人は今朝もふりかえり、おかあさんの笑顔を見ると、元気になろうとつとめ、しばらく歩いてから、べつべつの道をいきました。メグは保姆の仕事、ジョウはマーチおばさんのところへはたらくにいくのでした。

おとうさんが、不幸な友人を救おうとして財産を失くしたとき、二人はすこしでも家のためになりたくてはたらき、それからずっとはたらいっているのです。メグの給料はわずかで、しかもまい日キング家で、年上の姉妹たちが、ぜいたくをしているのを見るので、だれよりも貧乏をつらがっていました。ジョウはびっこのマーチおばさんの世話をしますが、気みじかのおばさんと、よく気が合いました。それに、死んだおじさんの文庫がすばらしく、おばさんが昼寝をしたり、来客でいそがしいときさつそく文庫にはいりこんで、詩、歴史、旅行記だのに読みふけりました。それはいいとしても、思うさまかけまわったり、馬にのったりできないのは、なやみの種でした。

ベスは、はにかみ屋で、学校へもいけないほどでした。それでおとうさんが勉強を見ていきましたが出征しなすってからはおかあさん、かあさんが軍人後援会へいくようになってからは、ひとりで勉強します。性質は勤勉で家事が好きで、ハンナを助けて家をきれいにしますが、まだ子供で、人形と遊ぶことが、なよりのたのしみでした。けれど、このベスにも、苦になることがありました。それは、音楽好きなのに、よいピアノもないし、音譜もないことで、音楽の勉強が思うようにできないので、涙をながすことがときどきありました。

エミイのつらいことには、鼻が美しくないことで、エミイにいわせると、あかんぼのとき、ジョウが手をすべらして炭取のなかへ落したためだそうです。エミイは絵がじょうずで、花を写生したり、空想的な絵もかきます。それに十あまりの曲もひくし、フランス語も読めるし、性質は素直でおとなしいので、みんなからかわいがられました。

さて、晩に、みんながいつしよにお裁縫をはじめたとき、メグがいました。

「今日はほんとにくさくさした日だったわ。なにかおもしろい話でもない？」
すると、ジョウがすぐにいいました。

「あたし、今日はへんなことあったのよ。マーチおばさんがいねむりをはじめたので、お

ばさんが読め読めという、つまらない、ベルシヤムを読みかかったら、こつちもねむくなり、大きなあくびをしたの。そうしたら、おばさんは、罪ということについて、ながながとお説教をやりだし、お説教がすむと、よく考えなさいといって、またいねむりよ。そこでわたしは、「村牧師」を出して読みだしたのよ。そしたら、水のなかへころげこむところで、つい大声をあげて笑ったの。すると、おばさんが目をさまして、それを読んで聞かせなさいとおっしゃるの。私は読んであげた。おもしろかったのね。だから、お昼すぎに、あたしが手袋をとりについたら。おばさんは、じぶんで「村牧師」を熱心に読んでるのよ。ね。やつぱりベルシヤムなんかよりおもしろいのよ。おばさんみたいな金持だって貧乏人とおなじような心配があるんだわ。だから、「村牧師」にひきつけられるのだけ。」

すると、メグがいました。

「それで、あたしも話すこと思いついたわ。今日キングさんのところへいったら、なんだかへんなの。それで、あたし一人の子に尋ねたら、一ばん上の兄さんがなにか大へんなことをして、おとうさんから家をおいだされたんですって。泣き声、どなり声がして大へんだったわ。家のはじになるような、らんぼうな男の兄弟がいなくてよかったわねえ。」

すると、エミイがいました。

「今日、スージーさんは、先生の漫画を書いたので、三十分も教壇にたたされたの。あたしスージーさんが、きれいな、めのうの指輪をはめて学校へ来たので、うらやましく思っていたけれど、あんなはずかしい目にあうようじゃ、いい指輪はめたってしあわせじゃないわ。」

つぎに、バスが話しました。

「今朝あたしハンナにかわつて、魚屋へかきを買いにいったの。すると、貧乏そうな女の人に来て、仕事がなくて子供に食べさせるものがないから、みがきものでもさせて、お魚をすこし下さいと頼んだの。すると、魚屋さんいそがしいもので、つつけんどんに、だめよといったの。すると、そのときローレンスさんがしおれて帰っていく女に、大きな魚をステツキでひっかけてあげたの。女は、びつくりして、よろこんで、なんどもお礼をいって、ローレンスさんに天国へいけるようにって祈ったの。」

みんなはバスの話を笑いましたが、もちろん心をうたれました。そして、おかあさんにお話をねだりました。

「そうね、おかあさんは、会で青いネルを裁っていたら、おとうさんのことが、みように心配になって、もしものことがあつたら、どんなに頼りなく、さびしいだろうと思ってい

ました。すると、なにか註文をもっておじいさんが、心配そうな、疲れたようすでやって来ました。身の上を尋ねてみたら四人息子が戦争に出ていて、二人は戦死をし、一人はとりこになり、一人はワシントン病院にいるんですつて。そして、これからそこへいくんですつて。けれど、すこしもぐちをこぼさないで、よろこんでお国のために、子供たちを出したというのです。おかあさんは、たった一人おとうさんを出してつらがつています。はずかしくなりました。そればかりか、おじいさんは、たった一人ぼつちですがおかあさんには四人も娘がいて、なぐさめてくれます。ほんとに、おかあさんは、じぶんの恵みふかい幸福がありがたかったので、おじいさんに、つつみとお金をあげ、教えていただいた教訓に、心からのお礼をいいました。」

みんなは、この話にも心をうたれました。ジョウは、もう一つ、今のようない話をと望みました。おかあさんは、につこり笑つて、すぐに話しはじめました。

「むかし、食べたり着たり、なに不足のない四人の娘がありました。たのしみも、よろこびもありあまり、親切なお友達や両親があつて、愛されていたのに、娘たちは満足しませんでした。（ここで聞き手たちは、こつそり見かわして、お裁縫に精を出しました）娘たちはよくなろうと決心するのですが、やりとげることができないで、これがあつたらとか、

あれができたらかと、考えました。それで、あるおばあさんに、幸福にしてくれるまじないがあれば教えて下さいといいましたら、あなたがたが満足に思うとき、恵みということを考えて感謝なさいといいました。（ここでジョウは、なにかいいたそうでしたが、話がおわらないのでいうのをやめました）それで、りこうな娘たちが、その言葉を試してみますと、じぶんたちがいかによい暮しをしているかわかってびっくりしました。一人は、お金持でも家のはじと悲しみは救えないということがわかりました。一人は、貧乏でも、若くて元気なら、じぶんのたのしみもたのしめない、気むずかしいおばあさんより、ずっと幸福ということがわかりました。一人は食事の仕事はいやだけど、食物をもらって歩くのは、つらいということがわかりました。一人は、めのうの指輪よりもお行儀のいいほうがいいということがわかりました。それで、四人の娘たちは、ぐちをやめ、さずかった恵みを感じ、もっとよくなるうと考えました。」

「おかあさんは、あたしたちのお話をとって、あたしたちをお説教なさるの、ずるいわ。」と、メグがいますと、ベスがいました。

「あたし、そういうお説教すきだわ。おとうさんがよく話して下さいわ。」

エミイは、つぶやくように、

「あたし、そう不平いわないけど、もっとつつしむわ。スージーさんのやりそこないで、あたしほんとに教えられたんですもの。」

すると、ジヨウが、ふざけて、

「おかあさんの教えは、よかつたわ。もしか忘れたら、チヨール人のおじいさんみたいに、子供らよ慈悲ちゆうもんを、ようくかんげえねせえと、おかあさん、おっしやつて下さい。」と、いいました。これでおもしろい空気が、あかるくなりました。

第五 おとなりどうし

「まあ、ジヨウ、なにをなさるの？」

ある雪のふる午後、妹のジヨウがごむ靴をはき、古ばけた上衣に、ずきんといういでたちで、ほうきとシャベルをもつて広間へ出て来たのを見て、そうたずねました。

「運動にいくの。」

「今朝、二度も散歩して来たんだもの、たくさんだわ。家にいて火にあたりなさいよ。」
「いやなこった。ねこじやあるまいし、火のそばでいねむりなんかするの大きい。あた

し冒険がすき、これからなにかさがしに行くの。」

メグは炉に足を出して本を読み、ジヨウは通路の雪をどけはじめました。ところで、マーチの邸はローレンスの邸と、生垣でへだてられていました。いずれも、森や芝生の多い、いなかめいた気分のなかにつつまれていましたが、ローレンスの邸では、大きな馬車をいれる納屋や、温室や、りっぱな石づくりの家があるのに、マーチの邸には、赤茶けたふるびた家が見すばらしくあるだけでした。

けれど、ローレンスのりっぱな家はなんとなくさびしく、ここにおじいさんと、ただ二人で住むぼっちゃんに友だちもありませんでした。ジヨウは考えました。「かわいそうに、少年の心のわからないおじいさんから、お部屋にとじこめられているんだわ。ローリイには、にぎやかな、わかわかしい遊び相手がいるんだわ。」

ジヨウはなんとかして、ぼっちゃんを誘い出そうと、冒険をもくろんでいると、ローレンス老人が馬車で出かけました。すてき、すてき、ぼっちゃん一人ならと、生垣のところまで道をつけていくと下の窓にはカーテンがおりていて、召使の姿も見えませんが、上の窓には、やせた手と、ちぢれた髪の毛の黒い頭が見えました。

「かわいそうに、病気でねているんだわ。こんなさびしい日に。」

ジヨウは、一かたまりの雪を窓を目がけてなげました。黒い頭がすぐにふりむき、大きな目がいきいきとかがやきました。

「いかが、御病気なの？」

ローリイは、窓を開けてしやがれ声で答えました。

「ありがとう。いくらかいいんです。ひどいかぜをひいて、一週間ねちやいました。」

「まあ、お気のどく、なにして遊んでいらつしやるの？」

「なにもしてません。家はお墓みたい。」

「本は読まないの？」

「あんまり読みません。読ませてくれないんですもの。」

「だれにも読んでいただけはないの？」

「おじいさんに、ときどき。でもぼくの本はおじいさんにおもしろくないし、ブルック先生に頼むのは、いつだつていやだし。」

「じゃ、お見舞に来る人もいないの？」

「いません。男の子はがやがやさわぐし、ぼくは頭がよわってるんです。」

「女の子はいないの、本を読んだりなぐさめてくれる女の子は？ 女の子は静かだし、看

護婦ごっこすきよ。」

「そんな女の子知りませんもの。」

「あんた、あたしを知ってる？」

ジョウが笑うと、ローリイがさげびました。

「知ってる！ あんた来てくれる？」

「ええ、あたしは、おとなしくも、やさしくもないけど、おかあさんがいいとおっしゃったらいくわ。」

ジョウは、ほうきをかついで家へ帰りました。そのあいだに、ローリイはお客を迎えるために、髪にブラシをかけ、あたらしいカラをつけ、五六人の召使たちに部屋をかたづけさせました。やがて、ジョウが玄關にたちベルをおしました。ローリイは、こころよくジョウを迎えました。

ジョウは、親切のあふれた顔をして、片手にはおおいをした皿をもち、片手にはベスの三匹の子ねをだいてあらわれました。

「おじやまにあがりました。荷物までしよって、おかあさんがよろしくって。メグはお手製の白ジェリイをお見舞ですって。おいしいんですよ。それから、ベスはねこをおなぐさ

みにつれていくようにって。お笑いになるでしょうが、ことわりきれなくて。」

ローリイは、ねこを見て笑い、はにかみを忘れ、すぐにうちとけました。ジョウが、皿のおおいをとると、緑の葉のわと、エミイの秘蔵のジエラニユームの赤い花をそえた白ジエリイがあらわれました。

「ああ、きれいだ、食べるのがおいしい。」

「たいしたものではないの。ただ、みんながお目にかけてかっただけ。でも、あつさりしてるからめしがれてよ。それにやわらかいから、のどが痛くても、するつとはいってしまわ。それはそうとこの部屋なんて気持がいいんでしよう。」

「女中が女中なので、片づいていなくて。」

「じゃ、あたし二分間で片づけてあげるわ。」

ジョウは、てきぱきとはたらきました。部屋の感じが一変したので、ローリイは満足してお礼をいいました。

「さあ、今度はぼくがお客さまをよろこばせなくちゃ。」

「いいえ、あたしはあなたをなくさめに来たのよ。なにか本を読んであげましょうか？」

「ありがとう、でもそこにある本、みんな読んでしまったんです。だから、あなたさえよ

かつたら、お話のほうがいいんだけど。」

「いいですとも、一日だって話すわ。バスはあたしがおしゃべりをはじめたら、いつやめるかわからないなんていうのよ。」

「バスさんというのは、ときどき小さなバスケットをもって出ていく、あかい顔の。」

「ええ、いい子ですわ。」

「すると、あの美しいかたがメグさんで、まき毛のかたがエミさんですね？」

「どうしてござんじ、そんなによく。」

ローリイは、さつと顔をあかめました。

「だって、ここにいます。たのしそうなみなさんがよく見えるんですもの、夜、カーテンを閉め忘れた窓ごしに、おかあさんをかこんで、いらっしやるところも見えます。おかあさんのお顔は、やさしく花のようです。ああ、だけど、ぼくには母はいない。」

母の愛にうえた少年の目は、ジョウのあたたかい胸をうごかしました。すなおなジョウは、じぶんが、いかにゆたかな家庭の愛に恵まれているかを感じたので、よろこんでそれを病気のさびしいかれに、分けあたえたいと思いました。

「では、カーテンをおろさずにお好きだけ見せてあげます。いいえ、それより家へいら

つしやい。おかあさんはいい人よ、ごちそうたくさんして下さるわ。バスは歌をうたい。エミイはダンスをする。メグとあたしはおかしなお芝居の道具を見せて笑わしてあげるわ。そうして、みんなでおもしろく遊ぶのよ。でも、おじいさん来させて下さる？」

「あなたのおかあさんが頼んで下さればね。おじいさんは親切で、ぼくのすきなことをさせてくれます。」

ローリイは、マーチ家の人たちのことについてたくさんの興味をもち、ジヨウの口から姉妹たちのことを聞いてうれしそうでした。ことに、ジヨウが、せっかちの、気むずかしいお婆さんの世話をしにいく話をおもしろがって、そのお婆さんのところへ気どった老紳士が結婚申込に来たとき、むく犬がその紳士のかつらをひっぱって、はげ頭がむき出しになった話では、ころげまわって、涙が出るほど笑ったので、女中がおどろいて、のぞきに來たくらいでした。

ジヨウは、話が成功したのでとくいになって、家のお芝居のこと、いろんな計画のこと、おとうさんのこと、その希望や心配、家のなかの一ばんおもしろいことなど、のこらず話しました。それから本の話になりましたが、ジヨウはローリイがやはり本ずきで、じぶんよりもたくさん読んでいるのをうれしく思いました。

「そんなに本がすきなら、おじいさんの文庫へいきましよう。」

文庫は、ジヨウをよろこばせました。ずらりとならんだ本のほかに、絵や彫刻や古い品物のはいつたたんすがあり、ゆつたりしたイスがそなえてありました。ジヨウは、そのビロウド張りのイスに腰をかけて、

「まあ、りっぱだ！ あなたは、一ばんこの世でしあわせなほっちゃんですよ！」と、いいましたがそのときベルが鳴りました。あ、おじいさんだと、はっと、しましたが、まもなく女中が来て、お医者さんが来たといい、ローリイは診察してもらいに出ていきました。ジヨウは、ほっとして、文庫のなかを見物しましたが、老紳士のりっぱな肖像画の前に足をとめてながめました。そのとき、扉が開いたけれど、ジヨウはふり返ってもみずに、

「この人、親切そうな目をしていらつしやるから、あたしもうこわくないわ。でも口もとはきつそうだし、とても意地っぱりみたいね。うちのおじいさんほど、きれいではないけど、あたし好きだわ。」

すると、うしろで声がしました。

「どうも、ありがとう。」

ふりかえると、ローレンス老人が立っていたので、ジヨウはちぢみあがりました。顔は

あかくなり動悸がうちます。逃げ出すのに卑怯だし、ふみとどまることにしたものの、ほんものの老人の目は、肖像画の目よりも、もっとやさしかったので、そんなにこわくなくなりました。

「そうすると、あなたは、わたしがこわくないのかね？」

「そんなに。」

「あなたのおじいさんほど、きれいではないというのだね？」

「ええ、きれいではありませんわ。」

「わしは、意地っぱりかね？」

「そう思います。」

「それなのに、わしが好きだったって？」

「ええ、好きです。」

この答えが老人をよろこばせました。老人はジョウの手をにぎり、その顔をのぞきこんで、

「顔はにいていなくても、あなたは、りっぱなおじいさんの性質をうけついでいる。おじいさんは勇気があり正直だった。わたしは、あのかたと、友だちであったことを誇りに思っ

ていますわい。」

「ありがとうございます。」

ジヨウは、気がらくになりました。

「あなたは、家の子と、なにをしていなさったのかね？ ええ？」

「近所づきあいをしようとしただけです。」

「あなたは、あの子を元気づける必要があるとお考えかね？」

「ええ、すこしさびしそうですもの。わかいお友だちがあるといいでしょう。わたしたち、女ですけど、お役にたちたいと思います。あなたのとどけて下さったりっぱなクリスマスプレゼントを、とてもありがたく思っていますのよ。」

「いや、あれはあの子の考えたことじや。ところで、あの気のどくな婦人はどうしたな？」
「らくに暮していますわ。」

「そうか、おかあさんのやり口は、いつも貧乏な人たちを恵んだおじいさんのやり口とおなじだ。いつか天気の良い日に、おかあさんをお訪ねしたいとおいて下され。ほら、お茶のベルだ。さあいっしょにお茶をのんで、近所づきあいをしてもらおう。」

ローレンス老人は、礼儀正しくジヨウにうでをさし出し、二人はうでをくんで階段をお

りていきました。すると、そこへローリーが帰って来て、そのありさまを見てびっくりしました。まったく、これは考えることもできないことでした。

老人は、四はいのお茶をのむ間、あまりしゃべりませんでした。老人は、ローリーがジヨウと快活にしゃべって、顔が今日にかぎって、あかくいきいきしているのを見まもっていたからです。

「ふむ、この娘のいうとおり、孫はさびしいのだ。今日、孫はかわった。よし、この家の娘たちが、孫をどうするか見ていよう。」

老人も、ほんとは気さくで、こだわりがない人だったので。だから、孫のことも理解することができました。お茶がすむと、ジヨウは帰るといい出しましたが、ローリーはひきとめて、ジヨウを温室へつれていき、りよう手にもてないほど、美しい花をたくさん切って、

「これ、おかあさんにあげて下さい。そして、おとどけ下すつたお薬、とても気に入りましたとおっしゃって下さい。」

客間へ帰ったとき、老人は炉の前に立っていました。ジヨウの目は、そこにあるグラウンド・ピアノにすいつけられました。

「あなた、ひくの？」

「ときどき」と、ローリイは、ひかえ目に答えました。

「今、ひいてちょうだい。帰ったらバスに話してやりたいから、聞いていきたいの。」

「あなた、さきにひかない？」

「あたしだめなの。音楽はすきだけれど。」

ローリイがひきました。ジヨウは花たばに鼻をおしつけながら、耳をすましました、ローリイが、じょうずなのに、ちつとも気どらないので尊敬をよせました。ひきおわってから、あまりほめたのでローリイはまっかな顔をしました。

「いや、ほめるのはもうたくさん。この子の音楽はまずくはないが、もっとほかのだいじなことに、身をいれてもらいたいのだじや。ああ、もうお帰りか。ありがとう、またお出で、おかあさんによろしく。では、さよなら、お医者者のジヨウさん。」

老人の握手はかたかったが、なにか気にいらぬようすでした。あとで、ローリイにたずねたら、ぼくがピアノをひいたからだといいました。なぜかというと、いつか話すといいました。ローリイは、

「また、来てね。」と、名残りおしそうでした。

「あなたが、よくなったら、家へ来るといふ約束をすれば。」

「ええ、いきます。」

ジヨウが帰つて来て、のこらず報告すると、みんなもおしかけたくなりました。マーチ夫人は、おとうさんのことを忘れないでいる老人と話したかつたし、メグは温室が歩きたかつたし、ベスはグラント・ピアノに心ひかれ、エミイはりっぱな絵や彫刻が見たかつたのです。

「おかあさん。ローレンスさんは、なぜローリーさんがピアノをひくのをきらうのですう？」と、せんさく癖をジヨウが出しました。

「よく知らないけど、ローリーさんのおとうさんが、イタリアの女の音楽家と結婚なされたのをきらうからでしょう。ローリーさんがまだ小さいとき、両親がなくなつたので、おじいさんがひきとつたわけですが、おかあさんのような音楽家になりたいなどという、望みを起されたら、こまるからでしょう。」

「まあ、小説みたいね。」と、メグ。すると、すぐに、ジヨウが

「まあ、いやだ。音楽家になりたければならせて、いやな大学にいかせて、苦しめなくてもいいのに。」

ひとしきり、ローリーのことでは話はずみました。話のすえに、メグがいました。

「夜会であつたけど、たしかにあなたの話のとおり、ローリーは、お作法を知ってるわ。おかあさんがあげた薬つて、ちよつと、気のきいたいいまわしね。」

「白ジェリーのことでしょう？」

「まあ、なんておぼかさんでしょう！ あなたのことを、おっしやつたのよ。」

「そうなの。」と、ジョウは、思いがけないというようすで目をまるくしました。

「あんたみたいな人つてあるかしら？ お世辞をいわれてわからないんですもの。」

「そんなばかなこといいっこなしよ。お世辞をいうなんて考えずに、かあさんのないぼつちやんをみんなで親切にしてあげましょう。ローリー、遊びに来てもいいでしょう、おかあさん？」

「ええ、ええ、けっこうです。それから、メグさん、子供はできるだけ、いつでも子供でいるほうがいいのよ。」

「あたし、じぶんを子供だなんていわないねまだ十三にもなっていないんですもの。」と、エミイがつぶやきました。

「ベス、あなたはどうか？」

「あたし、あの巡礼ごつこのこと考えていたの。おとなしくなろうとして、失望の沼をとおおり、試練の門をぬけて、けわしい山をのぼっていくことだの、あのりっぱなものたくさんあるローレンスさんの家が、あたしたちの美しい宮殿になるかもしれないってことだの、考えていたの。」

「あたしたちは、まあライオンのところまで来ることができたんです。」と、ジヨウは、ベスの言葉にいくらか賛成らしく答えました。

第六 美しい宮殿

大きな家は、とうとう美しい宮殿になりました。けれど、みんながそこへいくのに、かなりの時間がかかり、ことにベスがライオンのそばをとおりぬけるのに、かなり骨がおれました。そして、ローレンス老人は、一ばん大きなライオンでしたが、訪ねて来て、娘の一人一人に、おどけ言葉や親切な言葉をかけ、おかあさんとむかし話をしてからは、もうだれも老人をこわがりませんでした。もう一つのライオンは、こちらが貧乏で、むこうが金持ということで、それもそのうちに、ローリイが、貧乏でも、愛のこもった家から受け

るなぐさめを、どんなにありがたがっているかがわかったので、じぶんたちがローレンスの家から受けるものを、べつに恐縮しないでもいいと思うようになりました。そして、そこに春の草のめばえのように、あたらしい友情がもえました。

ローリイは、今までおかあさんの味も、姉妹の味も知らなかったもので、マーチ家にみなぎるゆたかな、あたたかなものに心をひかれ、ひまさえあると、遊びに来ました。それを心配してブルック先生は老人へくわしく告げました。

「いや、かまわん。遊ばせておくさ。あとでとりかえせばいい。マーチ夫人の意見のおお、あまり勉強させすぎたのがいけなかったのだ。マーチ夫人がよくやってくれる」

老人は、もうわかっていました。そして、みんなはどんなにおもしろく遊んだでしょう！ お芝居、そり遊び、氷すべり、にぎやかな夜会、たのしい談話。マーチ家からも三人の姉妹がおしかけ、メグは温室で花たばをつくり、ジョウは文庫で本をむさぼり読み、エミイは絵をうつしました。ただ、バスだけは、グラランド・ピアノにあこがれながら、老人をこわがって、逃げて帰りました。老人は、そのことを知って、わざわざ訪ねて来ておかさんにいいました。

「ローリイは、ピアノを怠けています。やりすぎたから、いいあんばいなのですが、ピ

ノは使わんといかん。どなたか来て使ってもらえんかな、いつはいつて来てもいいし、口をきかんでもいい。だまって来て、だまってひけばいいんだが。」

聞いていたベスは、もうたまらなくなつて、

「あたしベスです。音楽が好きです。おじやまでなければ、まいりたいのですが」

「どうぞ。どうぞ。半日だれもないんだから、えんりよなく、ピアノを使つてもらえれば、こちらからお礼をいわねばならん。」

ああ、ベスは顔をほてらし、ローレンスさんの手をにぎり、お礼の言葉がいえないので、ただきつくにぎりしめました。老人は、そつとベスの髪に口をあてて、

「わしには、こういう娘があつた。ああ、かわいい子じや、さよなら、おくさん。」

老人が大いそぎで帰つていくと、ベスはおかあさんといつしよによるこび、そのうれしいニュースを仲よしの人形たちに告げに二階へかけあがっていきました。その晩、ベスは今までにない、たのしさでうたいました。あくる日、老人とローリイが出かけたのを見とどけたベスは、こつそりと、客間へしのびこみ、ふるえるゆびでピアノをひきました。おお、その美しい音、ベスはうっとりとなり、よろこびはてしなく、やすまずにひきつづけ、ハンナが食事のむかえに来るまで手をやめませんでした。その後、ベスはまい日のように

生垣をくぐり、客間にしのびこんでひきました。ベスは、老人がそのしらべを聞くために、じぶんの部屋の扉を開けることも、新しい音譜をそなえておいてくれることも、ローリーが広間について女中たちの来るのをおっぱらってくれることも知りませんでした。ただ、ベスは、じぶんの望みのかなったことを感謝して、まことにたのしかったのであります。

二三週間たちました。ある日、ベスはおかあさんにいいました。

「おかあさん、あたしローレンスのおじいさんに、スリッパを一つ、つくってあげたいの。あたしお礼をしたいんだけど、ほかにどうしていいかわからないんです。」

おかあさんは、にっこり笑って、

「ええ、ええ。つくっておあげなさい。きつとおよろこびになるでしょう。みんなも手伝ってくれるでしょうし、かかるお金は、おかあさんが出してあげますよ。」と、いいましたが、おかあさんは、ベスがめつたにおねだりをするのがないので、今、ベスの望みをかなえてやるのを、とくべつうれしく思いました。

ベスは、メグやジョウと相談して、型をえらび、材料をととのえて、スリッパをつくりはじめました。紫紺の布地に、しなやかな三色すみれの花をおいたのが、たいそうかわいいと、みんながいいました。ベスは、手が器用でしたし、ほとんど朝から晩までかかりき

りでしたから、まもなくできあがりしました。それから、バスはごくみじかい手紙を書き、ローリイに頼んで、ある朝、老人がまだ起きないうちに、こつそり書斎のテーブルの上に、スリッパといっしょに、のせておいてもらいました。

バスは、心待ちに、待ちましたが、その日も、つぎの日の朝も、なんの返事もありません。きつと老人をおこらせたのだと、バスは心配しはじめました。けれど、その日の午後、バスがちよつとお使いに出た帰りに、思いがけないことが起りました。バスが家のちかくまで来たとき、四つの頭が客間の窓から、見え、たくさんの手がふられ、いつせいにさけぶ声が耳をうったのです。

「ローレンスさんから御返事よ！」

バスは胸をとどろかせながら、いそいで帰って来ました。すると、姉妹たちは扉口のところにて待っていて、バスをつかまえ、わいわいいいながらかついで、客間へつれていきました。

「ほれ、あれよ！」と、みんなが、ゆびさすほうを見たとき、バスはうれしいのと、おどろいたので、まっさおな顔色になりました。ああ、そこには、小さなキャビネット・ピアノがおいてあって、ぴかぴかしたふたの上に「エリザベス・マーチさん」にあてた手紙

がのつていました。

「あたしに？」と、ベスはジョウにつかまり、たおれそうな気がしながら、あえぐようにいいました。ジョウは、手紙をわたしながら、

「そう、あなたによ、いい方ね、世の中で一ばんいいおじいさんね、かぎも手紙のなかにあるわ。」といいました。

「読んでちょうだい、わたし読めないわ。へんな気がして、ああ、とてもすてき！」と、ベスはそのおくりものに、すっかりどぎもをぬかれてしまって、ジョウのエプロンに顔をかくしました。ジョウは、手紙を開きましたが、最初の言葉を見て笑い出しました。そこには、

「マーチさん、親愛なるおくさん」と、書いてあったからです。

「まあいいこと！ あたしにも、だれかがそんなふうに書いて手紙くれるといいわ。」と、エミイがいました。エミイは、こういうむかし風の書き出しは、たいそう上品のように思われました。

「小生これまでに、かず多くスリツパを使用したし候が、あなたよりおくられしスリツパのごとく、小生に似合うものこれなく、三色すみれ、すなわち心を安める花は、小生の愛

する花にて、やさしきおくり主を常に思い起させてくれるものと存じ候。よつて小生は小生の負債をはらいたく、なにとぞこの老紳士の小さき孫のものたりし、あるものを、あなたにおくることをお許し願ひ上げ候。心よりの感謝と祝福をこめて、あなたによるこんでいる友だちでもあり、いやしき召使の、ジェームス・ローレンス。」

「ねえ、ベス、あなた、じまんしてもいいわ！ ローリーが話しただけど、おじいさんは、亡くなつたお孫さんがすきで、そのお孫さんのものはちゃんとしまつておおきになるんですつて。そのピアノを、あなたに下すつたのよ。大きな青い目をして、音楽が好きなためよ。」

ジヨウは、そういつて、今までに見たことがないほど、たかぶつて、ふるえているベスを、おちつけようとしてました。すると、メグも、

「ごらんなさい。このローソク立て、まんなかに金のばらのあるみどり色の絹のおおい、きれいな楽譜かけに、腰かけと、みんなそろつてるわ。」と、楽器を開けて、そのきれいなものを見せながらいいました。

そのとき、

「さあ、ひいてごらんなさいまし、かわいいピアノの音を聞かして下さい。」と、家族の

よろこびにもかなしみにも、いつでも仲間入りする女中のハンナがいました。

そこで、バスがひきました。みんなは口をそろえて、こんないい音は聞いたことがないといいました。それは、あたらしく調律されて、調子がととのっていました。ああ、なんというすばらしい音色だったでしょう。

「おじいさんとこへ行って、お礼をいわなくちゃいけないわ。」と、ジョウが、じょうだんのつもりでいいました。むろん、はにかみ屋のバスが、ほんとにいくとは思わなかったからですが、バスは、

「ええ、いくわ、今すぐ」と、行って、庭におり、生垣をくぐり、ローレンス邸の扉を開けてはいつていきました。これには、みんなは、あきれてしまいました。バスがそれからどうしたかを知れば、もつとおどろいたにちがいありません。というのは、バスは書斎の扉をたたき、おはいりという声を聞くと、はいつていき、おどろくローレンスさんのそばへ立ち、手をさし出しながら、

「あたし、お礼を申しに来ました。」と、いいましたが、やさしい老人の目につきあたって、もうあとの言葉が出なくなり、いきなり、老人の首にだきついて、じぶんの唇をあてました。

老人は、たとい、屋根がふいにふきとばされても、もつとおどろきはしないでしょう。老人は、すっかりおどろきました。それがうれしく、そのかわいい唇づけで、いつものふきげんは消えうせてしまいました。老人は、バスをじぶんのひぎの上にのせて、そのしわだらけのほおを、バスのぼら色のほおにすりよせ、まるでじぶんのかわいい孫娘が、生きかえつて来たような気持になりました。バスは、そのときから、もう老人をこわがらなくりました。そして、まるで生れたときから、ずっと知っている人に話すように、やすらかな気持で話しました。なぜなら、愛はおそれをおいのけ、感謝は誇りをおしつぶすからです、バスが家へ帰るとき、老人は門まで送り、あたたかい握手をしてくれました。そして、いかにもりっぱな軍人らしく帽子に手をかけて、敬礼をし、堂々とひきかえしてきました。

姉妹たちは、そのありさまを見て、おどろくとともに、うれしくてたまりません。ジョウは、じぶんの満足をあらわすために、おどりあがってダンスをはじめ、エミイはびつくりして、窓からころげおちそうになり、メグは手をあげて叫びました。

「まあ、この世の中は、とうとうおしまいが来たようね！」

第七 はずかしめの谷

ある日、ローリイが馬にのつて、家の前をむちをふつて通りすぎるのを見て、エミイがいました。

「ローリイさんが、あの馬につかうお金のうち、ほんのすこしでもほしいわ。」

メグが、なぜお金がいるのか尋ねますと、

「だって、わたしたくさんお金がいるの、借りがあるんですもの、お小遣は、あと一月もしないともらえないし。」

「借りがあつて？ なんのこと？」

メグは、まじめな顔になりました。

「塩漬のライム、すくなくつても、一ダースは借りがあつたの。それに、おかあさんは、お店からつかけでもつて来るのいけないとおっしゃるし。」

「すっかり話してごらんなさいよ。」

「今ライムがはやつているの？」

「ええ、みんなライム買うわ。メグさんだって、けちだと思われなくなかったら、きつと

買うわ。そして、みんな教室で机のなかにかくしておいてしゃぶるの。お休み時間には、鉛筆だの、ガラス玉だの、紙人形やなにかと、とりかえっこするの。また、好きな子にはあげるし、きらいな人の前では見せびらかして食べるの。みんなかわりばんこにごちそうするの、あたしも、たびたびごちそうになったわ。それをまだお返ししてないの、どうしてもお返ししなければねえ、だってお返ししなければ顔がつぶれてしまうわ。」

「お返しするのに、どのくらいいるの？」

メグは、財布をとり出しながら尋ねました。

「二十五銭でたりますわ。あまったぶんで、おねえさんにも、ごちそうできますわ、ライム好き？」

「あまり好きじゃないわ。あたしのぶんもあげます。では、お金、できるだけ長く使うのよ、ねえさんだって、もうそんなにないんですから。」

「ありがとう。お小遣のあるの、いい気持ねえ、みんなにごちそうしてあげるわ、わたしこの週は、まだ一度もライム食べないわ。ほんとは食べたいけど、お返しできないのに、一つでもいただくの気がひけるわ。」

つぎの日、エミイはいつもよりすこしおそく学校へ行きました。けれど、しめった、と

び色の紙づつみを机のおくにしまう前に、みんなに見せびらかしてしまいました。すると、それから五分とたたぬうちに、エミイが二十四のおいしいライム（エミイはその一つを学校へ来る途中で食べました。）をもっていて、それを大ぶるまいするといううわさが、たちまち仲間につたわり、お友だちの、エミイへのおせじは、ものすごいものとなりました。ケティはつぎの宴会によぶといいましたし、キングスレイは、つぎのお休み時間まで、時計を貸してあげるといいましたし、ライムをもっていないと行って、エミイをあざけつたことのあるスノーという、いじわるの子もたちまち好意をよせて、エミイの得意でない算数を教えてやるようになりました。けれど、エミイは、スノーのいったわる口を忘れてはいけませんでした。それで、きゆうにそんな親切はむだよ、あなたにあげないという、電報を発して、スノーの希望をペしやんこにしてしまいました。

ところが、ちょうどその日、ある名士が学校へ参観に来ました。そして、エミイのかいた地図がおほめにあずかりました。その名誉にエミイは得意になり、スノーははげしい苦しみを味わいました。そこで、名士が教室から出ていくと、重要な質問でもするようなふうをして、デビス先生のそばへいき、エミイがライムを机のなかにかくしていることを告げました。

デビス先生は、きびしい先生で、チュウインガムのはやったときも、とうとうやめさせてしまいましたし、小説や新聞をもつて来ると、とりあげてしまいました。生徒が手紙をやりとりすることもよさせました。ですから、ライムがやりだすと、ライムをもつて来てはいけない、もしもつて来た者を見つけたらむちでうつと、おごそかにいわたしたのです。それは、つい一週間ほど前のことでした。

それに、この日、先生はたしかにきげんがわるかったのです。それで、スノーの告げたライムという言葉は、まるで火薬に火をもつていったようなものでした。

「みなさん、しずかに！ エミイ・マーチ、机のなかのライムをもつてここへ来なさい！」
となりになっていた生徒が、ささやきました。

「みんなもつていくことないわ。」

そこで、エミイはす早く半ダースほどを、つつみからふり落して、先生のところへもつていきました。先生は、このライムのおいが大きらいでしたから、顔をしかめて、

「これで、みんなですか？」

「いいえ。」と、エミイは口ごもりました。

「のこりをもつて来なさい。」

エミイは、じぶんの席へ帰り、いわれたとおりにしました。

「たしかに、もうのこっていませんか？」

「うそ、いいません。」

「よろしい、それでは、このきたならしいものを、二つずつもって行って、窓からすててしまいなさい。」

このはずかしめに、顔をあかくして、エミイは六度も窓へ往復しました。ライムがすてられると、窓の下の往来から子供たちのよろこびの声が起りました。みんなは、その声を聞いて、ライムをおしみ、無情な先生をにくみました。エミイが、すっかりライムをすててしまうと、えへんと、せきばらいをして、きびしい顔つきでいいました。

「みなさんは、一週間ほど前に、わたしがいい聞かせたことをおぼえているはずですよ。ところがこうしたことが起って、まことにぎんねんです。わたしはじぶんのつくった規則をまもります。さ、マーチ、手を出しなさい。」

エミイは、びつくりして、りよう手をうしろへまわし、かなしそうな、許しを乞うような目をしました。エミイは、先生のお気にいっていた生徒の一人でしたし、その嘆願の目つきは言葉よりもつよく、先生の心を動かしたようでしたが、だれかが、ちえっ！と、

舌うちする音がしたので、かんしゃくもちの先生は、エミイを許すことなんか、考えようともせず、

「手を出して、さあ！」と、宣告をしてしまいました。

エミイは、自尊心のつよい子でしたから、泣いたりあやまつたりするようなことはなく、頭をもたげひるむことなく、その手がはげしく五六度うたれるままに、まかしていました。けれど、人からうたれるのは、これがはじめてで、そのはずかしめは、エミイにとっては、先生からなぐりたおされたほどにも感じました。

「休み時間まで教壇の上に立っていなさい。」

デビス先生は、どこまでも、ばつを加えるつもりでした。

これもエミイにとつて、たまらないはずかしめでした。けれど、それをやらなければなりません。エミイは、その場にたおれそうになる足をふみしめて、その不名誉の場所に立ち、まつさおな顔をして立ちつづけました。一時間ほどにも思われる十五分がすぎ、先生が、

「休め、もうよろしい、エミイ」と、いったときには、もううたれた手の痛みを忘れ、うれしくてたまりませんでした。エミイは、だれにも口をきかず、ひかえ室へいき、じぶん

のものをひつつかんで二度と来るものかと、怒りの言葉をもらして、立ち去りました。

エミイが、家へ帰ったとき、すっかりしよ氣ていました。やがて、ねえさんたちが帰ってきました。ねえさんたちは話を聞いてすっかりふんがいました。

メグは、エミイのはずかしめられた手を、リスリンと涙で洗ってやり、ジョウは、すぐにデビス先生をしばりあげるといいました。ベスは、じぶんのかわいいねこも、こんなときのエミイにはなぐさめにならないと、思いました。ハンナは、わる者めと、いって、げんこをふりあげ、夜の食事のじやがいもが、わる者でもあるように、すりこ木でつぶしました。ただ、おかあさんだけは、あまり口もきかず、心をいためていたようでしたが、エミイをやさしくなぐさめました。

エミイが逃げて帰ったことは、親しい友だちのほか、だれも氣が付きませんでした。けれど、よく氣のつく生徒たちは、デビス先生が、その日の午後からたいへんやさしくなり、それでいていつになくびくびくしているのに氣がきました。ちょうど授業のおわるころ、こわい顔をしたジョウが来て先生に母の手紙をわたしました。

それから、のこっていたエミイのもちものを一まとめにまとめると、それをもって帰っていききました。

その晩、おかあさんがいいました。

「エミイ、退学させました。むちでぶつことには賛成できません。デビス先生の教育方針にも感心できないし、友だちもためにならないようです。けれど、ほかの学校へかわることは、おとうさんにうかがってからでないとできません。だから、まい日、これからバスといっしょに勉強するんです。ただ、あなたがライムを机のなかにいれていたことは、同情できません。規則をやぶったのですから。」

「ね、おかあさんは、あたしがあんなふうに、人の前ではじをかかされたのを、あたり前と思っというらっしゃるんですか？」

「あやまちを改めさせるのに、おかあさんならば、あんなやり方をしません。ただ、あなたは、このごろ、すこしうぬぼれが強くなっていくようです。なおさなくてははいけません。あなたは、才能も素晴らしい性質ももっているけど、それを見せびらかしてはだいなしです。へりくだるといいう気持、それがあなたをぐつと美しくするでしょう。」

そのとき、むこうで、ジョウと将棋をさしていたローリイが大声でいいました。

「そのとおり！ 音楽のすばらしい才能をもっているながら、じぶんでは気づかずにいる、あるおじょうさんを、ぼくは知っています、その人は、ひとりでいるとき、どんなりっ

ばな音楽を作曲しているのか知らずにいるし、そのことを人からいわれても本気にしませ
ん。」

ローリーのそばに立っていたバスが、それを聞いていました。

「そんなすてきな方とお友だちになりたいわ。きっと、あたしのためになる方よ、あたし
なんて、とてもだめ。」

ローリーは、いたずらっ子らしく、

「あなたは知っていますよ。その人は、ほかのだれよりも、あなたのためになっていま
すよ。」と、いったので、バスは顔をあからめ、はずかしがってクッションに顔をうめまし
た。

ジヨウは、バスをほめてもらったお返しに、ローリーに勝をゆずりました。バスはほめ
られてからは、いくらすすめられても、ピアノをひこうとしませんでした。ローリーは、
いいきげんで、たのしそうにうたいました。

ローリーが帰っていつてから、エミイは、

「ローリーは、なんでもできる方なの？」と、いうと、おかあさんが、

「教育もあり、天分もあるから、かわいがられて、増長しなければ、りっぱな方におなり

でしょう。」と、答えました。

「うぬぼれたりなさらないでしよう?」と、エミイが尋ねました。

「ちつとも。だから人をひきつけるのよ。」

「たしかに、気どらないのは、りっぱなことだわ。」と、エミイはしみじみいきました。

「教養とか才能は、へりくだっていても、あらわれて来ます。見せびらかさなくてもいいわけです。」

ジョウが、そのとき、

「あなたの帽子や服やリボンを、みんな一度に身につけて、人に見せびらかさなくてもいいわけね。」と、いったので、おかあさんのお説教は、にぎやかな笑い声のなかにおしまいとなりました。

第八 ジョウの原稿

エミイが、土曜日の午後、ねえさんたちの部屋へいくと、メグとジョウが外出の支度をしていました。ないしよらしいので、

「おねえさんたち、どこへいらつしやるの？」と、尋ねました。すると、ジヨウは「どこへだつていいじやないの、小さな子はそう聞きたがらないものよ。」と、つつけんどんにいいました。

「わかつたわ！ ローリイといつしよに、七つの城のお芝居を見にいらつしやるのね。あたしもいくわ。おかあさんは、見てもいいとおつしやつたわ。あたしお小遣もあるし。」
メグは、なだめすかすように、

「まあ、あたしのいうことをお聞きなさいよ。おかあさんは、あなたの目がまだなおつていないから来週バスやハンナといつしよに、いくといいつて。」

エミイは、あわれつぽい顔をして、

「いやだあ、おねえやんやローリイといく、半分もおもしろくないわ。ね、お願いだからいかせてよ。長いことかぜひいて家にはかりいたんですもの、ねえ、おとなしくしますから。」と、せがむのでした。

「いつしよにつれていつてはどう？ あつ着させていけば、おかあさんだつて、なにもおつしやらないでしょう。」と、とうとうメグが、しかたがないというようにいいました。
「それなら、あたしいかないわ。二人だけ招待されたのに、つれていくのは失礼だわ。」

このジヨウのいいかたや態度は、ますますエミイを怒らせました。靴をはきながら、エミイは、

「メグねえさんがいいっておつしやつたから、あたしいきます。じぶんで切符買うから、ローリイにめいわくかけません。」

「あたしたちのは指定席よ。と、いつて、あなた一人はなれていられないしき、そうすると、ローリイがじぶんの席をゆずるでしょう。それじゃ、つまらない。もしかしたら、ローリイが切符もう一枚買うかもしれないけど、それじゃずうずうしいわ。だから、おとなしく待つていらつしやい。」

ジヨウは、仕度にあわてて、針で指をさしたので、ますますふきげんになって、エミイをしっかりとつきました。

エミイは泣き出しました。メグがなだめていると、階下でローリイがよんだので、二人は、いそいでおりていきました。二人が出かけていくのを、エミイは窓から見おろして、おどかすようにさげびました。

「今に、後悔するわよ。ジヨウさん、おぼえていらつしやい！」

「ばかな！」と、ジヨウがやり返して、玄関の扉をぴしゃつと閉めました。

「七つの城」のお芝居は、とてもよかったので、三人はたのしく見物しました。けれど、ジヨウはときどき、きれいな王子や王女に見とれながらも、心にくらい影がさしました。妹が、後悔するわよといった言葉が、あやしく、耳にのこっていたからでした。

ジヨウとエミイは、前からよくはげしいけんかをしました。二人とも気がみじかく、かつとするとひどくめんどうなことになるのでした。けれど、二人とも長く怒ることはなく、けんかの後では、たがいによくなるうとするのですが、日がたつと、またくり返すことになるのでした。

二人が家へ帰ったとき、エミイは知らん顔をして本を読んでいた。ジヨウは、帽子を二階へしまいにいきましたが、この前けんかをしたとき、エミイがひき出しをひっくり返したので、たんすやかばんや、たなの上などをしらべましたが、なんともなっていないので、エミイがじぶんを許してくれたものと思いました。

けれど、それはジヨウの思いちがいであることが、あくる日になってわかりました。その日の午後ジヨウは血相をかえて、メグとベスとエミイが話しあっているところへ、とびこんで来て、息をきらして尋ねました。

「だれか、あたしの原稿とった？」

メグとベスは、いいえといいましたが、エミイは炉の火をつついてだまっていました。

「エミイ、あなたですね。」

「あたし、持ってないわ。」

「じゃ、どこにある？」

「知らないわ。」

「うそつき！ 知らないとはいわさないわ。さあ、早い白状なさい。白状しないか。」

ジヨウは、ものすごい顔でどなりました。

「いくらでも怒るがいいわ。あんなつまらない原稿なんか、もう出ないわよ。」

エミイは、どうにでもなれというような、いいかたでした。

「どうして！」

「あたしが焼いちやったから。」

「なに？ あんなに苦労して、おとうさんがお帰りになるまでに書きあげるつもりなの、あの大切な原稿を、ほんとに焼いたの？」

ジヨウは、まっさおになり、目は血ばしり、ふるえる手でエミイにとびかかりました。

「ええ、焼いたわ。昨夜、いじわるしたからよ。おぼえていらっしやいといったでしょう。」

「。」「
ジヨウは、悲しみと怒りに、かっとなつて、

「ばか、ばか！ 二度と書けないのよ。あたし一生あなたを許さない。」

メグもベスも、どうしようもありませんでした。ジヨウは、エミイの横つつらをひっぱたいて、部屋をとび出し、屋根部屋のソファに身を伏せて泣きました。

おかあさんは、帰宅してその話を聞き、エミイをしかったです。エミイはわるいことをしたと思いました。けれど、ジヨウの原稿は、五六篇のかわいいお伽話でしたが、文学的才分と全精力を数年間かたむけて書いたもので、ジヨウにとっては、とり返しのつかぬ損失でしたから、ジヨウは、お茶のベルが鳴ったとき、いかにもこわい顔をして出て来ました。エミイは、ありつたけの勇気をふるい起して、

「ジヨウ、ごめんなさいね、あたし、ほんとうにわるかったわ。」と、あやまりました。ジヨウは、ひややかに、

「許してあげるものか。」と、答え、エミイにとりあいませんでした。

だれも、この大事件のことを口にしませんでした。ジヨウがじぶんの怒りをやわらげるまで、なにをいってもしようがないからです。そんなわけで、その晩はたのしくなく、み

んなだまって針仕事をしました。おかあさんが、おもしろい物語を話しても、なにかもの足りなくて、家庭の平和は、すっかりみだされていました。おもくるしい気分は、メグとおかあさんがうたつても晴れませんでした。

おかあさんは、ジョウにおやすみなさいのキッスをしたとき、やさしい声で、

「ねえ、怒りを明日まで持ち越さないように、今夜中にきげんをなおしましょうね。おたがいに、ゆるし合い助け合いましょう。明日からは、またたのしくね。」と、ささやきましました。

ジョウは、おかあさんの胸に、顔をうずめました。悲しみと怒りを、涙で流したかったけれど、あまりにいたでは深く、とうとう頭をふり、エミイに聞えよがしに、

「あんまりひどいんですもの、許してやれませんわ。」

そういつて、ジョウは、さっさと寝室へいつてしまったので、その夜はおもくるしい気分でおわりました。

つぎの日も、おもくるしい気分は去らず、みんなつまらなそうでした。ジョウは、ぶんぶんして、ローリイを誘ってスケートにでもいつてみようと思いつて出かけていました。エミイは、じぶんのほうからあやまったのに、ジョウがまだ怒っているのです、なお気をわる

くしました。メグは、エミイにむかつて、

「あなたがわるかったのよ。大切な原稿をなくされたんですもの、なかなか許せないわ。だけど、いいおりを見て、あやまればいいと思うの。だから、あなたもスケートにいつてごらんさい。そしてジョウがローリイと遊んで、きげんがよくなったとき、ジョウにキツスしてあげるか、なにかやさしいこととしてあげるのよ。そしたら、心から仲なおりにしてくれるにちがいないわ。」

この忠告が気にいったので、エミイはいそいそと仕度をして、後をおいかけました。川までは、そんなに遠くなかったが、エミイがいったとき、二人はすべる用意ができていました。ジョウは、エミイのすがたを見ると、くるりとせなかをむけました。ローリイは、エミイの来たのに気がつかず、氷のあつさをしらべるために、そのひびきを聞きわけながら、用心ぶかく岸にそってすべっていききました。ローリイは、角をまがるとき、

「岸について来なさい。まんなかはあぶない。」

そういつて、すがたが見えなくなりました。

ジョウが、すべって、その角までいったとき、エミイはずっとはなれたところで、川のまんなかへすべっていききました。ジョウは、みような心さわぎをおぼえましたが、ふいに

氷のさける、ぱりつという音とともに水けむりをたて、エミイがりよう手をあげ、悲鳴とともに落ちこむのを見ました。その悲鳴に、ジヨウは心臓がとまると思うくらい、おどろきました。ローリイをよぼうとしましたが声が出ません。すると、なにかが、じぶんのそばを走ったと思うと、

「ぼうをもつて来て、早く、早く！」と、ローリイのどなる声が聞えました。

それから、ジヨウは、まるで夢中でした。ただし冷静なローリイのさしずのままになつて、おびえているエミイを救いあげることができました。

ふるえて、ぼとぼとしくをたらしながら泣いているエミイを、二人は家までつれて帰りました。ジヨウは、口ひとつきかず、青い顔をし、手にきずをし、服はさけたままで、とびまわり、なにかと用事をしました。さわぎがおさまった後、エミイは毛布にくるまって炉の火の前でねむってしまいました。

おかあさんは、エミイのそばにすわってましたが、ほつとして、ジヨウをよんで、手にほうたいをしてやりました。

「おかあさん、だいじよぶでしょうか？」

「ええ、けがもしていないし、かぜもひかなかつたようです。あなたが、よくくるんで、

大いそぎでつれて来てくれたからね。」

「ローリイが、みんなしてくれたのです。わたしは、エミイをほっといたから、一人ですべっていつて落ちたんです。もしかして死んだら、あたしのせいですわ。」

ジョウは、後悔の涙を流しましたが、それはもっと重い心の痛みからのがれることのできた、感謝の涙でもありました。

「みんな、あたしの、おそろしいかんしやくからですわ。ああ、どうして、こうなんでしょう。おかあさん。どうぞあたしを救って下さい。」

「ええ、ええ、救ってあげますよ。そんなに泣かないでね。今日のことよく覚えておいて、二度としないと誓いなさい。おかあさんだつて、じつは、あなたとおなじくらい、かんしやくもちなんですよ。それに、おかあさんはうち勝とうとしているんです。」

「まあ、おかあさんが？　だつて、一度だつて、かんしやくを起しなすつたの、見たことがありますわ。」

ジョウは、おどろしい目をまるくしました。

「なおすのに四十年かかりました。やつとおさえられるようになりました。ほとんど、まい日、怒りたくなるけど、顔に出さぬようになったのです。これからは、怒りたくならな

いようにしたいのですが、それには、もう四十年かかるかもしれません。」

ああ、その言葉はジョウウにとつて、どんなお説教より、はげしいおしかりより、よい教訓でありました。そして、四十年も祈りつづけて欠点をなくそうとしたおかあさんのように、じぶんもどうかしてこの欠点をなおしたいと思いました。

「ねえ、おかあさん、どういうやりかたなさるの？ 教えて下さい。」

「そう、あたしは、今のあなたより、すこし大きくなったころ、おかあさんをなくしました。あたしは、自尊心が強いので、じぶんの欠点をたれにうち明けることもできず、ただ一人で長い年月を苦しみました。なん度も失敗して、にがい涙を流しました。そのうちに、あなたたちのおとうさんと結婚して、しあわせになったので、じぶんをよくすることが、らくになりました。けれど、四人の娘ができ、貧乏になって来ると、またまたむかしのわるい欠点がでて来そうです。もともと、あたしは忍耐力がないので、娘たちがなにか不自由しているのを見ると、とてもたまらない気持になるんです。」

「まあ、おかあさん！ それじゃ、なにがおかあさんを救って下すつたんですか？」

「あなたのおとうさんです。おとうさんは、忍耐なさいます。どんなときも、人をうたがうことなく不平なく、いつも希望をもっておはたらきになります。おとうさんは、あたし

を助けなくさめ、娘たちの御手本になるように、教えて下すつたのです。だから、あたしは娘たちのお手本になろうとしてじぶんをよくすることに努めました。」

「ああ、おかあさん。もしあたしが、おかあさんの半分もいい子になれば本望ですわ。」
「いいえ、もつともつといい人になって下さい。今日味つたよりも、もつと大きな悲しみや後悔をしないように、全力をつくして、かんしゃくをおさえなさい。」

「あたし、やってみます。でも、あたしを助けて下さいね。あたしね、おとうさんは、とつてもおやさしいけど、ときどき真顔におなりになり、指に口をあてて、おかあさんをごらんになるのを見ましたわ。そうすると、おかあさんは、いつも口をむすんで、部屋を出ていらつしやいます。そういうとき、おとうさんに、おかあさんは、お気づかせになつたんですか？」

「そうなんです。そういうふうには、助けて下さいとお頼みしたんです。おとうさんは、お忘れにならないで、あのちよつとしたしぐさや、やさしいお顔つきで、あたしがきつい言葉を出しそうになるのを救つて下すつたのですよ。」

ジヨウは、おかあさんの目に涙があふれているのを見て、いいすぎたかしらと、心配になつて尋ねました。

「あたし、あんなふうになったの、いけなかったでしょう？ でも、あたし思ったこと、おかあさんにみんないってしまうの。とてもいい気持なんですもの。」

「ええ、なんでもおつしやい。そうやって、うちあけてくれると、おかあさんはうれしいのよ。」

「あたしは、おかあさんを悲しませたのではないかと思って。」

「いいえ、おかあさんは、おとうさんのことを話しているうちに、お留守ということがしみじみさびしくなり、おとうさんのおかげということを思ったりしたので。」

「だって、おかあさんは、おとうさんに従軍なさるように、おすすりめになったし、出発のときもお泣きにならなかつたし、留守になつてからも一度もこぼしたりなさらないし、だれの助けもあてにしていらつしやらないし。」と、ジョウは、いぶかしそうにいいました。

「あたしは、愛する御国のために、あたしの一ばん大切なものをささげたのです。どうしてぐちがいえましょう。あたしが人の助けがいらぬように見えるのは、おとうさんよりも、もつといいかたがおかあさんが慰め励まして下さるからなの、それは、天国のおとうさんです。天国のおとうさんに近づけば、人の知恵や力に頼る必要はなく、平和と幸福が生れます。さ、あなたもこのおとうさんのところへいきなさい。すべての心配や悲しみや

罪をもつて。ちようど、あなたがおかあさんのところへ心から信頼して来るように、」

ジヨウの答えは、ただおかあさんに、しっかりすがりつくことでした。そして、だまつて、心からある祈りをささげ、いかなる父や母よりも、いつそう強いやさしい愛で、すべての世の子供をむかえて下さる「おとうさん」に、近づいていくのでした。

エミイは、眠ったまま、ねがえりをうって、ため息をつきました。ジヨウは、今すぐに、じぶんの過失をつぐないたいと思うためか、今までにないまじめな表情をしました。

「あたし、かんしやくをつぎの日までもち越して、エミイを許さなかった。もしローリさんがいなかったら、とんだことになったんだわ。ああ、どうしてあたしは、こんなにいけないんでしょう？」

ジヨウは、エミイの上によりかかり、枕の上のみだれ髪をなでながら、そういいましたが、それが聞えたもののように、エミイはぼつちり目を開け、ほほえみをうかべて手をさし出しました。二人はなんともいいませんでした。毛布にへだてられながらも、しっかりと抱き合い、心こめたキスに、すべてを許し忘れてしまいました。

第九 虚栄の市

四月のある日、メグはじぶんの部屋で、いもうとたちにかこまれながら、トランクに荷物をつめこんでいました。おかあさんは、娘たちが年ごろになつたら与えようと考えて、むかしのはなやかだった時代の記念品のしまつてある杉箱を開けて、絹の靴下と、きれいな彫刻のある扇子と、かわいい青いかざり帯を下さしました。

あくる日は、うららかな天気で、メグはたのしい二週間の遠出に家を出ました。上流のマフォット家の客になりに行くのです。おかあさんは、あまりこの訪問をよろこびませんでした。メグが熱心に頼むし、サリイがよく面倒を見ると約束してくれたので、冬の間よくはたらいたごほうびの意味で許したので、メグは、上流社会の生活を味わう第一歩をふみ出したのであります。

マフォット家に客となつてみると、メグはそのすばらしい家や、そこに住む人々の上品さに、気をのまれてしまいました。その生活は、軽薄でしたが、みんなが親切でしたから、らかな気持になりました。すばらしいごちそうをたべ、りっぱな馬車で乗りまわし、上等な服を着かざつて、なにもせず遊び暮すことは、たしかに、たのしいことでした。それはメグの趣味にかない、メグはその家の人たちの、会話や態度や服の着こなしや、髪の毛

ぢらしかたなどを、まねしようと努めました。そして、金持の家の暮しのゆたかさにくらべると、貧乏なわが家の暮しが、いかにも味気なく不幸に見えて来ました。

メグは、マフオット家の、三人のわかいおじょうさんたちの氣にいつて、散歩、乗馬、訪問、芝居やオペラ見物、夜会など、いつもいつしよに、たのしい時間をすごしました。そして、ベルには婚約者があることがわかりましたが、メグはそれに興味をもち、ロマンチックなことに思えました。

マフオット氏は、ふとつた老紳士で、メグのおとうさんを知っていました。マフオット夫人も、やはりふとつた婦人で、メグをかわいがってくれ、「ひな菊さん」という名で、よんでくれました。

いよいよ、夜会があるという日、三人はみんなすばらしい服を着て、はしゃいでいるのに、メグはじぶんのポップルの服のみすぼらしさに心がおもくなりました。それでも、服のことなど、なんとも思っていないように、三人は親切にメグにむかって、髪をゆってあげようとか、かざり帯をしめてあげようとかいいましたが、メグはその親切のなかに、じぶんの貧しさへのあわれをみてとり、いつそう心は重くなるのでした。

そこへ、女中が花のはいつている箱をもって来ました。アンニイが、

「ジョージから、ベルへ来たんだわ。」と、いいましたが、女中は、手紙をさしだしながら、

「マーチさんへと、使いの者が申しました。」と、いいました。

「まあ、すてき。どなたから？ あなたに恋人があるとは知らなかったわ。」

みんなは、強い好奇心をいただきました。

「手紙は母から、花はローリーからですわ。」

「まあ、そうなの。」と、アンニイは、みような表情でいいました。

母からの手紙は、みじかいけれど、よい教訓でした。メグはポケットにしまいました。

また、花はしずんだ気持をひきたててくれました。その幸福な気持で、メグは、しだとばらをわずかとつて、あとは気前よくわけましたので、メグのやさしさに心ひかれたようでした。メグが、みどりのしだを髪にさし、ばらの花を胸にさしたので、服はそのためにくらかひきたつて見えました。

メグは、その夜、心ゆくまでダンスをしました。みんなが親切にしてくれ、歌をうたえばいい声だとほめ、リンカーン少佐は、あの目の美しい令嬢はどなたと尋ねましたし、マフォット氏は、メグの身体にばねみたいなものがある、ぜひメグとダンスするといいまし

た。

こうしてたのしくしていたのに、温室のなかに腰かけて、ダンスの相手がアイスクリームを持って来てくれるのを待っていたとき、うしろで話す話し声をふと聞いて、メグは気分をこわされました。

「いくつぐらいでしょう？」

「十七八かしら、」

「あの娘たちのうちの一人が、そういうことに、なつたらたいしたものですよ。サリイがいつてましたが、あの人たちは、このごろとても親しくしていて、それに、あの老人は娘たちに、まるで夢中になっているんですって。」

「それやマーチ夫人の計略ですよ。娘のほうではそんな気はなさそうだけど、」

そういったのは、マフォット夫人でした。

「あの子つたら、おかあさんからだなんてうそついて、花がとどいたら顔をあかくしたわ。いい服さえ着せたら、きれいになるでしょうに。木曜日にドレス貸してあげようといったら、あの子、気をわるくするかしら？」

「あの子、自尊心は強いけれど、モスリンのひどい服しかないのだから、気をわるくはし

ないでしょう。それに今晚の服をやぶくかもしれないから、貸してあげる口実になるわ。」
「そうねえ。あたしローレンスをよんで、あの子をよろこばしてあげましょう。そして、後で、からかってあげましょう。」

そこへ、ダンスの相手もどって来ました。メグは、今のうわさ話に怒りをもやし、すぐにも家へ帰って、おかあさんに心の痛みを訴えたくまりました。

けれど、メグの自尊心は、むろんそのことをさせるわけもなく、できるだけ、ほがらかにふるまったので、だれもメグの努力に気づきませんでした。

夜会がおわると、メグはほっとしました。ベットのなかで考えていると、ほてったほおに、涙が流れました。あのおろかなうわさ話は、メグに新らしい世界を開いてくれ、古い平和の世界を根こそぎみだしてしまいました。あわれなメグは、ねぐるしい一夜をあかし、おもいまぶたの、いやな気分で床をはなれました。

その朝は、だれもぼんやりしていました。娘たちが編物をはじめめる気力が出たときには、もうおひるでした。メグは、みんなが好奇心で、じぶんのことを気にしていることを知り、ましたが、ベルが手をやめて感傷のないかたで、こうだったので、なにかもわかりま

した。

「ねえ、ひな菊さん、木曜日の会に、あなたのお友だちのローレンスさんに招待状を出しましたの。あたしたち、お近づきになりたいし、それに、あなたに対する敬意ですからね。」

「御親切にありがとうございます。でも、あのかた、いらっしやらないでしょう。七十に近い、お年よりですもの。」

「まあ、ずるい、あたしのいうのは、わかいかたのほうよ。」と、ベルは笑いました。

「わかいかたって、いらっしやいませんわ。ローリイなら、ローリイなら、まだ子供で、いもうとのジョウウくらいでしょう。あたしはこの八月で十七ですもの。」

「あんなりっぱな花をおくって下すって、ほんとにいい方ね。」と、アンニイが、意味ありげにいいました。

「ええ、いつでも下さるの。あたしの家のみんなに。あのかたの家に、いっぱい花があるし、あたしの家ではみんなが花がすきだからです。母とローレンスさんとはお友だちでしょう。だから、あたしたち子供同志も遊びますの。」

メグは、この話を、うちきつてくれればいいと思いました。

「ひな菊さんは、まだ世間のことにうといのね。」と、クララはうなずきながら、ベルにむかっていいました。

「まるで、まだあかちやんね。」と、ベルは肩をすぼめました。

そのとき、マフオット夫人が、レースのついた絹の服を着てはいつて来ました。

「あたし、これから娘たちのものを、もとめにまいります、みなさん御用はありませんか？」

「ごさいませんわ、おばさま、ありがとう。あたしは木曜日には、あたらしいピンクの絹のを着ますし。」と、サリーがいいました。

「あなた、なにお召しになるの？」と、メグにサリーが尋ねました。

「昨夜の白いのを来ますわ。ひどくさけましたが、もう少しまくなおせましたら。」

「どうして、かわりを家へとりにおやりにならないの？」と、気のきかないサリーがいいました。

「かわりなんか、あたしありませんわ。」

やっとメグがいったのに、サリーは人のよさそうな、びっくりしたふうで、

「あれつきり、まあ、」と、いいかけましたが、ベルは頭をふって、サリーの言葉をさえ

ぎつてやさしくいいました。

「ちつともおかしくないわ。まだ社交界に出ていないのに、たくさんドレスこしらえておく必要ないわ。ひな菊さん、いく枚あっても、お家へとりにいかせなくてもいいわ。あたしの小さくなった、かわいい青色の絹のが、しまつてありますから、あれを着てちょうだいな。」

「ありがとうございます。でも、あたしみたいな子供には、この前のでたくさんですわ。」
「そんなことおつしやらないで、あなたをきれいにしてみたいの。だれにも見せないように仕度してシンデレラ姫みたいに、ふたりでふいに出て行って、みんなをおどろかしたいの。」と、ベルは笑いながら、けれど、あたたかい気持ですすめるので、メグもそれをこばむことはできませんでした。

木曜日の夕方、ベルと女中で、メグを美しい貴婦人にしあげました。髪をカールし、いい香りの白粉をぬりこみ、唇にさんご色の口紅をぬり、空色のドレスを着せ、腕環、首かざり、ブローチなど、装身具でかざりたてました。美しい肩はあらわに、胸にばらの花はあかく、ベルも女中も、ほれぼれとながめました。

「さあ、みんなに見せてあげましょう。」と、ベルは、ほかの人たちのつめかけている部

屋へ、メグをつれていきました。

メグは、ハイヒールの青い絹の舞踏靴をはき、長いスカートをひきずり、胸をわくわくさせながら歩いていきました。鏡がかわいい美人だと、メグにはつきり教えてくれたので、メグはかねての望みがかなえられた満足を味わい、じぶんから進んで、美しさを、見せびらかそうとさえしました。ベルは、ナンとクララにむかって、

「あたしが、着かえて来る間に、ナン、あなたは裾さばきと、靴のふみかたを教えてあげてね。ふみちがえてつまずくといけないから、それから、クララ、あなたの銀のちようちよを、まんやかにさして髪の左がわのカールをとめてあげてちようだい。あたしのつくった、すてきな作品をだめにしちやいやよ。」と、いつて、じぶんの成功に、さも満足らしい顔つきで、いそいで出ていきました。

ベルが鳴りひびき、マフオット夫人が、使いをよこして、娘たちにすぐ来るように、告げたとき、メグはサリイに、ささやきました。

「あたし、階下へいくのこわいわ。なんだか、とてもへんな、きゆうくつな気持で、それに半分、はだかみたいで。」

「とてもきれいだからいいわ。あたしなんかとてもくらべものにならない。ベルの趣味は

すてき、ただつまずかないようにね。」

心のなかにその注意をたたみこんで、メグは無事に階段をおり、客間へ、しずかにはいつていきました。メグは、たちまちみんなの目をひきつけ、この前の夜会のとときと、まるでちがつて、わかい紳士たちが、ちやほやして、いろいろ気にいるようなことを話しかけました。ソファに腰かけて、他人の品定めをしていた数人の老婦人たちは、メグに興味をもち、なかの一人がマフオット夫人に身もとを尋ねました。

「ひな菊マーチです。父は陸軍大佐で、あたしどもとおなじ一流の家がらですが、破産しましたね、ローレンスさんと親しいんです。家のネッドはあの子に夢中なんですよ。」

「おや、そうなんですの。」と、その老婦人はもつとよく見ようとして眼鏡をかけました。メグは、聞えないふりをしましたが、夫人のでたらめにはあきれました。けれど、その妙な気持を心のすみにおしつけ、笑いをたたえて、貴婦人らしくふるまっていました。ところがメグの顔からきゆうに笑いがぎえました。正面にローリーの姿を見たからで、その目はじぶんを非難しているではありませんか。ローリーは、笑っておじぎをしましたが、メグはこんな姿でなくじぶんの服を着ていればよかったと思いました。メグは、そばへい

き、

「よくいらつしやいました。お出でにならないと思っていました。」

「ジヨウが、ぜひいつて、あなたのようすを見て来てほしいというので来たんです。」

「ジヨウに、なんておつしやるつもり？」

「どこの人だかわからなかったといいます。だって、まるで大人みたいで、あなたらしくないんですもの。」

「みんなでこんななりにさせたの、あたしもちよつとしてみたかったけど。ジヨウびつくりするでしょうね？ あなたもこんなの、おいや？」

「ぼく、いやです。わざとらしく、かざりたてたの、いやです。」

年下の少年からいわれた言葉としては、あまりにするどく、メグはふきげんになって、「あなたみたいな、失礼な人、知らないわ。」と、いつて、そこを去り、窓ぎわへいつてたたずみ、きゆうくつなドレスのために、ほてつたほおを夜気にひやしました。大好きなワルツの曲がはじまっても、そのまましていると、ローリイが来て、ていねいに手をさしおりました。

「失礼なこといつて、お許し下さい。いつしよに踊つて下さい。」

「お気持をわるくするとこまります。」

「いいえ、ちつとも、ぼくダンスしたいのです。そのドレスは好きじゃないけど、あなたはほんとうに、すてきです。」

メグは、にっこり笑って気持ちをやわらげ、二人は音楽に合わせておどりはじめました。

「ローリー、あたしのお願い聞いてね、家へ帰ってもあたしのドレスのこといわないでね、家の人々は、じょうだんがわからないし、おかあさんには心配させるから。」

「どうしてそんなものを着たんのです?」

ローリーの目がなじっていました。

「どんなに馬鹿だったか、自分でお母さんにいうから、あなたいわないですよ。」

「いわないと約束します。でもきかれたらどういいますよ!」

「あたしがきれい、たのしそうだったとだけ、いつてちようだい。」

「きれいだけど、さあ、たのしそうかしら? たのしそうに見えない。」

「ええ、たのしくないの。おもしろいことしてみたかったけど、やっぱり性にあわないわ。あきてしまうわ。」

このとき、マフオット家の若主人のネットドが来たので、ローリーは顔をしかめました。

「あの人、あたしに三回もダンスを申しこんでいるの。だから来たんでしよう。」

メグがいかにもいやそうにいうので、ローリイは、これはおもしろいと思いました。

ローリイは、それつきり夕飯のときまで、メグと話しませんでした。食事のとき、ネットとその友達のフィツシヤアを相手に、メグがシャンペン酒を飲むのを見たローリイは、だまつていられませんでした。

「そんなもの飲むと、明日、頭痛がしますよ。ぼくは飲みません。おかあさんだって、お気にいらないでしょう。」

ローリイは、ネットとフィツシヤアに聞かれないように、メグによりそって、そうささやきました。

「今夜は、あたし気ちがみたいなお人形なの。明日からはいい子になるわ。」

「それじゃ、明日もここにいたいんですね。」

ローリイに、ついとはなれて立ち去りました。

メグは、踊ったり、ふざけたり、しゃべったり、ローリイがあきれるほど、はしやぎました。帰りがけに、ローリイがあいさつに來ると、メグは、もう頭痛になやまされていましたが、

「いいこと！ 頼んだこと忘れないでね。」と、むりに笑顔をつくっていいました。

「死をもつての沈黙」と、ローリイは、フランス語で、芝居がかりで答えて立ち去りました。

メグは、もう疲れきっていました。わびしい気分でしたが、あくる日も一日気分がわるく、土曜日になって、二週間の遊びと、ぜいたくぎんまいにあきあきして家へ帰って来ました。

日曜日の晩、メグはおかあさんとくつろいだとき、あちこち見まわしながら、

「年中、お客さわぎなどいやだわ。しずかに暮すのたのしいわ。りっぱでなくても、じぶんの家が一ばんいいわ。」と、のびのびした表情でいいました。

「そう聞いかあさんはうれしい。あなたがりっぱなところへいったので、家がつまらなく、みじめに見えやしないかと、心配していたのよ。」と、おかあさんの目の、気づかわしそうな影が消えました。

メグは、おもしろそうに、いろいろの冒険を話しました。けれど、心の中になにかおもしろいものがあるらしく、九時がうってジョウがねようといいい出したとき、メグは思いきったというふうに

「おかあさん、あたし白状することがありますの。」

「そうだと思っていました。どんなこと！」

「あたし、むこうへいきましようか？」と、ジョウが気をきかしていました。

「いいえ、いて。なんでもあなたには、うち明けてるじやないの。いもうとたちの前では、はずかしいけど、あなたには、あたしのした、あさましいこと、すっかり聞いてほしいわ
。」

「さあ、聞きましょうね。」と、おかあさんは、にこにこしながらも、すこし心配そうでした。

「みんなで、あたしをかざりたてたことは、お話しましたが、髪をカールしたり、白粉をぬったり、ドレスを着せたりしたこと、まだ話しませんでしたね。ローリイは、正気の沙汰ではないと思つたでしょう。あたしは、お人形のようにだとか、美人だとかおだてられました。つまらないこととはわかつていながら、おもちゃになりました。」

「それつきり？」と、ジョウがいました。

「まだ、あるの。シャンパンを飲んだり、ふざけたり、はねまわったり、けがらわしいことばかり」と、メグは自責の念に堪えられないようでした。

「もつと、なにかあつたでしょう？」と、おかあさんが、やさしくメグのほおをなでなが

らいいました。

「ええ、とてもばかげたことなの。だって、みんながあたしとローリーのこと、あんなふうにいったり考えたりするのんですもの。」

メグは、マフオット家で聞かされたいろんなうわさ話をしました。おかあさんは、こんな考えを純真なメグの心につきこんだことを不快に思っ、唇をぎゅつとむすんでいました。ジヨウは、怒ってさげびました。

「そんなばかなこと、あたし聞いたことがないわ。なぜおねえさんは、その場でいってやらなかったの？」

「あたしにはできなかつたの。でもあんまりひどいので、しやくにさわるし、はずかしいし、帰って来なければならぬのに、帰るのも忘れてしまつて。」

「あたしたちのような貧乏人の子供について、そんなつまらぬうわさ話をしてることを、ローリーに話したら、きつとどなりつけるでしょうね。」

「ローリーにそんなこといいたら、いけませんわ。ねえ、おかあさん。」

おかあさんは、まじめな顔でいいました。

「いけません。ばかなうわさ話は、二度と口にしてはいけません。できるだけ早く忘れる

ことです。あなたをいかせたのは、おかあさんの失敗でした。親切なんですよ、下品で、教養があさく、わかい人たちにいやしい考えを持たせる連中ですからね。メグ、今度の訪問があなたにわるい影響があるようなら、かあさんは残念です。」

「御心配下さらないで。あたしは、自分のいけなかったことをなおしますわ。けれど、あたしはみんなから、ちやほやされて、ほめられるの、わるい気はしませんの。」

メグは、はずかしそうにいました。

「それは、しぜんな気持です。それがために、ばかげたことをしなければいいんです。ただ、ほめられたとき、それだけの価値がじぶんにあるか反省して、美しい、へりくだる娘になることです。」

それから、話は計略のことになりましたが、メグはおかあさんにむかって尋ねました。

「マフオット夫人のおっしゃったように、計略をたてていらっしゃるの？」

「ええ、たくさんたてています。だけどマフオット夫人のいうのとはちがいます。あたしのは、娘たちが、美しくて教養のある、善良な人になって幸福な娘時代をすごし、よい、かしこい結婚をして、神さまの御意により、苦勞や心配をできるだけすくなくして、有益なあのしい生涯を送ってほしいのです。りっぱな男の人に愛され、妻としてえらばれるこ

とは、女の身にとつて一ばんたのしいことです。あたしは、娘たちがこういう美しい経験をすることを、心から望んでいます。そういうことを考えるのはしげんで、メグ、その日の来るのを望み、その日を待つのは正しいことですし、その支度をしておくことはかしこいことです。あたしは、あなたがたのために、そういう大望をいだいています。けれど、ただ世間へおし出し、金持と結婚させたいのではありません。お金持だからとか、りっぱな家に住めるからとか、そんなことだけで結婚したら、それは家庭といえません。愛がかけているからです。お金は必要で大切なものです。上手に使えばたつといものですが、ぜひとも手にいれるべき第一のものとか、ごほうびとか思つてはこまります。かあさんは、あなたがたが、幸福で、愛されて、満足してさえいれば、自尊心や平和なくして王位にのぼつている王女さまたちになつてもらうより、かえつて貧乏人の妻になつてもらいたいと思ひます。」

メグは、そのとき、ため息をしていいました。

「貧乏な家の娘は、せいぜい出しゃばらなければ、結婚のチャンスはつかめないって、ベルがいつてましたわ。」

ジヨウは、氣づよくいいました。

「そんなら、あたしたちは、いつまでも、えんどおい娘でいましょう。」

「ジヨウのいうとおりです。不幸な奥さんや、だんなさんをあさりまわっている娘らしくない娘よりも、幸福なえんどおい娘でいたほうが、よろしい。なにも心配することはありません。メグ、ほんとに愛のある人は、相手の貧乏などにひるむことはありません。かあさんの知っているりっぱな婦人のなかには、むかしは貧乏だったかたがいくらもあります。けれど、愛をうける、ねうちのあるかたのばかりだったから、人がえんどおい娘にしておかなかつたのです。そういうことは、なりいきにまかせておけばいいので、今は、この家庭を幸福にするように努め、やがて結婚の申しこみをうけたらばその新しい家庭にふさわしい人になるし、もしかしこい結婚ができなければ、この家に満足して暮すのです。それから、もう一つ、よく覚えていてほしいのは、かあさんはいつでもあなたが秘密をうち明けることのできる人ということ、また、おとうさんは、あなたがたのよいお友だちであるということです。そして、おとうさんとあたしは、あなたがたが結婚しても、独身でいても、あたしたちの生活のほこりであり、なぐさめであることを信じ、また望んでもいるということだね。」

メグとジヨウは、

「おかあさん、あたしたちきつとそうなります！」と、ほんとに、心からさげんで、おやすみなさいをいいました。

第十 ピクイック・クラブと郵便局

春がめぐつて来ると、いろいろと新しいたのしみがはやり、しだいに日がのびるにしたがつて、長い午後の時間に、いろいろの仕事やあそびができるようになりました。

庭に手入れをしなければなりません。姉妹はめいめい四分の一の地所をもらって、じぶんのすきなようにやりました。ハンナが、どれがどのかたの庭か、支那から見たってわかるといいましたが、まさにそのとおりで、四人の趣味はひとりひとりちがっていました。

メグは、ばらとヘリオトロップと天人花と、かわいいオレンジの木をうえました、ジョウの花壇には、ニシーズン、けっしておなじじものがうえられたことがなかったのは、たえず新しい実験を試みるからで、今年は日まわりをうえるはずで、その種子はにわとりと、そのひよこの餌にするためでした。ベスは、スイート・パイ、もくせい草、ひえん草、

なでしこ、パンジイ、よもぎなど、古風な香りゆたかな花や、小鳥の餌になるはこべ、子猫のためのいぬはつかなどをうえました。エミイは、小さくはあるが、かわいいあずま家をつくり、にんどうだの、朝がおだのを、その上にはわせ、いろんな花を咲かせました。そして、せの高い白ゆりだの、やさしいしだなど、たくさんの花をうえこみました。

晴れた日には、庭いじり、散歩、川でのボートあそび、花の採集など、雨の日には、室内のあそびごとに時間をすごしました。そのあそびのなかには、もとからのもあり、新しいのもありましたがその一つ、ピクイック・クラブというのは、イギリス文豪ジケンスの作品中から、その名をとったものでした。このクラブは、そのころはやっていた秘密会で、土曜日の夕方、ひろい屋根部屋で開き、ずっと一年もつづけて来たのです。会はこの順序で行われます。ランプをおいたテーブルの前に、三つのイスをならべ、ちがった色でクラブの頭文字のP、C、二つの大きな字をぬいつけた四つの白いきしように用意されました。そして、「ピクイック週報」という週刊新聞が発行され会員はみんなにか寄稿することになって、文才のあるジョウが、編集にあたりました。

今後七時、四人の会員は、クラブ室にのぼっていき、くびに、きしようにまきつけ、ものものしい態度で席につきました。デイケンスの小説のなかの名を借りて、メグは一ばん

年上なので、サミエル・ピクイック氏。ジヨウは文学的才能があるので、オーガスタス・スノーダグラス氏、ベスは、トラシイ・タツプマン氏、エミイは、ナザニエル・インクル氏でありました。会長のピクイックが、週報を読みました。週報には、創作物語、詩、地方のニュース、おかしな広告、たがいの、欠点や短所を注意しあういましめなどが、いっぱいのもつていました。今夜は、玉のはいつていない目がねをかけた会長が、テーブルをたいて、せきばらいをし、おもむろに読みはじめました。

会長が、週報を読みおわると、いつせいに拍手の音が起り、つぎにスノーダグラス氏がある提案をするために立ちあがりました。

「会長ならびに紳士諸君。」と、議会で演説するような堂々たる態度と調子ではじめました。「わたくしは、ここに一名の新会員の入会許可を提議したいと思うのであります。その人は、その名誉をあたえられるにふさわしい人物でありまして、入会されたならば、クラブの精神、週報の文学的価値に寄与するところ大なるものがあります。そして、その人とは、ほかならぬテオドル・ローレンス氏です。ねえ、入れてあげましょう。」

ジヨウの演説は、最後で調子がかわつたので、みんな大笑いしました。けれど、すぐに、みんな気づかわしそうな顔をして、ひとりも発言しませんでした。そこで、会長が、

「投票によつてきめることにします。」と、いい、つづいて「この動議に賛成のかたは、賛成といつて下さい。」と、大声でうながしました。

すると、おどろいたことに、ベスのトラシイ・タップマン氏が、おずおずした声で、「賛成」と、いいました。

「反対のかたは、不賛成といつて下さい。」

メグとエミイ、すなわち、ピクイック氏と、インクル氏は、不賛成でありました。そして、まずエミイのインクル氏が立ちあがつて、いと上品にいいました。

「わたしたちは、男の子たちを入会させたくありません。男の子たちは、ふざけたり、かきまわしたりするだけです。これは、女のクラブですから、わたしたちだけで、やっていきたいと思ひます。」

ついで、メグのピクイック氏が、何かうたがうときにするくせの、ひたいの小さなカールをひっぱりながらいいました。

「ローリイは、わたしたちの週報を笑いものにし、あとでわたしたちをからかうでしょう。」

すると、スノーダグラス氏は、はじかれたようにとびあがつて、熱をこめて、

「わたしは紳士として誓います。ローリイはそんなことは致しません。かれは書くのが好きで、わたしたちの書いたものに趣きをそえ、わたしたちがセンチメンタルになるのを防いでくれると思います。そう思いませんか？ わたしたちは、かれにすこししかなし得ませんが、かれはわたしたちにたくさんのことをしてくれます。よって、かれに会員の席をあたえ、もし入会すれば、よろこんで迎えたいと思います。」

いつも受けている利益をたくみに暗示されたので、ベスのタツプマン氏は、すっかり心をきめたようすで立ちあがりました。

「そのとおりです。たとえ、すこしぐらいの不安はあっても、かれを入会させましょう。もしかれのおじいさんも、はいりたければ入会させてよいと思います。」

ベスのこの力ある発言に、みんなおどろき、ジョウは席をはなれて握手を求めに來ました。

「さあ、それでは、もう一度投票します。諸君はわたしたちのローリイであることを頭に置いて、賛成と行って下さい。」

ジョウのスノーダグラス氏が、いきおいこんでさけぶと、たちまち、賛成という三つの声がいつしよに聞えました。

「よろしい、ありがたいしあわせ！ さて、それでは、時をうつさず、さっそく新会員を紹介させて下さい。」と、ジョウは、戸だなを開けると、くずいれぶくろの上に、おかしさをこらえて顔をあかくして、ローリイがすわっていました。このいたずらに、すっかりやられた三人が、

「いたずら者。ひどいわ！」と、ぶつぶついつているあいだに、ジョウはかれをひき出し、会員章をあたえて席につかせてしまいました。

「きみたち、ふたりのずるいにはおどろかされましたぞ。」と、ピクイック氏は、こわいしかめっ面をしようとしましたが、かえつてにこにこ顔になってしまいました。その新会員に、うやうやしく敬礼をして、きわめて愛想のよいようすでいいました。

「会長閣下および淑女諸君、いや、これは失礼、紳士諸君、どうぞ自己紹介をお許し下さい。わたくしは、このクラブの末席をけがすサム・ウエラーと申します。」

「すてき すてき」と、ジョウはテーブルをたたきながらいいました。

「ただ今、わたくしを、じょうずにひっぱり出して下すった、忠実な友だち、そして、尊敬すべき後援者は、今夜のずるい計画については、すこしも責任はないのでありまして、これはすべてわたくしがたてた計画で、わたくしがむりをいって、やっと承知させたので

あります。」

ローリイが、手をふりながらさういうと、そのじようだが、おもしろくてしようがないというふうに、スノーダグラス氏は、

「みんなじぶんのせいにしなくつてもいいわ。戸だなにかくれることは、あたしがいい出したんだわ。」といいました。

「この人のいうことなど心にかけてはいけません。計画をしたわる者はわたくしです。しかし名誉にかけて、二度とこんなことはしません。今後は、永久につづくこのクラブのため、大いに力をいたす考えであります。」

「ヒヤ！ ヒヤ！」と、ジヨウはフライ鍋のへりをたたきながらさげびました。

「つづける！ つづける！」と、インクル氏は、会長がうやうやしく礼をしている間にいました。

「おお、一言申しておきたいことは、小生の受けた名誉を感謝いたしたく、となり合う両国民の親善関係をふかめる一助として、庭のすみに郵便局をつくったことであります。もとはつばめ小屋でしたが改造しました。手紙、原稿、本、小づつみ、なんでもとりつき、時間の節約に役だつと思えます。両国民はそれぞれかぎをもちますわけで、ここにそのか

ぎを贈呈することをお許し下さい。」

ウエラー氏が、かぎをテーブルの上において、自席にもどると、さかんな拍手、さけび声が起こりました。つづいていろんな討議がおこなわれ、めいめい、かつぱつに意見をかわしました。そして、新人会員のばんぎいを、最後にとなえて散会しました。

たしかに、ローリーのサム・ウエラー氏の入会は、このクラブに生気をふきこみ、書くものでも、週報にちがったおもむきをそえました。郵便局は、すばらしい考えでした。たくさんの奇妙なものがとりつがれました。悲劇台本、ネクタイ、詩、漬もの、草花の種子、長い手紙、譜本、しようがパン、ゴム靴、招待状、注意書き、小犬などでした。ローレンス老人も、このあそびをおもしろがって、おかしな小づつみや、ふしぎな手紙や笑いの電報などを送って来ました。また、ローレンス家の園丁はマーチ家の女中ハンナにひきつけられ、本気で恋文を書いて来ました。その秘密がばれたとき、みんなはどんなに笑いこぼしたことでしょう！

第十一 経験が教える

「六月一日、明日はキングさんの家の人、みんな海岸へ出かけて行って、あたしはひまになるの！ 三ヶ月のお休み！ なんてうれしいんでしよう！」

あるあたたかい日、家へ帰って来たメグが、ジヨウを見つけてさげびました。ジヨウは、いつになく疲れたようすで、ソファの上に横たわり、バスがそのほこりだらけの靴をぬがしてやっていました。エミイは、みんなのためにレモン水をつくっていました。

ジヨウが良かったです。

「マーチおばさんも、今日お出かけになつたわ。すてきでしょ。いっしょにいつてほしいと、いわれやしないかと、びくびくしちやつた。それで、あたし、おばさんを早くたたせたいので、お気にめすように、それこそいっしょうけんめいにはたらいたわ。だけど気のきいたこのおつきを、つれていこうと思われたら大へんだと心配したの。それでおばさんを馬車にのりこませると、なにかいつてたけど聞えないふりをして、大いそぎで逃げて帰ったの、ほんとに助かつたわ。」

「よかつたわね。それで、メグねえさん。この休みになにをなさるつもり？」と、エミイが尋ねました。

「うんと朝ねぼうして、なにもしないの。だって冬からこつち、朝早くからたたき起され

て、ひとのためにはたらいてばかりいたんですもの。大いに休んであそぶのよ。」

「ふうむ、あたしはそんなだらけたの大きらい。たくさん本を集めておいたから、あの古い林檎の枝の上で、このかがやかしい少女時代をよくするために勉強するの。」と、ジョウがいました。

「あたしたちも、勉強はやめにして、おねえさんのまねしてあそびましょう。」と、エミイがいうと、ベスも、よろこんで、

「ええ、いいわ。あたし新しい歌をすこしおぼえたいし、人形さんの夏服もつくらなければならぬし。」と、いいました。

そのとき、おかあさんが、針仕事の手をやめて、みんなにむかっていいました。

「一週間、はたらかないであそんでごらんさい。土曜日の晩になると、つまらないということが、きつとわかるでしょう。」

「そんなことありませんわ。とてもうれしいわ。きつと。」と、メグがいました。

「ねえ。わが友、祝杯をあげましょうよ。あそびは永久に！ あくせくしっこなし！」と、ジョウはレモン水がいきわたったとき、そのコップを高くささげてさげびました。

みんなはたのしそうに飲みほしました。そのときから、ぶらぶらあそびがはじまりまし

た。あくる朝も、メグは十時までねどこのなか。ジヨウは花瓶に花もささず、ベスはそうじをしないし、エミイの本はちらかったまま、ただ「おかあさんの領分」だけが、きちんと片づいているだけでした。この部屋では、メグは、休息も読書もできず、あくびが出るばかり、給料で夏のどんなドレスが買えるかなどと考えるのでした。ジヨウは、午前のうちはローリイと川へボートこぎにいき、今後は林檎の木の上で「広い世界」という物語を涙を流して読みました。ベスは、戸だなをかきまわし、そのままにして、ピアノへ気をうつしていきました。エミイは、じぶんの花園のスケッチをはじめました。それから散歩にいきましたが、夕方になってぬれねずみになって帰って来ました。

お茶のとき、四人はその日のことを、いろいろ話し合いましたが、たのしかったけれど、いつになくその日は、永く感じられたというところに、みんなの意見は一致しました。そして、つぎの日も、また、つぎの日も、休んであそびました。ところが、いよいよ一日が永く感じられ、なんとなくおちつかない気分になって来ました。すると、悪魔は四人の心をねらい、いろんなわるいことを見つけて、あばれはじめたのであります。

たとえば、メグは布地を小さくきりすぎて、一枚の服をだいなしにしてしまいました。ジヨウは、本を読みすぎて目がぼやけ、いらいらした気分となって、やさしいローリイと、

けんかしてしまいました。ベスは、あそんでばかりいないで、いつもの習慣で家事のお手伝いをするので、わりにいいほうでしたが、それでも、家のなかの気分にかかされて、いらいらしてしまい、人形をしっかりとぼしたりしました。エミイは、ひとりであそぶことが、むずかしいことがわかりました。一日中、絵をかいてもいられませんし、人形あそびはきらいでしたし、すっかり心のつかれをおぼえました。

金曜日の晩になると、だれもあそびにあきたとはいいませんでしたが、もう一日で一週間がおわるので、うれしく思いました。おかあさんのほうでも、ほうれぐらんと、ちゃんと見てとって、この教訓をいつそう印象づけたいと思って、わざとハンナに土曜日一日、休みをあたえました。

土曜日の朝、みんなが起きてみると、台所には火の気はなく、食堂には朝御飯はなし、おかあさんもハンナもいません。

「あら、どうしたつていうんでしょう！」

ジヨウがさげんだとき、メグはもう二階へかけあがっていき、まもなく、ほっとして、けれど、すこしはおかしそうな顔をしておりて来ました。

「おかあさんは、御病気ではないけど、おつかれでおやすみよ。今日一日は、みんなで好

きなようになさいって。」

「そう。いいじゃないの、おもしろいわ、あたしなにかしたくて、うずうずしてたんですもの。」と、ジヨウがいました。

まったく、今、四人はすこし仕事をしたくなりました。メグがコック長となつてさつそく食事の仕度が始まり、みんなおもしろがってやりました。おかあさんは、じぶんのこととはかまわないでといいましたが、おかあさんの食事は用意され、ジヨウが二階へはこびました。わかしすぎた紅茶はにがく、オムレツはこげ、ビスケットは重曹でかたまつて、ぶつぶつしていましたが、おかあさんは、感謝して受け、ジヨウが去つてしまふと、おかしくてたまらなくて、ひとりで笑つてしまいました。

「かわいそうに、みんなこまつているでしょう。でも、そうつらいとも思っていないだろうし、後のためにもなることだから。」と、つぶやいて、おかあさんはじぶんで用意しておいたもつとおいしい食物をとり出し、運ばれた食事はわからないようにしまつして、食べたことにしておいたので、みんなはうれしがりました。これはおかあさんらしい、ちょっとしたうそでした。

ところで、階下ではいろんな不平が起りました。食事の失敗に、コック長はひどくくや

しがりました。ジヨウは、

「いいわ。お昼の食事は、あたしが女中になって用意するわ。ねえさんはおくさんになって、お客さまの相手をしてちょうだい。」と、いつて、ローリイをよぶことを提案しました。

これは、賛成されました。そこで、ジヨウは、さつそくローリイに招待状を書いて郵便局へ出しておきました。けれど、ジヨウのうで前は、すこしあぶないようでした。メグが心配すると、

「だいじょうぶ、コンビーフも、じゃがいももある。つけ合せに、アスパラガスとえびを買ってくるわ。それから、ちさでサラダをつくりましょう。つくりかたの本を見ればいいわ。デザートは、白ゼリイといちご、もつとぜいたくすれば、コーヒーも出すのよ。」

「ジヨウ、あなたは。しょうがパンとキャンデーだけしかつくれないじゃないの。あたしこの御馳走には関係しないわよ。だって、あなたが勝手にローリイをよんだんだから。」

「おねえさんは、ローリイを、そらさないようにして下さればいいわ。でもこまったら、なんでも教えて下さるでしょうねえ？」と、ジヨウはむっとしました。

「ええ、でもあたしいろんなこと知らないわ。おかあさんに、尋ねてからにするほうがいい

いわ。」

ジヨウは、じぶんのうでをうたがうようなことをいわれたので、ぷりぷり怒って部屋を出て、おかあさんへ相談にいきました。

「好きなようになさい。おかあさんのじやまをしないでね。あたしは食事は外でします。家のことなどかまっていられません。今日はお休みです。本を読んだり、手紙を書いたり、お友だちをたずねたりして過します。」

いつもいそがしいおかあさんが、今日は朝からゆれイスにかけて本を読んでいるふしぎなありさまと、けんもほろろな、その言葉に、ジヨウは、

「へんだわ。おかしいわ。」と、ひとり言をいながら階段をおりて来ると、ベスの泣き声が聞えました。いつてみると、鳥かごのなかでカナリヤが死んでいました。

「みんな、あたしのせいよ。えさも水もちつともないわ。」と、ベスはこわばって、つめたくなつたカナリヤを手の上にのせて、かいほうしましたが、もうだめでした。

「お墓へいれてやるわ。もうあたし小鳥なんかかわない。」
ベスは、すっかり気を落していました。

「おとむらいは、お昼からにして、みんなでおまいりしましょう。さ、もう泣かないで、

箱のなかへねかせておやり。」と、ジヨウはいつて、台所へはいりましたが、台所は手のつけられないほど混乱しストーヴは火が消えていました。ジヨウは火を起し、お湯がわくまでに市場に買い出しにいくことにしました。えびとアスパラガスと、いちごを二箱買って来ると、火は起きていました。ジヨウはまず台所を片づけましたが、ハンナがパンをやくように鍋にかけたままにしてあったのを、メグがこねなおして、ストーブにのせたまま、客までサリー・ガーデナアのお相手をしていました。

ジヨウは、そこへとびこんでいつて、

「ね、パンがお鍋のなかでころがるようになったら、ふくらんだのじゃない？」

サリーは笑い出しましたが、メグはただうなずいただけでした。ジヨウは、すぐにひきかえし、すっぱいパンをそのまま、かまにいれました。

そのとき、おかあさんは、どんなぐあいに行っているか、あちこちのぞきまわり、あわれなカナリヤを箱にいれて、着せてやる服をぬっているベスに、なぐさめの言葉をかけると、外へ出かけてしまいました。娘たちは、なんだかもの足りない気がしました。

そこへ、クロツカーがやって来ました。この人は、やせて黄色い顔をしたオールドミスで、いろいろとあたりをながめまわし、お昼の食事をごちそうになりたいといいました。

娘たちは、この人がきらいでしたが、年よりで貧乏で友だちもないから、親切にしてあげるようにいわれていました。その人は、いろいろなことを尋ねたり、やたらに批評したり、知人のうわさ話をしたりしました。

その朝のジョウの苦しい骨折は、たいへんなものでありました。ジョウの骨折は、すべて失敗におわり、アスパラガスは、一時間もにまだかたく、パンは黒くこげ、サラダのかけじるは食べられるしろものではなく、えびには手こずり、じゃがいもはなまにえ、白ジェリイはぶつぶつだらけでした。

「まあ、いいわ。ビーフとパンにバターをつけて食べてもらえばいいわ。だけど、朝のうちまるで、むだになったのがくやしい。」

ジョウは、いつもより三十分おくらせて食事のベルを鳴らしましたが、いつもりつぱな料理を食べつけているローリイと、失敗をほじくり出すような好奇の眼と、それをしゃべり散らす舌をもつクロツカーの前にならんだ料理をながめて、ジョウは顔がほてり、すっかりしよげてつつ立っていました。

ああ、料理はちよつと味をみただけで、のこされていきます。エミイはくつくつ笑い、メグはこまった顔をし、オールド・ミス・クロツカーは口をつぼめるし、ローリイは景気

づけようとして大いにしゃべりました。ジョウの最後の頼みはいちごでした。ガラスの皿に赤いいちごをもち、おいしそうなクリームがかかっています。だが、それを食べたクロツカーは、しかめ面してあわてて水を飲みました。ローリーは口をゆがめながらも男らしく食べてしまいました。エミイは、むせかえり、ナプキンで口をおさえて、あたふたと食卓からはなれていきました。ジョウはふるえながら、

「まあ、どうしたの？」と、さげびました。

「お砂糖のかわりに塩をいれたんだわ。クリームすっぱいわ。」と、メグが答えました。

ジョウは、うめき声をたてて、イスにたおれかかりました。ところが、がまんをしようとしても、おかしくてたまらないというような、ローリーの顔につきあたると、ジョウはきゆうにこの事件がいかにもこっけいに思われ、涙のこぼれるほど笑い出しました。すると、ぶつくさ屋のクロツカーもいつしよに、みんな笑い出し、不幸な宴会は、ともかく陽気におわりました。

「あたし、もう片づける元気ないわ。だから、おとむらいをして、すこしおちつきましよう。」

ジョウは、みんなが食卓をはなれたときにいいました。クロツカーは帰っていきました。

きつとこの料理のことを、しゃべりたかったからでしょう。みんなはベスのために、やつとおちつきました。ローリイは、木立のなかの、しだの下にお墓をほり、カナリヤはやさしいベスの手で、涙とともにうめられ、こけでおおわれ、すみれとはこべの花輪が、墓石の上にかざられました。墓石には、ジヨウが、食事の仕度をしながらつくった詩が書かれています。

おとむらいがすむと、ベスは悲しみと、さつきのえびとで、胸がいっぱいになり、じぶんの部屋へひっこみましたが、ベッドがそのままになっていて、ねる場所ありませんでした。片づいているうちに、悲しみもやわらいで来たので、台所で片づけものをしているジヨウの手つだいをしました。二人はへとへとにつかれました。ローリイは、エミイを馬車にのせてつれ出しました。すっぱいクリームで気持がわるくなっていたエミイは、大よろこびでした。

やがて、おかあさんが帰宅しました。三人の娘たちがはたらいていましたし、戸だなをちよつとのぞいてみて、経験の一部が成功したことがわかりました。

ところが、やつと片づけたのに、三人は休むこともできませんでした。と、いうのは、数人の来客があり、それお茶、それお使いというわけでした。けれど、露とともにたそが

れがせまるころ、姉妹たちは六月のぼらが美しく咲きはじめたポーチに集まりました。

「なんていやな日だったでしょう。今日は。」

ジョウが口をきると、メグが、

「いつもより短いような気はしたけど、とてもいやだったわ。」

「ちつとも家みたいじゃないわ。」と、エミイ。

「おかあさんと、カナリヤがいなければ、家のような気がしないわ。」とベスは、涙ぐんで、からの鳥かごを見あげました。

「みなさん、かあさんは帰って来ましたよ、ベス、カナリヤがほしければ、明日買ってあげましょうね。」と、いいながら、おかあさんも娘たちの仲間入りをしました。おかあさんも、一日のお休みが、あまりたのしそうではありませんでした。

「みなさん、あなたたちの経験は、もうたくさんですか！」

「あたし、もうたくさん。」と、ジョウ、ほかの三人も、声をそろえて、

「あたしも！」

「おかあさんは、みなさんが、どんなふうにするかと思って、わざとなにもかもほうって、出かけました。けれど、今日の経験で、みなさんは、家をたのしくするには、めいめいが、

受持の仕事を忠実にやらなければならぬということがわかったと思います。ハンナとあたしが、みんなの仕事をしていれば、あなたがたは、そう幸福で気らくだったとは思いませんが、とどこおりなくやっていけたのです。だから、かあさんは、だれもかれも、じぶんのことばかり思ったら、どんなことになるか、教訓としてみんなに見せておきたかったのです。あなたがたが、たがいに助け合い、まい日のお仕事があれば、ひまになったとき、それがとてもたのしく思えるし、くるしいときにはたがいに、しんぼうし合っていけば、家はどんなにたのしく美しいでしょう。わかりましたか？」

「わかりました。よくわかりました。」

娘たちは、口々にさげびました。

「では、かあさんのいうことを聞いて、もう一度、小さい重荷をしようのですよ。たまには重く思っても、みんなのためになり、なればかるくなっていきます。はたらくことは健康にもよく、たいくつはしないし、わるい心も起らないものです。身体にも心にもよく、お金や流行ものなどより、精神力や独立心をあたえてくれます。」

みんなは、はたらくことにきめました。よろこんで。ジヨウは、お料理をけいこする、メグは、おかあさんにかわって、おとうさんへ送るシャツをぬう、ベスはピアノやお人形

あそびにあまり時間をとれないで、まい日勉強する、エミイは、ボタンのあなかがりがじようずになるように、また文法にかなう言葉づかいのけいこをすると、てんでに決心をのべました。

「けっこうです。かあさんは、今度の経験がうまくいって、よかったと思います。もうくりかえさなくてもいいと思います。でもね。どれいのように、はたらきすぎないように、はたらくにもあそびにも、時間をきめて、まい日を有益にたのしく送って、時間をじょうずに使い、時間のねうちをさとするようになさい。それできたら、貧乏でも、娘時代をたのしくすごせるし、年をとってから後悔することもなく、この人生をりっぱに生きていけるのです。」

「よくわかりました。」と、娘たちは、おかあさんの教訓を、ふかくも心にとどめました。

第十二 ローレンスのキャンプ

ベスは郵便局長でした。たいてい家にいて、時間をきめて局へいくことができましたし、かぎで小さな扉を開けて、郵便物をとって来て、くばるのがすきだったからです。七月の

ある日のこと、ベスはりよう手にいっぱい郵便物をかかえて帰り、家中にくぼりました。「おかあさん、はい、花束、ローリイは一度も忘れたことないのねえ。」と、いつて、ベスはおかあさんの花瓶にさしました。

「メグねえさんには、手紙が一本、手ぶくろが片っぱ。」

メグは、おかあさんのそばにすわって、シャツのそで口をぬっていました。

「あら、りようほう忘れて来たのに。お庭に落して来やしない？」

「いいえ、郵便局に片っぱしかなかったわ。」

「片っぱなんていやだわ。でもそのうちに片っぱ見つかるでしょう。あたしのお手紙は、ドイツの歌の訳したのがはいつているだけ、きつとブルック先生がなさったのね。」

「ジョウ博士には、手紙が二通、本が一冊、おかしな古帽子、帽子は大きくて、郵便局からはみ出していました。」

ベスは、書齋でなにか書きものしているジョウに、笑いながらいいました。

「まあ、いやなローリイさん、あたし日にやけるから大きな帽子がはやるといいといったら、流行なんか気にしないで、大きな帽子かぶりなさいって言うから、あればかぶるといったの。いいわ。あたしかぶって、流行なんか気にしないこと見せてあげよう。」

その帽子をそばの胸像にひっかけて、手紙を読みはじめました。それはおかあさんから
の手紙で、ジヨウの目はよろこびにかがやきました。

「愛するジヨウ——あなたが、かんしやくをおさえようと努めているのを見て、かあさんはたいへんうれしく思っています。あなたはその試み、失敗、成功についてなにもいわないし、日々あなたを助けて下さる神さまのほかには、だれも見えていないと考えておいでしよう。けれど、かあさんものこらず見ていました。そして、りっぱな実がむすびそうですから、あなたの決心が真心からであることがわかります。愛する娘よ、しんぼう強く勇ましくやり通して下さい。かあさんが、あなたに同情をよせていることを、常に信じて下さい。」

「まあ、うれしい。百万円もらって山ほど賞讃されるよりうれしい。かあさんが助けて下さるんですもの、あたしやります。」

ジヨウは、顔をふせたので、うれし涙で原稿をぬらしてしまいました。やっと顔をあげたジヨウはこのありがたい手紙を、ふいにおそって来る敵へのふせぎの楯にするつもりで、上衣の内がわにピンでとめました。

もう一つの手紙はローリーからでした。

「やあ、親愛なるジョウさん、明日、イギリス人の男の子と女の子が二三人来るから、おもしろくあそびたいのです。天気がよかったら、ロングメドウヘボートでいってテントを張り、べんとうを食べてからクロツケーをし遊ぼうというわけ。焚火をし料理をつくり、ジブシイみたいにするつもり、みんないい人たちで、そういうことが好き、ブルック先生もいっしょで、男の子のかんとくをして下さるし、ケイト・ボガンさんが女の子をとりしまつて下さいます。みんなぜひ来て下さい。食料の心配は無用、すべてぼくのほうで用意します。右とりいそぎ、あなたの永久の友ローリイ。」

「すてきだわ!」と、ジョウはさげんで、メグに知らせるためにいそぎました。

「ね、かあさん、いつてもいいでしょう。いけばローリイも助かるわ。あたしボートこげるし、メグはおべんとうの世話ができるし、エミイやバスだつてなにか役にたつわ。」

「ボガンの人たち、大人くさくなければいいのね。あの人たちのこと知ってる?」と、メグがいました。

「兄妹四人ということしか知らないわ。ケイトはあなたより年上、ふた児のフレッドとフランクはあたしぐらい、グレースは九つか十でしょう。ローリイは、その人たちと外国で知り合ったんだって。兄妹のうち男の子が好きらしいのよ。でもローリイは、ケイトをあ

まり好きでないらしいわ。」

メグとジヨウは、着ていく服について話し合いました。キャンプだから、しわくちやになつてもかまわないものにするにきまりました。ジヨウは、

「さあ、精出して、今日中に、二倍の仕事をしておきましょう。明日、安心して遊べるように」といって、ほうきをとりにいきました。

つぎの日、いい天気を約束しに、お日さまが娘たちの部屋をのぞいたとき、そこでは、娘たちがたのしい遠足の仕度をしていました。ベスは、さっさと仕度をすまして、窓ぎわへいって、おとなりのようすを、たえず知らせました。

「あ、おべんとうをつめている。あら、ローリイが、まるで水兵さんみたいなかこうをして……」

やがて、みんなの仕度ができました。ジヨウは、ローリイがじょうだん半分でよこした旧式の麦わら帽子をかぶり、あかいリボンをしぼりました。それを見て、メグがやめなさいという、ジヨウは

「あたし、だんぜんかぶっていくの。だって、かるくて大きくて日よけになるし、みんなおもしろがるわよ。」と、いって、平気で出ていきました。それにつづいて、はなやかな

三人の娘たちの小隊がきました。

ローリイは、かけて来て小隊をむかえ、じぶんの友だちに紹介しました。芝生が応接間になり、そこに陽気な光景がひろげられました。すぐにみんなは心やすくなり、えんりよなく話し合いました。

テントやおべんとうは、クロツケーの道具などといっしょに、さきへ運んでありましたので、一行は二隻のボートにのりこんで岸をはなれました。ローレンス氏は、岸に立つて帽子をふっていました。ローリイとジョウが一隻のボートをこぎ、ブルック先生と大学生のネットが、もう一隻のほうをこぎました。ジョウのおかしな帽子は、みんなを笑わせて気分をやわらげ、ボートをこぐと、つばがばたばたしてすずしい風が起りましたし、ジョウにいわせれば、もし夕立でもふれば、みんなをいれてあげることができるそうでした。

メグは、もう一隻のボートにのっていました。ブルック先生とネットにとって、よろこばしい存在で、この二人の青年は、メグがいるので、いつもよりいっそうじょうずにボートをこぎました。

ロングメドウについたとき、もうテントがはられ、クロツケーをするための、鉄輪がとりつけてありました。そこは、気持のよい緑の野原で、まんやかに、三本の檜の樹が、広

く枝をはり、クロツケーをする芝生は、きれいに刈りこまれていました。

「キャンプ・ローレンスばんざい！」

みんなが、よろこびの声とともに上陸すると、ローリイがいました。

「ブルツク先生が司令官で、ぼくが兵站総監、ほかのみんなは参謀です。それから、女のかたはお客さま、テントはみなさんのために、とくに張ったもので、檜の樹のところは客間、ここが食堂、そちらが台所です。あまり暑くならないうちに、ゲームをやつて、それから、ごちそうの支度をしましょう。」

フランク、ベス、エミイ、それからグレースは芝生に腰をおろし、ほかの八人がクロツケーをはじめました。ブルツク先生はメグとケイトとフレッドと組み、ローリイは、サリ、ジョウ、ネッドと組みました。みんな張りきつて、ものすごく戦い、しばらくは、どちらが勝つか敗けるわかりませんでした。そのうちに、フレッドが、だれも近くにいなかつたので、じぶんの打ちいいように、ボールを靴のさきでころがしました。そして、

「ぼくはいったよ。さあ、ジョウ、あなたを敗かして、ぼくが一ばんだ。」と、いいました。

ジョウは、ずるいフレッドにむかつて、やり返しました。そして、しばらく戦いました

が、とうとう勝つことができました。

ローリイは、帽子をほおりあげましたが、お客の敗けたのをよろこんではいけないと気がつき、小声になってジヨウにいいました。

「きみ、えらかったぞ。あいつインチキやった。ぼく見てた。みんなの前でいつてやることできないが、二度とやらないだろう。」

メグも、髪をなおすふりをしてジヨウをひきよせ、さも感心したというような顔で、

「ほんとに、しゃくだったわ。でも、よくこらえたわ。あたし、うれしかった。」

「ほめないですよ。メグ。今だつてあいつの横っ面はりとぼしたいくらいよ。もうすこしであのとき、かんしやく玉がはれつしそうだったわ。」と、ジヨウは、フレッドをにらみつけました。

時計を出して、ブルツク先生がいました。

「さあ、おべんとうにしましょう。兵站総監、きみは火を起させたり、水をくませたりして下さい。マーチさんとサリーさんとぼくとで食卓の支度をするから、たれかコーヒーをじょうずにいれる人はいませんか？」

「ジヨウがじょうずです。」と、メグはよろこんで妹をすいせんしました。

ジヨウは、このごろ、料理のけいこをしたので、こんな名譽な役をひきうけられるのだ
と思いつながら、支度にかかりました。そのあいだに、少年たちは火を起し、近くの泉から
水をくんで来ました。司令官とその部下は、すぐにテーブルかけをひろげ、食べものや飲
みものをならべ、みどりの葉でかざりました。コーヒーの用意ができると、みんな席につ
きました。食慾はさかんでしたし、まことにたのしく、しばしば起る大きな笑い声は、近
くで草を食べているおとなしい馬をおどろかせました。

食事がすむと、すずしくなるまで、なにか遊びをしようということになり、櫛の樹のか
げ、すなわち客間へ席をうつしました。

ケイトが、尻とり話をしようといいました。

「いいですか、たれかが、勝手なお話をはじめのよ。そして、好きなだけつづけて、お
もしろそうなところで、ぷつぷつときつてしまうのよ。すると、つぎの人がそれをつづけ、
じゆんに話していくと悲しいのやおかしいのや、ごっちゃになっておもしろいわ。さ、で
は、どうぞあなたから。」と、ケイトが命令するような調子でいったので、ブルック先生
がはじめました。

「むかし、ある一人の騎士が立身出世しようと思つて旅に出ました……」

ブルック先生は、ゆたかな想像で話しました。この騎士は二十八年も旅をつづけ、ある王宮へいきますと、王さまはまだならしていない馬を、うまくしこんだ者に、ほうびを与えると申されました。そこで、騎士はその馬をしこむために、まい日、のりまわししている、お城に美しいおひめさまが、魔法のためにとじこめられ、自由になるお金をつくるために、糸をつむいでいることを知りました。騎士は、貧乏なので、お金はなし、しかたがないので、お城の扉をたたくと……と後の待たれるように話をきりました。

それをつづけたのは、ケイト、ネッド、メグ、ジョウ、フレッド、サリー、エミイ、ローリー、フランクというじゆんでしたが、話のすじは、じつに変化していき、おほりに落ちたり、墓場のようなろうかを歩いていたり、そこで見つけたかぎ煙草をかいだら首がおちたり、そうかと思うと、たちまち生きかえったり、箱の中でダンスしたら、それが軍艦にかわったり、聞いている者も、ときには笑い出し、ときには眉をしかめ、はてしもなく変化していく話をおもしろく思いました。

話がすむと、サリーがいました。

「ずいぶん、へんな話でしたね。だけど、練習すれば、もっといいのができそうね。それじゃ、今後はツルースっていうあそびごぞんじ？」

「どんなの？」

「そうね、みんなで手をかさねておいて、かずをきめて、じゅんじゅんに手をのけていて、そのかずにあたった人が、ほかの人の質問になんでも正直に答えるの。それやおもしろいわ。」

「やってみましょう。」と、新しいことの好きなジヨウがいました。そして、みんなで手をかさね、じゅんじゅんにのいていくと、ローリイがあたりました。

「だれ、あなたの尊敬する英雄は？」と、ジヨウが尋ねました。

「おじいさんと、ナポレオン。」

「一ばん美しいと思う女の人は？」と、フレッド。

「もちろん、ジヨウ。」

ローリイの、あたり前さというような顔つきに、みんなどつと笑ったので、ジヨウは、「ずいぶん、ばかげた質問ね。」と、けいべつするように肩をすぼめました。

「さ、もう一度やろう。おもしろいね。」と、フレッドがいました。今度はジヨウのばんでした。

「あなたの一ばん大きい欠点は？」と、フレッドが尋ねました。

「かんしゃく。」

「一ばんほしいものは？」と、ローリイがいましたが、ほしいものをいえば、ローリイがくれそうなので、わざと、

「靴のひも」と、答えました。

「そんなのだから、ほんとのこといわなくちゃ。」と、ローリイ。

「天才、あなたは、あたしに天才をくれたと思うかい？」と、ジヨウはいつて笑いしました。

「男の美点のなかで、なにが一ばんだいじ？」

「勇気と正直」

すると、フレッドが、

「今度はぼくのぼんだ。」と、いいました。

ローリイが、あれをいっておやりと、ささやいたので、ジヨウはすぐにきり出しました。

「クロツケーでインチキやらなかった？」

「うん、ちょっと。」

「よろしい、きみのさっきの尻とり話、海のライオンという本からとらなかった？」と、

ローリー。

「いくらかね。」

「イギリス国民は、あらゆる点で完全と思いますか？」と、サリー。

「そう思わなかったら、イギリス人の自分は、はずかしいですよ。」

「それでこそほんとのイギリス人だ。さあ、今度はサリーのぼんだ。」

「あなたは、じぶんをおてんば娘だと思いませんか？」と、ローリー。

「ひどいわ。そんな女じゃないわ。」

「なにが一ばんきらい？」と、フレッド。

「くもと、ライス・プディング。」

「一ばん好きなのは？」と、ジョウ。

「ダンスとフランスの手ぶくろ。」

そのとき、ジョウが、頭をふって、

「つまらない遊びね。それより作家トランプを、おもしろくやらない？」

ネットとフランクと小さい女の子がくわわって遊んでいるあいだ、年上の三人はそこからはなれて腰をおろして話しました。ケイトは、ふたたび写生帳をとり出してかき、メグ

はそれをながめブルック先生は草の上にねころんでいました。メグは、ケイトのかくのを見て、おどろきの声で、

「なんておじょうずなんでしょう！ あたしもあんなにかいてみたいわ。」と、いいました。

「どうして、おけいこなさらないの？ あなたは絵の天分がおありですわ。」

それから、家庭教師のことになり、ケイトは家庭教師について習ったから、あなたも家庭教師に習うといいと思いました。メグは家庭教師につくどころか、じぶんは家庭教師として教えるにいつているといいますと、ケイトは、

「まあ、そうなんですの。」と、いいましたが、そのいいかたは、おやおや、いやなことだと、というような調子でした。ブルック先生は、とりなすように、

「アメリカのおじょうさんがたは、先祖がそうであったように、独立し自活することがたつとばれるのです。」と、いいました。

ケイトは、眉をひそめて、去っていきましたが、それを見送りながらメグはいいました。「あたし、イギリス人が、女の家庭教師をけいべつすることを忘れていました。」

ブルック先生は、むしろ満足そうに、

「あちらでは、男の家庭教師だつてよくいいません。なきけないことですがね、なんといつても、われわれはたらく者には、アメリカほどいいところはありませぬ。」と、いったので、メグはじぶんのことを嘆いたのを、むしろはずかしくなりました。

「ええ、あたしアメリカに生れたのをうれしく思いますわ。そのために、たくさんのよろこびを得ているのですから。ただ、あたし、あなたのように教えることが好きになれたら、どんなにいいでしょう。」

「ローリーがあなたの生徒だつたら、あなたも教えるのがたのしくなります。来年ローリーと別れなければならぬので、ざんねんですよ。」

「大学へいらつしやるのでしょうか？」

「そうです。準備はだいたいできています。ローリーがいけば、ぼくは軍隊にはいります。」

「まあ、すてき！ わかい男のかたは、兵隊にいきたがるのはほんとですね。お家にのころおかあさんや、姉妹たちはつらいでしょうが。」

「ぼくは一人ぼっちです。友だちもすくないし、ぼくが死のうが生きようが、たれも心配する者はいませぬ。」

「ローリイやおじいさんが心配なさいますわ。それに、あたしたちだって、あなたがおかげでもなされば、悲しみますわ。」

「ありがとうございます。そう聞いてうれしく思いますよ。」と、ブルック先生は、また快活になつて話しつづけましたが、ネツドが馬にのつて来たので、しずかに話し合うことはできませんでした。

たった一つ、メグやジョウのおどろいたことがありました。それは、バスが、人をよろこばせたいという一心から、足のわるいフランクに話を聞かせてやっている光景でした。それは、また、フランクのいもうとにとつても、びっくりするようなことで、いもうとのグレースは、

「フランクにいさんが、あんなに笑っているの知らないわ。」と、いいました。

日ぐれ近くまで、また、いろいろのあそびをしました。帰り支度は、みんなでやり、テントをたたみ、クロツケの鉄輪をぬき、一行はボートにのりこみ、声はりあげてうたいながら、川を下つていきました。ネツドは、センチメンタルになつて、

ひとり、ひとり、ああ、ただ、ひとり。

われら、いまだ年わか

みなあたたかき心もつに

なぜにつめたくはなれいく。

と、いうところで、わざとあわれつぽい表情をして、メグをながめましたので、メグは笑い出してしまい、その歌をめちやめちやにしまいました。

「あなたは、どうしてぼくにたらくあたるんです？ 今日一日、あなたはあのかたくるしいイギリス人にばかりくつついていて、今度はぼくを鼻であしらうんですね。」

「そんなつもりじゃなくってよ。あんまりおかしな顔をなさるので、つい。」

ネッドは怒って、サリーの同意を得ようとして、

「あの人、すこしも情味のない人ね。」

「ちつとも。だけど、かわいい人。」

サリーは、友だちの短所をみとめながらもかばいました。

「とにかく、あの方は手おい鹿ではないね。」

ネッドは、しやれたつもりでしたが、たいしたしやれとはいえませんでした。

朝、集合したローレンス家の芝生で、みんなは、たがいに、あいさつして別れをおしました。というのは、ボガン家の人たちは、カナダへ帰っていくからでした。四人の姉妹

は、庭を通つて家へ帰りましたが、そのうしろすがたをながめていたケイトは、今度はかばうような調子などをまじえずにいました。

「アメリカの娘さんたちは、ずいぶん露骨なところはあられるけれど、よく知つてみると、とてもいい人たちねえ。」

すると、ブルツク先生がいました。

「ぼくも同感ですね。」

第十三 美しい空中楼閣

九月のあるあたたかい日の午後、ローリイは、マーチ家の連中が、なにをしているだろうと考えながらも、わざわざ見に出かけていくのもおつくうなので、ただハンモックにゆるられていました。

かれは、ふきげんでした。その日は、することがうまくいかず、あたたかいので身体はだるく、勉強をすつぽかしてブルツク先生をいやがらせ、お昼からピアノをひきつづけて、おじいさんの気持をそこね、家の犬が一匹、気がくるったといつて女中をおどかし、馬に

ひどくしたといって馬丁とけんかし、世のなかはおもしろくないやと、ぷんぷん怒って、ハンモックにとびこんだのです。

けれど、美しくのどかなので、かれの気持はやすまり、世界一周の航海をしているような空想にふけていると、人声がして空想はやぶれました。見るとマーチ家の姉妹たちが出かけていくところでした。けれど、いつもとようすがちがって、めいめい大きなつばの帽子をかぶり、肩に茶色のふくろをかけて長いつえをつき、メグはクツション、ジョウは本、ベスはひしやく、エミイは紙ばさみを、それぞれ持っていました。一行は、しずかに庭をぬけ、うら木戸を出て、家と川のあいだにある丘をのぼりはじめました。

「ひどいなあ。ぼくを誘わないでピクニックにいくなんて。かぎをもっていないから、ポートにのれまい。よし、持っていてやろう。そして、なにをするのか見て来よう。」

ローリイは、どの帽子をかぶろうかとまよい、かぎをさんざんさがし、かぎがポケットにはいつているのに気がつくつと、さつそく後を追いましたが、少女たちのすがたはなく、ポート小屋へいききましたが、だれも来ないので、上へのぼっていききました。すると、松の木立のかげから、風の音よりも、こおろぎの歌よりも、もっとほがらかな声が聞えて来ました。

「すてきだ！」と、ローリイは、目がさめたような思いでした。

姉妹たちは、木かげにすわり、太陽の光と木の影が、その上にゆれていました。メグはぬいものをしていましたが、ピンクのドレスがばらのようにあざやかでした。ベスは、松ぼつくりをよりわけていました。エミイは、一むらのしだを写生していました。そして、ジヨウは、大きな声で本を読みながら、あみものをしていました。この光景が、ローリイの心をとらえました。ローリイは、そばへいきたいが、誘われたのでもなし、家へ帰るべきだが、家はたまらなくさびしく、それで立ち去りかねていると、リスがかれのすがたにおどろいて、するどい声を出しました。その声に、ベスが顔をあげると、ローリイのさびしそうな顔があつたので、安心させるように、にっこり笑って手まねきました。

「ぼく、いつでも、いいですか？」

メグは、眉をつりあげて、いけないといやうすをしました。メグはメグに顔をしかめて、

「だいじょうぶよ、いらつしやい。お誘いしようと思つたけど、こんな女の遊びなんか、つまらないと思つたのよ。」

「あなたたちの遊びなら好きです。でもメグがいやなら、ぼく帰ります。」

「いやじゃありませんわ。そのかわり、ここでは怠けてはいけないという規則だから、あなたもなにかしなければいけませんよ。」

「どうもありがとう。なんでもします。だって家は、さばくみたいに退屈です。」

ローリイは、うれしそうでした。

「それでは、あたしが、かかとをあんできているあいだに、この本を読んでしまつてね。」

ジョウが本をわたすと、ローリイは、はいと、うやうやしく答えて「はたらきばち会」に入会させてくれた好意に感謝して、熱心に読みはじめました。その物語はあまり長くはなく、ローリイは読みおわると、労にむくいてもらうために、二三の質問を出しました。

「ちよつとうかがいますが、この有益な会は、新らしくできたんですか？」

姉妹たちは顔を見合せました。秘密にしておくべきか、それともうち明けるべきか？

ローリイにならいつてもいいと、みんなは考えました。ジョウは、にっこり笑っていいました。

「あたしたち、巡礼あそびを、冬から夏までつづけて来たの。そして、この休暇には、怠けないようにと思つて、めいめい仕事をこしらえて精いっぱいやりました。休暇はもうじきおわりですが、仕事はみんなできて、よろこんでいますの。ところで、おかあさんは、

あたしたちを、外へ出したがつていらっしやるので、この丘へ仕事を持って来て、おもしろくやっているの。」

ローリイは、うなずいていました。

「ああ、それで、ふくろをしよい、杖をつき、古い帽子をかぶるんですね。」

「あたしたちは、この丘のことを、よろこびの山とってますの。ずっと、むこうまで見たせるし、あたしたちが、いつかは住んでみたいと思う国も見えるからです。」

ジョウが、ゆびさしたので、ローリイは立ちあがってながめました。あおい川、ひろびろとした草地、そのむこうのみどりの山々、その峰にたなびく金と紫の雲、まことに、天の都を思わせるものがありました。

「なんてうつくしいだろう！」と、ローリイは、美しさをす早く見つけました。

「あのうつくしい景色のところ、あたしたちのほんとの国で、みんなでそこへいけたら、うれしいと思うわ。」と、ベスがいますと、メグは、やさしい声で、

「あれよか、もつとうつくしい国があるのよ。あたしたちが、りっぱな人になったら、そこへいけるのよ。」と、いいました。

「ベスなんか、いつかいけるでしょうが、あたしなんか、戦ったりはたらいたり、のぼっ

たりすべったりで、いかれそうにもないわ。」

「ジョウがいうと、ローリーも、」

「ぼく、ベスの道づれになりますよ。でも、ぼくがその旅におくれたら、やさしい言葉をかけてくれるでしょうね？」

ベスは、なんと返事してよいかこまったようでしたが、快活にいいました。

「だれだって、ほんとはいきたい気持で、一生、努力の旅をつづけたら天の都へいけると思うわ。」

しばらく沈黙がつづいた後、ジョウがいいました。

「あたしたちの勝手に考える空中楼阁がみんなほんとのものになって、そこに住むことができれば、どんなにおもしろいでしょう。」

「ぼくは見たいだけ世界を見物してから、ドイツにおちついて、好きなだけ音楽を勉強して、有名な音楽家になるんです。けれど、ぼくはお金だとか、商売とかすこしも気にかげずに、じぶんの好きなように暮すんです。これがぼくの気についている空中楼阁です。」

ローリーがそういうと、メグがつぎをつづけました。

「あたしは、いろいろぜいたくなものが、たくさんあるうつくしい家がいいわ。おいしい

食べもの、きれいな服、りっぱな道具、感じのいい人たち、そして、お金は山ほどあるの。あたしその家のおくさんで、召使をたくさん使って。でも怠けたりしないで、いいことをして、みんなからかわいがられたい。」

ジョウは、ずばりと、

「おねえさんは、なぜひこうでやさしい夫と、天使のような子供がいてと、おっしゃらないの。それがなかったら、おねえさんの空中楼閣はできないわ。」と、いいました。

「あなたの空中楼閣には、馬とインクつぼと小説しかはいっていないんでしょう？」と、メグはすこしむつとしていいかえました。

「いいじゃないの。アラビア馬のいっばいはいった馬屋と、本をつみあげた部屋と、魔法のインクつぼがあれば、あたしは、そのインクつぼで、ローリーの音楽とおなじくらい、有名な作品を書くんだわ。だけど、あたしその空中楼閣へはいる前に、なにかすばらしい英雄的なこと、そうね、あたしが死んでも人から忘れられないようなこと、やってみたいわねえ。そうだ、あたし本を書いてお金持になり有名になれたらいいわ。それがあたしに似合っているの。それ、あたしの大好きな空想よ。」

「あたしのは、無事におとうさんやおかあさんといつしよに家で暮して、家の人たちの世

話をしてあげることですわ。」と、ベスがいうと、ローリイが尋ねました。

「ほかには、なにか望みはないの？」

「あのかわいいピアノをいただいたから、ほかになんにも望みはありません。」
すると、エミイがいました。

「あたしは、絵をかきにローマへいき、りっぱなものをかいて、世界中で一ばんえらい画家になることですわ。」

「ぼくたち、なかなかの野心家ですね。ベスのほかは、金持になり、有名になり、あらゆる点でえらくなるうというのですから。」と、ローリイがいうと、ジョウが、

「今から十年たつて、みんな生きていたらあつまつて、だれが望みをとげたか、だれが望みに近づいたか見ましようよ。」と、いいました。

「そしたら、あたしいくつ？ 二十七ね。」と、メグ。すると、すぐにジョウが、

「ローリイとあたしが二十六、ベスが二十四、エミイが二十二、なんとみなさん、相当の御先輩というわけね。」

「ぼくは、それまでになにか、じまんになるようなことしたいな、だけど、ぼくはこんな怠け者だから、だめだろう。ねえ、ジョウ。」

「おかあさんが、あなたにはなにかいい動機があれば、きつとすばらしいことなさるって、いつてらしたわ。」

「そうですか。ぼくやります。ぼくは、おじいさんの、氣にいるようにしたいんですが、できないんですよ。おじいさんは、後つぎにして、インド貿易商にしたがっているんです。だけど、ぼくいやだ。大学へ四年いくだけで、満足して下さればいいのに、ああ、おじいさんを世話して下さるかたがあれば、ぼくは明日にも家をとび出すんだがなあ。」

ローリイは、ひどく氣がたかぶっていました。かれには青年の熱情があり、じぶんのちからで世の荒浪をのりきつていこうとして、いるのでした。ジヨウは同情して、

「あなたの船で海へのり出し、したいほうだいなこととして、あきるまで帰らなければいいわ。」と、じぶんの好きな空想でありました。びつくりしたメグはいいました。

「いけないわ。ジヨウ、あんなこといって、ローリイもそんな忠告聞いてはだめ。あなたで一心に勉強すれば、おじいさんもいつまでもがんこなこといわないで、きつとあなたの望みをかなえて下さいます。だから、さびしがったり、いらいらしないで、じぶんの務めをはたすようになさいね。そうすれば、ブルック先生のように、みんなからたつとばれ愛されるようになります。」

それから、メグは、ブルック先生が、おかあさんのなくなるまで孝養をつくしたこと、おかあさんからはなれたくないので、家庭教師として外国へいけるのをこわったこと、そして、今でもなくなつたおかあさんの看病をしてくれたおばあさんに、まい月、仕送りをしていること、それをだれにもいわずにいたことなど、ローリイのおじいさんが、メグのおかあさんに話したことを話し、どうかそのりっぱなブルック先生を満足させるように、よく勉強しなければいけないと、まるで、ねえさんみたいに、ローリイにいつて聞かせました。そして、こうつけ加えました。

「ごめんなさい。お説教したりして。けれど、まるでほんとの兄弟みたいな気がするものですから、思つたとおりのことなのよ。」

ローリイは、親切なメグの言葉をありがたく思い、

「ねえさんのように、ぼくの欠点をいつて下さつてありがとう。今日はぼくふきげんだつたけど、これでさつぱりした。」

ローリイは、できるだけ愉快にしようとして、メグの糸をまいてやつたり、ジヨウをよろこばそうとして、詩をうたつたり、バスに松ぼっくりを落してやつたり、エミイの写生を手つだつてやつたりはたらきばち会の会員にふさわしいように努めました。そのうちに、

ハンナの知らせるベルが聞えました。みんなが家へ帰る時間です。ローリイは、

「ぼく、また来てもいい？」

メグは、にこにこして、

「ええ、おとなしくして、本が好きになれたらね。」

「好きになります。」

「じゃ、いらつしやい、あみもの教えてあげるわ。スコットランド人は、男でもあみものするのよ。それに、今とても靴下の注文があるんですって。」

その晩、ベスはローレンス老人のためにピアノをひきました。ローリイはそれをカーテンのかげにたたずんで聞きました。ベスのあどけない音楽は、ローリイの気持ちをしずめてくれ、おじいさんのことが、しみじみとなつかしく思われるのでした。そして、その日の午後のメグの話の思い出しながら、よろこんで犠牲をはらうつもりで、

「ぼくは、空中楼阁なんてすてて、おじいさんが望むだけ、いつまでも、いっしょにいてあげよう。おじいさんは、ぼくだけしか、頼る人がないんだもの。」と、ひとり言をいきました。

第十四 秘密

十月にはいると、寒さもきびしくなり、日ざしもみじかくなつたので、ジヨウは屋根部屋でいそがしい日を送りました。最後のページをおわって、じぶんの名を花文字で書くと、ペンをなげ出していいました。

「さあ、できあがった、これでだめなら、もつとよく書けるまで待たなくてはならない。」ソファにころりとあおむきになり、ジヨウは念入りに原稿を読みなおし、ところどころに、線をひいたり、感嘆符をつけたりしました。それから、あかいリボンでとじました。この屋根部屋のジヨウの机は、かべにとりつけてある古いブリキの台所用のたなでした。ジヨウは、そのなかへ原稿用紙や二三冊の本をしまいこんで、ねずみの、がりがりさんに、荒らされないようにしました。がりがりさんは、やっぱり文学好きで、原稿用紙や本をよくかじるからです。ジヨウは、ブリキのいれものからもう一つの原稿をとり出し、今書きおわった原稿といっしよに、ポケットにねじこんで階段をおりました。それから、こつそり家を出て、通りがかりの乗合馬車をよびとめてのり、いかにもたのしそうな、秘密ありそうな顔つきで、町のほうへいきました。

町へ来たジヨウは、大いそぎで、あるにぎやかな通りの、ある番地まで突進しました。やつとある家をさがし出しましたが、そのきたない階段を見あげると、じつと立ちどまっていたましたが、きゆうに、また大いそぎで帰っていききました。こんなことを二三回くりかえしたあげく、まるで歯をすつかりぬいてもらうような悲壮な顔つきで階段をのぼっていききました。その建物には歯科医もあつたのです。

それを見ていたのは、むかいがわの建物の、窓のところをぶらぶらしていたわかい紳士でした。

「一人で来るなんて、あの人らしいな。けれど、気分でもわるくなったら、家までつきそってあげなくちゃ。」

十分とたたないうちに、ジヨウはまっかな顔をして、なにかおどろくほど苦しい目にあつたように階段をかけおりて来ました。わかい紳士は、ほかならぬローリーイでしたが、ジヨウがちよいと頭をさげていきすぎたので、すぐに後をおって尋ねました。

「とても痛かった？」

「そんなでもなかったわ。」

「早くすんだねえ。ずいぶん。」

「ええ、うまくいったわ！」

「どうして一人でいったの？」

「たれにも知らせたくなかったからよ。」

「ずいぶん、かわっているんだね。きみは、それで、なん本ぬいたの？」

ジヨウは、ローリーのいう意味がわからないのでかれの顔をながめました、はっと気がついて、おもしろくてたまらないというように笑いました。

「二本ぬいてもらいたいんだけど、一週間も待たなきゃならないのよ。」

「なにを笑ってるの？ また、なにかいたずらしてきたんだね、ジヨウ。」

「あんなこそ、玉突屋でなにしたらしたの？」

「はばかりながら、玉突屋ではありません。体育館です。ぼくは剣術を習ってます。」

「まあ、うれしい！」

「なぜ？」

「あたし教えてもらえるもの。そうすれば、今度ハムレットをやるとき、あんなレアティスやれるから、二人であるすばらしい剣術の場がやれる。」

ローリーがふき出したので、通行人が、二三人ふりかえりました。

「教えてあげるよ、ハムレットはどうでもいいが、おもしろいよ。やれば身体がしゃんとなる。でもそれだけで、あなたが、まあうれいって、あんなに強くいったとは思えないが。」

「そうよ、あんたが玉突屋にいなかったのがうれしかったの。あんた、いくの？」

「そんなに、いきませんよ。」

「いけないほうがいいわ。」

「なにもわるいことありませんよ。家の玉突では、じょうずな相手がなくてつまらない。だから、ときどきいって、ネッド・マフオットや、そのほかの連中とやるんです。」

「いやだわ、だんだん好きになつて、時間をお金をむだにして、いけない子になるんですよ。品行方正でいてほしいわ。」

「男は、品をおとさなければ、ときどきおもしろい遊びをしてはいけなにかしら？」

「それは遊ぶ方法と場処によるわ。ネッドの連中、あたしきらい、交際しないほうがいいわ。あたしの家にも来たがつているけど、おかあさんよせつけないようになさるの。あなたが、あの人みたいなら、今までどおりあなたと遊ばせないでしょう。おかあさんは。」

ローリーがいました。

「では、ぼく申しぶんのない聖人になります。」

「聖人なんてまっぴら、すなおな品のある人になってほしいわ。キングの家の息子さんみたいに、お金たくさん持つて、よっぱらったり、ぼくちをしたり、しまいに、家出しておとうさんの名をかたつて、なにか偽造までして、こわいわ。」

「ぼくも、そんなことしかねないと思ってるんですね？ どうもありがとう。」

「とんでもない。ただあたし、お金はおそろしい誘惑をするって聞いているから、あなたが貧乏だったら、心配しないでもいいと思うことがあるわ。だって、あなた、ときどきふきげんだったり、強情だったりするから、いったんまちがったほうへむいたら、ひきとめるのがむずかしいと思うわ。」

「そう、そんなに心配していてくれるの。」

ローリイは、しばらくだまりこんで歩いていました。ジヨウは、すこしいすぎたかしらんと思いましたが、やがて、ローリイは、

「あなたは家へ帰るまで説教するつもり？」

「いいえ、どうして？」

「説教するつもりなら、ぼくバスにのるし、しないなら、いっしょに歩いて、とてもおも

しろいこと聞かせてあげる。」

「しない。だから、そのニュース聞かせて。」

「よろしい、これは秘密ですよ。ぼくがいったら、あなたのもいわなければだめですよ。」

「あたし秘密なんかないわよ。」と、ジョウはいましたが、じぶんにも秘密があることを思つて、きゆうに口をつぐみました。

「あるでしょう。かくしたつてだめ、さつきと白状なさい。いわなければ、ぼくもいわない。」

「あなたの秘密おもしろいの？」

「おもしろいとも！ あなたをよく知っている人のこと。あなたが知っていなければならぬ秘密だから、教えてあげたくてうずうずしているんです。さあ、あなたからですよ。」

ジョウは、家の人にもいわないこと、からかわないことを念おして、

「じやいうわ。あたしね、小説を二つ、新聞社の人のところへおいて来たの。そして、来週返事があるの。」と、相手の耳にささやきました。ローリイは、

「アメリカにその名も高きマーチ女史ばんざい！」と、さけんで帽子を高く上げ、それをうけとめました。もう郊外を歩いていたので、それは二羽のがちようと、四ひきのねこと、

五羽のにわとりと、六人のアイルランド人の子供をよろこばせました。

「返事なんか来ないわ。このこと、たれにも失望させたくなかったから、いわなかったの。」

「なあに、だいじょうぶ、あなたの書くもの、シエークスピアの書いたものくらい、ねうちがありますよ。活字になつたらすてきだな！」

ジヨウは、そういわれると、うれしく思いました。友だちの賞讃はいいものです。

「それで、あなたの秘密つてなあに？ 公明正大にいいなさい。」

「いつてしまうと、こまることになるかもしれないんですが、いわないと気がらくになれないし、あのね。メグの片っぽうの手ぶくろのありかを知っているんです。」

「それつきり？」

「今のところ、それでじゅうぶんだよ、どこにあるかということをお教えたら。」

ローリイは、ジヨウの耳に三つの言葉をささやきましたが、その言葉でジヨウは、おどろきと不愉快な表情をしてつつ立ち、ローリイの顔を見つけてから歩き出しました。

「どうして知ってるの？」

「見たんだよ、ポケットに。」

「ずつと今でも？」

「ええ、ロマンティックじゃない？」

「いいえ、こわいわ。きらいだわ。ばかばかしい。たまらないわ。メグねえさん、なんていうかしら？」

「たれにもいわないでよ、きみを信用したからいったのさ。」

「それじゃ、当分はいわないわ。でも、いやね。聞かしてくれなければよかった。」

「ぼくは、きみがよろこぶかと思った。」

「たれかがメグをつれ出しに来るっていうことを、あたしがよろこべますか。ああ、あたしには秘密つてものは性に合わない。あなたがそんなこと聞かすものだから、気持がくしやくしやしちやつた。」

ジョウが不満らしくいうと、ローリーは、

「この坂を競走しておりよう。そうすれば、気持がさっぱりするよ。」

あたりには人かげもなく、平らな道がまねくように坂なっていました。ジョウは走り出し、帽子もくしもふり落し、髪をふりみだし、目をかがやかしました。もう不満な色はありませんでした。

「あたし馬だったら、こんなに気持のいい空気のなかを、いくらかけても息がきれないでしょう。ああおもしろかった。でも、このおかしなかつこう。あたしの落したもののひろつて来てよ。」と、ジョウは紅葉のちつているかえでの木の下にすわりました。そして、髪をなおしました。そのあいだにローリイは、ジョウの落しものをひろいにいききましたが、そこへ訪問がえりのメグが、りっぱな服を着て、貴婦人みたいに大人びて、通りかかりました。

「あなた、走ったのね、いつになったら、そんなおてんばやまるの？」

「年をとって、身体がこわばって、松葉杖をつくるようになるまでやめないわ。あたしを大人あつかいにするのいやよ。おねえさんが、きゆうに変つたのを見るのつらいわ。せめてあたしだけいつまでも子供にしておいて。」

ジョウには、メグが大人びていくように思えるのに、ローリイのいった秘密から、やがて別れというおそろしいときが、近く来そうな気がしました。

「そんなに、おめかしてどこへ？」

「ガーデナアのところへ、サリーは、ベル・マフオットの結婚のことをすっかり話してくれました。とてもりっぱでしたって、お二人はこの冬をパリで送るために、もうおたちに

なったのよ。どんなにうれしいでしょうね。」

そこへ、ローリイも帰って来て、ジヨウといっしょに、メグの結婚のことを話しているうちに、とうとうメグは、

「あたし、たれとも結婚しないわ。」と、つんと氣どって歩きはじめました。二人はその後から、子供みたいに、笑ったり、つつき合ったりしてついていきました。

さて、それから一二週間というもの、ジヨウはいかにも奇妙なふるまいが多かったので、みんなおどろいてしまいました。郵便屋の足音がすると玄関へかけていたり、ブルツク先生につっけんどうにしたり、じつとすわりこんで悲しそうな顔をしてメグをながめたり、きゆうに、メグにとびついてキッスしたり、ローリイが来ると、二人で目くばせして、新聞のことを話したり、いったい、どうしたというんでしよう？

ある日、ジヨウは家のなかへとびこんで来て、ソファに横になり、新聞を読むふりをしていました。ベスが尋ねました。

「なに読んでいらつしやるの？」

「はりあう画家という小説。」

「おもしろそうね、読んでちょうだい。」

メグがいうと、ジヨウはせきばらいをして、読みはじめましたが、ロマンチックな作で、出て来る人物は最後にみんな死んでしまうという、かなり悲壮なものでした。

「いいわ、恋をするところ好き、だあれ、作者は？」と、エミイが尋ねると、

「あなたがたの姉妹よ。」

「あなた？」と、メグがさけびました。

「とてもおじょうずね。」と、エミイ。

「ああ、あたし肩身がひろい。」と、ベス。

この成功に、みんなはおどり出したいほどよろこびました。ハンナもとびこんで来て、おどろきの声をあげ、おかあさんもどんなにほこらしく思ったでしょう。よろこびが、家中をあらしのようにひつかきまわしました。ジヨウは目にいっぱい涙をため、ミス・ジョセフィン・マーチと印刷された名前の新聞が、みんなの手から手へわたるのをながめていました。

「すっかり、話して聞かせてよ。」「いつ新聞は来たの？」「いくらいたただけるの？」

「おとうさんはなんておっしゃるかしら？」「ローリーは笑わなかった？」と、ジヨウのまわりに集った家中の者が、つぎつぎにさけびました。

「では、なにもかもいつちまうわ。」と、ジヨウは、じぶんの作品を売りにいったときのことを話し、返事を聞きにいったら、二つともおもしろいが、はじめての人には原稿料を出さないで、ただ新聞にのせるだけ、そのかわり、いいものを書けるようになったら、原稿を買いに来るとのことだったと話しました。

「それで、あたし二つともわたして来たの。そしたら、今日これを送って来たの。ローリイが見せろってきかないから見せてあげたの。ローリイは、よくできているからもって書けというの。そしてこのつぎから原稿料を出させるようにしてやるって。あたし、うれしいわ。じぶんで書いたもので食べていけて、みんなのくらしもらくにすることが、できるかもしれないんですもの。」

ジヨウは、一気でしゃべって息がきれました。そして、新聞で顔をおおって、涙でじぶんの小説をぬらしてしまいました。ペンで、一人立ちして、愛する人からほめられるようになることは、一ばんジヨウにとっては、うれしいことでありました。

第十五 雲のかげの光

「十一月つて、いやな月ね。」と、メグがいったのがきっかけで、ジヨウもエミイも、霜がれの庭をながめながら、いろんな気のひきたたない話をしていると、べつの窓から外を見ていたベスが、

「うれしいことが二つあるわ。おかあさんは町からお帰りだし、ローリイさんは、なにかおもしろいお話でもありそうに、お庭をぬけて来るわ。」

二人とも家へはいつて来ました。おかあさんに、おとうさんから手紙が来なかつたか尋ねました。ローリイは、今日は数学をやりすぎたので頭がふらつくから、ブルック先生を馬車で送っていくといい、

「どうです、みんないらつしやい。今日は陰気だけど馬車は気持ちいいですよ。」と、じょうずに誘いかけました。

メグは、そうたびたびわかい男といつしよにドライブしないほうがいいという、おかあさんの意見にしたがいたかつたので、ことわりしましたが、ほかの三人は出かけることになりました。ローリイは「おばさん、なにか御用はありませんか？」と、いつもの愛くるしい声で尋ねますと、マーチ夫人はいいました。

「ありがとう。できたら郵便局へよつて下さい。今日は手紙の来る日なのに、郵便屋さん

が来ません。おとうさんは、お日さまがまい日であるように、まちがいなく手紙を下さるのに。」

そのとき、けたたましいベルが鳴って、まもなくハンナが一枚の紙を持って来ました。ハンナは、「おくさま、おそろしい電報が来ました。」といって、その電報が爆発でもするかのように、こわごわ出しました。

おかあさんは、それをひつたくるようにして読みましたが、まるで弾丸を胸にうちこまれたかのように、まっさおになって、イスにたおれかかりました。ローリーは、水をとりに階下へかけおり、メグとハンナはおかあさんをだき起し、ジヨウはふるえ声で読みあげました。

マーチ夫人へ——ゴシユジン　ジユウタイ　スグコラレタシ。ワシントン　ブランクビ
ヨウイン　エス・ヘール

部屋は水をうったようにしんとまりました。娘たちは、じぶんたちの生活のあらゆる幸福と力がうばい去られるような気がしました。おかあさんは、すぐにわれにかえって、電報を読みなおし、悲痛な声でいいました。

「あたしはすぐに出かけます。けれど、もうまにあわないかもしれませぬ。ああ、あなた

たち、どうかおかあさんが、それに耐えられるように力を貸して下さい。」

しばらくは、とぎれとぎれのなぐさめの言葉や、助け合うという誓いの言葉や、神さまの加護を信ずる言葉にまじるすすり泣きの声のほかに、部屋にはなんの音もしませんでした。けれど、あわれなハンナがわれにかえり、じぶんでは気づかないちえで、ほかの者にいい手本を示しました。すなわち、ハンナにとっては、はたらくということが、たいていの心配ごとをなおす良薬でありました。

「神さまが、だんなさまをお守り下さいます。わたしは泣いてばかりいられません。おくさまがおたちになる仕度をしなければなりません。」と、ハンナは真心からいって、涙をエプロンでぬぐい、そのかたい手でマーチ婦人の手をにぎって、人一倍はたらくために出てきました。

「ハンナのいうとおりです。泣いているときではありません。みんなおちついてちょうだい。そしておかあさんに考えさせておくれ。」

おかあさんが、あおぎめた顔をしながらも、気をとりなおして悲しみをおさえ、娘たちのためにいろいろ考えはじめたとき、娘たちも気をおちつけようと思いました。

「ローリーはどこ？」と、おかあさんは、まず第一になすべきことをきめたのです。

「ここにいます。おばさん、どうぞなにかさせて下さい。」と、ローリイは、いそいでとなりの部屋から出て来ました。かれはこの一家の人たちの悲しみのなかに、いかに親しくても、まじってはならぬと思つて、となりの部屋にしりぞいていたのです。

「あたしが、すぐ出発するという電報をうって下さい。つぎの汽車は明日の朝早く出るはずです。それでいきます。」

「そのほかには？　馬の用意はできています。どこへでもいきます。なんでもします。」

「それから、マーチおばさんのところへ手紙をとどけて下さい。ジヨウ、ペンと紙とを下さい。」

手紙が書かれ、ローリイはわたされました。

「では、すみませんがお願いします。めちやに馬を走らせてけがなんかしないで下さい。

そんなにいそがなくてもいいんですからね。」

けれど、その言葉は守られず、ローリイは五分の後には、はげしいいきおいで馬を走らせていました。

「ジヨウ、あなたは事務所へ行って、あたしがいけないってことわって来て下さい。途中で買ひ物をして来て下さい。今書きますから。それからバスはローレンスさんのところで、

古いどう酒を二本いただいで来て下さい。おとうさんのためなら、いただくのをはずかしいと思つてはいられません。エミイ。ハンナに黒革のトランクをおろすようにして下さい。メグ、あなたはおかあさんの、さがしものを手つだつて下さい。あたしはだいぶろたえていますからね。」

手紙を書いたり、考えたり、さしずしたり、すべてを一度にしなければならぬおかあさんに、メグはじぶんたちではたらくから休んでいてほしいといいました。けれど、おかあさんに休むことが、どうしてできませんよう。無事でたのしかった家は、今や不吉なあらしに吹きあらされ、みんなは木の葉のように、ふきとばされるほかはありませんでした。

ローレンス老人は、バスとともに来ました。親切な老人は、病人のためになりそうなものを、考えられるだけ考えて持つて来ました。そして、夫人の留守中は、娘たちの世話はひき受けるといいましたので、おかあさんは安心することができました。また、老人は、なんでも必要なものは提供するといひ、いっしょにワシントンへつきそつていくとさえい出しました。けれど、長い旅に老人にいつてもらうことは、とてもできませんので好意を感謝してことわりました。

老人が帰つていつてもまもなく、メグが片手にゴム靴、片手に紅茶を持つて玄関をかけて

いくと、ぼったりブルック先生にありました。

「今、聞いたのですが、ほんとうにお気のどくです。僕はおかあさんのおつきそいをしていこうと思つて来たのです。ローレンスさんが、ぼくをワシントンまでいかせる用事ができたのです。ですから、道中おかあさんのお世話ができれば、ほんとうに満足です。」

メグは、あやうくゴム靴をおとしそうになるほど、感謝にあふれました。

「みなさん、なんて御親切なんでしょう。おかあさんはきつとよろこんでお受けいたすでしょう。あなたがお世話下されば安心でございますわ。お礼の申しようもありません。」

メグは、ブルック先生を、客間へ案内しておかあさんをよびにいきました。

ローリーが、マーチおばさんからの手紙を持つて帰つたときには、すべての支度がととのつていました。その手紙のなかには頼んだお金と、おばさんが前からたびたびいつていたことが書いてありました。すなわち、マーチが軍隊にはいることはいけないといつもいつていたし、どうせろくなことにならないと、注意しておいたが、こんなことになった。今後はじぶんのいうことにしたがってほしいとありました。おかあさんは手紙を火にくべ、お金を財布にいれ、きゅつと口をむすんで、また支度をつづけました。

みじかい午後が暮れました。外の用事はすべてすみ、メグとおかあさんは、必要なぬい

もの、ベスとエミイは夕飯の支度、ハンナはアイロンかけに、みんないそがしく手をうごかしていましたが、どうしたものか、ジョウがまだ帰りません。みんなそろそろ心配しはじめていると、ジョウがみような表情で帰って来ました。そして、すこし声をつまらせて、「これおとうさんの御病気がよくなって、家へお帰りになれるようにと思ったあたしの心持だけなの。」と、いつておかあさんにおさつのたばをわたしました。

「まあ、どこから手に入れたの？ 二十五ドル、ジョウ、あんたはとんでもないことしやしませんか？」

「いいえ、りっぱなあたしのお金です。じぶんのもの売ったお金です。」

ジョウが帽子をぬぐと、みんなは、あつ！と、おどろきの声をあげました。ふさふさした髪の毛はみじかく切られていました。

「このほうが、さっぱりして気持がいいわ。じぶんの髪をじまんして、虚栄心を起しそうだったが、これでもいいわ。どうぞお金とつてちようだい。」

「ジョウ、おかあさんは、満足とは思いませんが、しかりはしません。あなたが愛のために、虚栄心を犠牲にしたことはよくわかります。でもね、そんなことまでする必要はなかったのです。いつか後悔するでしょうね。」

「いいえ、そんなことありませんわ。」と、ジヨウは、じぶんのしたことを、一がいに非難されなかつたので、ほっとしていいました。

みんなは、ジヨウの髪について、いろいろ考えました。なんといつても、重大事件でした。食卓をかこんだとき、髪の話でもちきりでした。いろいろ話があつたあげく、ジヨウがいいました。

「はじめは髪を売るなんて考えなかつたのよ、どうしたらいいかと考えながら歩いているうちに、ひよいと床屋の窓を見ると、長いけれど、あたしほどくない黒髪が、一たば四十ドルなの、とつさにあたしにもお金になるものがあると気がついてはいつていったの。そして、いくら髪を買って下さるか尋ねたのよ。店の人は、女の子が髪を売りに来たことなんか、あまりないらしく、びつくりしていたけど、あたしの髪の色は、今の流行ではないといつて、なるべき安く買おうとするのよ。そこであたしお金のいるわけを話したりして、ぜひぜひといそいだの。そうしたら、おかみさんが聞きつけて出て来て、買って娘さんをよろこばしておあげなさいよ。あたしにも売れるような髪があつたら、家のジンミイのためなら売りますよと、とても親切なんですよ。ジンミイというのは、出征している息子ですつて。」

話がおわると、メグが尋ねました。

「切られるとき、こわいと思わなかった？」

「床屋さんが道具を出しているあいだに、あたし見おさめに、じぶんの髪をながめたわ。でも、あたしめそめそしないわ。でもきってしまったら、腕か足きられたようなへんな気持したわ、おかみさんはあたしがきられた髪をながめているのに気がついて、長い毛を一本ぬいて、しまっておきなさいといってくれたの。おかあさん、記念にこれさしあげます。きつたらさっぱりして、あたしもう二度とのばそうと思いません。」

おかあさんは、その毛をたたみ、おとうさんのみじかい灰色の毛といっしょに、机のなかにしまいました。おかあさんは、ただ、ありがとうといっただけでしたが、娘たちはおかあさんの顔色を見て話をかえ、ブルック氏の親切なことや、明日はよい天気になりそうなことや、おとうさんが帰っていらして、じぶんたちが看病できるたのしさなど、できるだけ元気に話しました。

だれもねたくないようでしたが、十時をうつと、おかあさんは、さあ、みなさんといいました。ピアノで、おとうさんの一ばん好きな讃美歌をひきました。元気よくうたい出しましたが、一人また一人と声が出なくなり、音楽がいつもなぐさめになるベスだけが、心

こめてうたいました。

讚美歌がおわると、娘たちはおかあさんにキツスして、しずかに床にはいりました。ベスとエミイは、大きな心配ごとがあつても、すぐにねむりましたが、メグはねむれませんでした。ジョウは、身うごきもしなかつたので、メグはもういもうとがねむつたことと思つていましたが、おさえつけたようなすすり泣きを聞いたので声をかけました。

「ジョウ、おとうさんのことで泣いてるの？」

「今はそうじゃないの、あたしの髪のこと。」

ジョウは、そういつて、なおもはげしく泣きました。メグは、なやめるいもうとにキツスし、その頭をなでました。

「後悔はしていないの。だけど、美しいものをなくしたので、ちよつとばかり泣いただけでも、もうすっかりおちついたから、だれにもいわないで。おねえさんは、どうしてねられないの？」

「とても心配なので。」

「たのしいことを考えてごらんさい。ねむれてよ。」

話しているうちに、ジョウが大きく笑つたので、メグはおしゃべりをやめようといつて、

ジヨウの髪にカールをかけることを約束し、やがて二人はねむってしまいました。

時計が、十二時をうち、ひっそりと部屋がしずまったとき、一人の人かげが、娘たちのベッドからベッドを歩き、ふとんにさわったり、枕をなおしたり、ね顔をながめたり、唇にそつとキツスしたり熱いのりをささげたりしました。

その人かげが、カーテンをひいて、わびしい夜空を見あげたとき、ふいに黒雲のかげから月があらわれて、あかるい慈悲ぶかい顔のように、その人かげに照りましたが、その顔は、言葉なき言葉で、こうささやいているように思われました。

「心やすくあれ、いとしき魂よ、雲のかげには、いつも光あり。」

第十六 手紙の花束

寒い、うすぐらい夜明けに、姉妹たちはランプをつけて、今までにない熱心さで聖書を読みました。その小さな書物には、救いとなぐさめがあふれていました。

階下へおりていくと、もう仕度はできて、ハンナがいそがしく台所ではたらいっていました。おかあさんは、夜ねむらなかつたので、ひどくやつれて見えました。心配の多いおか

あさんを悲しませないように、旅に送り出すつもりでしたが、おかあさんの顔を見ると、つい涙ぐまずにはいられなくなりました。おかあさんは、食卓についてもあまり食べませんでした。

馬車の来るまで、みんなはあまり話さずに、おかあさんの身のまわりの用事をしました。おかあさんがいいました。

「おかあさんは、あなたがたを、ハンナとローレンスさんをお願いしていきます。ハンナは心からの律義者ですし、おとなりのあの親切なかたは、あなたがたを、じぶんの娘のようを守って下さいます。ですから、すこしもあたしは心配しませんが、ただ、この不幸をよく理解して、留守中、悲しんだり、いらいらしたり、なまけたりせずに、めいめいの仕事をやって下さい、希望をもつてはたらきどんなことが起つても、けつしておとうさんを失わないということを覚えていらつしやい。」

「はい、おかあさん。」

おかあさんは、なおもこまかく、一人一人の娘に注意をあたえました。

馬車の音がしたとき、みんなはよくこらえて、悲しみの声をたてる者はありませんでした。ただ、しずかにおかあさんにキッスして、馬車が動き出したら、元気で手をふろうと

思いました。

ローリーとおじいさんが見送りに来てくれました。同行するブルック先生は、いかにも頼もしく見えましたので、巡礼ごつこのなかの案内者グレート・ハート氏という、あだ名を、さっそくつけました。馬車が走り出したとき、いい前ぶれのように、ちょうど日光が見送りのみんなを照らしました。そして、おかあさんが角をまがるとき、最後に目にはいつたのは、四つのがやかしい顔と、そのうしろに護衛のように立っているローレンス老人と、ハンナと、誠実なローリーのすがたでした。

「みなさん、なんて親切にして下さるのでしょうか。」と、おかあさんは、ブルック青年の顔にあらわれた尊敬と同情を見ました。

「だれだって、あなたがたに親切にせずにはいられないのです。」と、ブルック先生は、気持よく笑ったので、おかあさんもほほえまずにはいられませんでした。こうして長途の旅は、日光と微笑と、たのしい言葉の、よい前兆ではじめられました。

「あかし、なんだか地震でもあった後のような気がするわ。」と、おとなりの二人が帰っていつてしまうと、ジョウがいました。

「家が半分なくなってしまったようね。」と、メグがさびしそうにいいそえました。

そして、娘たちは、勇ましい決心をしていたにかかわらず、その場に泣きくずれてしまいました。ハンナは、気をきかして、そつとしておき、どうやら夕立が晴れもようになつたとき、コーヒーわかしを持って来ました。

「さ、おかあさんのおつしやつたとおりにやるんです。コーヒーで元気をつけて。」

この朝、とくにハンナが腕をふるつたおいしいコーヒーに、みんなはすっかり元気づけられ、「せつせとはたらけ、希望をもつて」の、標語どおりに、ジョウは、マーチおばさんのところへ、メグはキング家へはたらきにいきました。そして、エミイとベスは、ハンナを助けて家のなかの仕事を、つぎからつぎへ片づけていきました。こうして、まい日、わりに元気にあかるく、なにごともなく過ぎていきました。

それに、おとうさんのことが、娘たちをたいそうなぐさめました。重態ではありませんが、もつともすぐれた看護婦がつきそうようになってから、その効果はすでにあらわれれました。ブルック先生がまい日、容態を知らせてくれるので、その速達を一家の長としてのメグが、読みあげることになりましたが、一週、二週とすぎるにつれて、いよいよ娘たちを元気づけてくれました。

みんなずいぶんふくらんだ手紙を書いて、ワシントンへ出しました。その手紙のなかか

ら、こつそり披露してみましよう。

なつかしい、おかあさん。

先日のお手紙がどんなにあたしたちを幸福にしたか申しあげかねるほどでございます。

あまりうれしいお便りなので、読みながら泣いたり笑ったりいたしました。ブルツクさまは、なんて御親切なのでございましょう。ローレンスさまの御都合で、そんなに長くいて下さつて、おとうさんやおかあさんを、いろいろお世話下さるのは、まことにしあわせでございますね。ジヨウは、あたしのぬいもののお手伝いをしてくれます。あの子の「道徳上の発作」が永つづきしないことを知っていなければ、過労にはならぬと心配になるくらいです。ベスは時計のように正しく、じぶんの仕事をしています。エミイは、わたしのいうことをよくきいてくれます。ボタンの穴かがり靴下のつくろい、わたしに教わつてよくやります。

ローレンスさまは、年とつたかあさんのにわとりみたいに、ジヨウがそう申します。わたしたちの世話をして下さいます。ローリイもたいそう親切にしてくれます。おかあさんが遠くへいらしたのでわたしたちはときどきさびしくて孤児みたいな気もしますが、ローリイとジヨウが元気づけてくれます。ハンナは、聖人みたいです。日夜おかあさんのお帰

りを待つています。おとうさんにくれぐれもよろしくお伝え下さいませ、おかあさんのメグより。

においいりの、びんせんに、きれいに書いたこの手紙とちがって、つぎの手紙は、大きなびんせんに書きなぐつてあります。

わたしのたつといおかあさん。

なつかしき父上のために、ばんざい三唱、おとうさんのよくなられたことを、電報で知らせて下さるブルック先生まことに頼もしきかぎり、電報を見て屋根部屋へかけあがり、わたしたちによくして下さる神さまにお礼を申さんとせしも、ただ大声で、うれしいとくり返し泣きましたのみ。でも、長いのりとおなじかと存じます。

わたしどもは、おもしろく暮しています。みんなひどく親切で、山鳩の巢にいるごとし。メグねえさんは、おかあさんらしくふるまい、日に日に美しくなり、いもうとたちは、かわいいた使のようです。わたしは、あいかわらずのジョウ。そうそうローリイと、けんかしました。わたしのほうが正しいがいいわけたのがわるく、わたしがあやまるまで来ないといつて帰り、国交断絶、わたしはローリイのあやまりに来るのを待ちましたが来ません。その晩、エミイが川に落ちたときの、おかあさんの教訓を思い出し、聖書を読んだら

おちついて、怒ったままねてはならぬと、あやまりに来るローリイとあい、すっかり心は晴れ、元どおり仲よしとなりました。昨日のハンナの洗濯のお手伝いをして詩をつくりました。お笑草に。おとうさんに、わたしにかわって、愛情こめてキッスをしてあげて下さい。でたらめのジヨウより、

しゃぼん水のうた

わたしのたらいの女王さま、わたしはたのしくうたいます。

白いあわが、ぶくぶく高くとつあいだに

せつせとあらって、しぼって、ほします。

きれいなお空の下で、吹きまわる風に

せんたくものは、ひらひらふかれます。

あたしたちの心とたましいについた

一週間のけがれをあらいたい。

水と空気のふしぎなちからで

きれいにきれいにきよめたい。

そうすれやこの世に、とてもすてきな
せんたく日がおこなわれるでしょう。

よき人の世の小道には

いつもパンジイが咲くでしょう

いそがしい心は かなしみも うれいも なやみも

考えるひまは、ありはしない

ほうきをせつせとつかうときには

なやむ思いもはいてしまう。

日ごと日ごとにつとめる仕事が

わたしにあたえられたのはうれしい。

仕事がつよいからだ と ちからとのぞみを もってきてくれる

頭でいろいろよく考え 心でいろいろよく感じ、

けれど 手はいつもはたらかすよう。

なつかしい、おかあさん——わたしの愛情とおとうさんがお帰りになったとき、お目にかけてようと大切にしていた三色すみれのおし花とをお送りするだけでございます。わたしはまい朝あの本を読んでいい子になろうとつとめ、ねるときはおとうさんの好きな歌をうたいます。わたしは、「まことの国」がうたえません。うたえば泣けて来るからです。みなさんが大切にしてくださいますので、おかあさんがるすでも、幸福に暮しています。エミイがこの紙ののこりに書くそうですから、これでやめます。まい日、時計をまくことと、部屋にいい空気をいれることは忘れたことありません。なつかしいおとうさんによるしくお伝え下さい。小さなベスより

あたしのおかあさん——みんな元気です。わたしはまい日勉強しています。おねえさんのいうことをききます。メグねえさんは、たいへんやさしくして下さいます。夕飯のときゼリイを食べさせて下さいます。ジョウねえさんは、あたしがゼリイを食べるからおとなしいのだといひます。もうじき十三になるのに、ローリイはあたしを子供あつかいにし、ひよこさんといったり、あたしがフランス語で、メルシイ（ありがとう）とか、ボンジュール（こんにちは）とかいうと、ペらペらとフランス語をしゃべってこまらせます。

空色のドレスのそでがきれいで、メグねえさんが新らしいのとつけかえて下さいましたが、色が青すぎて前のほうがだめになりました。いやでした、ぐずらないで、つらいのを、がまんしています。ハンナがエプロンにもつとのりをつけて、まい日おそばを食べさせてくれると思います。メグねえさんは、あたしの文章、てんのうちかたと、字の使いかたがだめだといいます。することがたくさんあるのでしかたありません。さよなら、おとうさんにくれぐれもよろしくおっしゃって下さい。エミイより

おしたわしきマーチおくさまへ——一筆申しあげます。みなさんおたっしゃで、おりこ
うで、よくおはたらきになります。メグさまは、よいおくさまぶり、なんでも早くこつ
をのみこみなされます。ジヨウさま まつさきにたつておはたらきになります、考えて
からなさない、なにをしかしなざるかわりません。月曜日せんたくをなさいまし
たが、しばらくのりをつけたり、もも色キャラコを青くしたり、おかしくてころげるほ
ど笑いました。ベスさまは一ばんよくできたかたで、手まわしがよく、わたしは大助かり
です。なんでもおぼえようとなされ、市場の買出しにもいかれます。みんなでずいぶん
険約しおくさまのおおせどおり、コーヒーも一週間に一回、食物は栄養のあるものにして、
ぜいたくいたしません。エミイさまは、よい服を着たがったり、お菓子をはしがたりし

て、だだをこねなさるときもあります。ローリーさまは、あいかわらざるあばれんぼうですが、みなさんを元気づけて下さいますので、けっこうです。パンがふくらみかけたので、これでやめます。だんなさまによろしくお伝え下さいませ。肺炎が早くなくなりますようお祈りいたしております。ハンナ・マレットより。

第二号付看護婦長殿

ラパハノック川岸はきわめて静かにて全軍士気さかん。兵站部の処置よろし。テデイ大佐指揮の国防軍その警備にあたる。司令長官ローレンス將軍は、まい日軍隊の検閲をなされ、給養係マレットは宿舎をととのえ、ライオン少佐（犬の名）は夜中歩哨の任につく。ワシントンよりの吉報に、二十四発の祝砲をはなち、司令部に大観兵式をおこのう。司令長官の熱誠あふるる祝福をお伝えし、全快を祈るものなり。テデイ大佐

親愛なる夫人よ——御令嬢方みな無事。ベスと小生の孫は、まい日お便りいたしています。ハンナは模範的な召使、美しいベスさんを、まるで竜のように守っています。上天気つづきにより、どうぞブルックを御遠慮なくお使い下されたく、なお、費用お見込をこえる場合、当方よりお引出し願いたく、御主人に御不自由なきよう、御快方におもむかれ

しことを神に感謝いたしております。あなたの忠実な友であり召使の ジェームス・ローレンス。

第十七 小さな真心

はじめの一週間というものは、マーチ家の美德は、となり近所へ配給してもあまりあるくらいでした。たしかにおどろくべきもので、たれもかれも申しぶんのない、よいきげんでしたし、わがままをおさえました。けれど、おとうさんについて、はじめのような心配がなくなると、しだいに気がゆるみ、標語の、せつせとはたらくということも怠りがちとなり、非常な努力のあとだもの、休んでもよかろうという気持で、たびたび休みました。

ジョウは、髪をきった頭をつつまなかったので、かぜをひき、マーチおばさんは、なおるまで来るなどいいましたので、それをいいことにして休みました。エミイは、家の仕事をやめて粘土細工をやりだしました。メグはキング家から帰ってする針仕事に、あまり身をいれなくなり、ワシントンへ手紙を書いたり、ワシントンから来た手紙をくりかえして読んだりしました。ベスだけは、たいして怠けず、まい日こまごました小さな仕事を忠実

にやりました。おかあさんのことがこいしく、おとうさんのことが心配になるようなときは、戸だなへはいつてすすり泣き、こつそり祈りました。

おかあさんが出発してから十日後、バスがいました。

「メグねえさん、ハンメル家へいつて見て来ていただきたいわ。おかあさんはあの人たちのこと忘れないようにと、おつしやつたでしょう。」

すると、メグはあまり疲れたからいけないといえます。そこで、バスはジョウねえさんに頼むと、かぜをひいているからといつてことわりました。

「あなた、どうしてじぶんでいかないの？」と、メグが尋ねました。

「あたし、まい日いつてるのよ。だけど、あかちゃん病氣していて、どうしていいかわからないの。おばさんは、はたらきにいつてしまおうし、ロツチエンが看病してるけど、だんだんわるくなっていくようよ。おねえさんかハンナがいかなければだめだと思おうわ。」

バスが熱心にいうので、メグは明日いくと約束しました。

「ハンナに頼んで、なにかおいしいものつくって、もらって持つていつておやりなさいよ。バス、外の空気はあなたの身体にいいわ。」と、ジョウはいつて、また、いいわけらしく言葉をそえました。「あたしもいつてあげたいけど、この小説書きあげてしまいたいよ

。――
けれど、ベスは、

「あたし頭痛がしてくたびれているの。たれかいつて下さるといいのに。」と、いかにも疲れているようなようすでした。

「エミイが、もうじき帰ってくるわ。あの子に一走りいつてもらうといい。」と、メグがいました。

「では、あたしすこし休んで、エミイの帰るの待っていますわ。」

そういつてベスは、ソファに横になりました。メグとジョウは、それぞれの仕事にかかり、一時間あまりたつてもエミイは帰りませんでした。ハンナは台所でいねむりをしていました。ベスは、しかたなしに、そつと頭巾をかぶり、かわいそうな子供たちにやるものをバスケットにいれ、悲しげな顔をしてつめたい風のなかを出かけていきました。

ベスが帰ったのは、だいぶおそく、帰るところそり二階へあがり、おかあさんの部屋にこもりました。ジョウが、用事でその部屋へいったとき、ベスが目をあかくして、カンフルの瓶を片手に持ち、薬箱に腰かけているのを見ておどろきました。

「どうしたの？」と、ジョウが尋ねると、ベスは近よってはいけないという手つきをしま

した。

「ハンメルさんのあかちゃん、おぼさんの帰って来ないうちに、あたしに抱かれて死んでしまったの。」

「まあ、かわいそうに、どんなにこわかったでしょうね。あたしがいけばよかった。」

ジヨウは、後悔の色を顔にうかべ、おかあさんの大きなイスにかけてバスを抱きました。「こわくはなかつたけど、悲しかったわ。ロツチエンが医者をよびにいったというので、あたしがあかちゃんを抱いて、ロツチエンを休ませてあげてたの。そうしたら、あかちゃんが、きゆうに泣き声をたててぶるぶるふるえて動かなくなったの。足をあたためたり、ミルクを飲ませたりしたんですがもうだめ、ちつとも動かないの。」

「泣かないでね、それから、どうしたの？」

「お医者さまが来るまで、あたし抱いていたの。お医者さまに死んでしまったとおっしゃって、ヘンリツヒとミンナののどを見て、「しようこう熱」ですね、おくさん、もつと早くわたしをよびに来なければだめですと、むずかしい顔をしておっしゃったわ。すると、ハンメルのおぼさんが、貧乏だからじぶんの手でなおそうとしたんです。どうかほかの子を助けて下さいといったの。そして、わたしにね。早く家へ帰ってベラドンナを飲みなさ

い。そうでないと、あなたもかかるよとおっしゃったの。」

「ああ、バス、あなたがかかったら、あたしはどうしたって、じぶんを許せないわ！」

「だいじょうぶ、ベラドンナを飲んだら、いくらかよくなったようだよ。」

「ああ、おかあさんが家にいて下すったら！ あなたは一週間以上も、ハンメル家へいったんだものきつとうつつたわ。ハンナをよんで来るわ。ハンナは病気のことなんでも知っているから。」

「エミイを来させないでね、エミイはまだかからないから、うつると大へんだわ。あなたとメグねえさんは、もううつらないでしょうか？」

「だいじょうぶと思うわ。うつったってかまわないわ。あなたばかりいかせて、くだらないもの書いていて、じぶん勝手のむくいだよ。」

ジョウは、そうつぶやいて、ハンナのところへ相談にいきました。ハンナはよく知っていて、手あてさえよければ死ぬものではないといったので、ジョウはほっとし、今度は、二人でメグをよびにいきました。

ハンナは、バスの容態を見たり、いろいろ尋ねてからいきました。

「では、バンクス先生に診察していただいて手当をするんです。エミイさんはうつるとい

けないからしばらくマーチおばさんのところであずかっていたかもしれません。それから、どなたか一人のこってバスさんのお相手になってあげて下さいませ。」

のこるのは、ジョウにきまりましたが、エミイは、どうしてもいかないといい、いくくらいなら、しようこう熱にかかったほうがいいと、だだをこねはじめました。なだめても、すかしても聞きません。おりよく来たローリイに頼むと、ローリイはいろいろとエミイの心をひくようなことを、まくしたてました。

「ぼくがまい日顔を出して、バスの容態を知らせたり、遊びにつれ出したりしてあげる。あのばあさんは、ぼくが好きなんだ。だから、できるだけうまくやるよ。芝居にもつれていつてあげる。」

とうとうエミイは承知しました。

メグとジョウは、二階からおりて来て、エミイが承知したことを知って安心しました。バンクス先生をよびにいくのも、ローリイがしてくれました、親切なローリイは、生垣をよび越していきました。

バンクス先生がいらして、バスにはしようこう熱のきざしがあると診断しました。そして、ハンメル家の話を聞いてむずかしい顔をしましたが、たいていかるくすむだろうとい

うことでした。エミイは、すぐに家からはなれるように命ぜられ、予防の手あてをしてもらってから、ローリイとジョウにまもられて、マーチおばさんの家へいきました。

マーチおばさんは、話を聞いて、

「だから、いわないことじゃない。よけいなおせっかいをして、貧乏人の家へいつたりするからだよ。エミイは、ここにいて、御用をしたらいいだろう。」と、いいました。

エミイは、おばさんから、目がね越しに、じろじろ見られるので、いやになってしまいました。それでも、ローリイとジョウが帰ってしまうと、気をとりなおして、

「あたし、とてもがまんできそうにないけど、やってみましょう。」と、考えました。

そのとき、おばさんのとこの、おうむのポーリーが、

「でていけ、ばけもの！」と、さげんだので、エミイはしくしく泣いてしまいました。

第十八 つづく暗い日

ベスは、まぎれもなく、しょうこう熱でした。ハンナと医者しか、その重態であることを知りませんでした。ローレンス氏は、老体なので、病人を見舞うことは許されませんでした。

したから、すべてハンナが一人でやりました。

メグは、おかあさんへ手紙を書くとき、ベスのことに一言もふれないので、小さい罪をおかしているような気がしましたが、これはハンナがよけいな心配をかけてはいけないと、とめたためでした。ジョウはベスにつききりでしたが、熱の高いベスは、ピアノをたたくかつこうをしたり、はれあがったのどでうたおうとしたり、まわりの人の顔がわからなくなったりするので、すっかりジョウはおびえてしまい、ハンナに、おかあさんへ知らせようといいい、ハンナもそうしましょうかといっているところへ、ワシントンからの通信が来て、おとうさんの病気がぶりかえして、当分帰る見こみはないということでした。

来る日も来る日も、家のなかには悲しくわびしく、父母の帰りと、ベスの回復とをねがいながら、はたらいている姉妹の心は、なんとおもくるしかったでしょう！

けれど、みんなそれぞれ心に教訓を受けました。メグは、今までの生活が、金であがなうことのできる、いかなるぜいたくよりも、はるかにたつといものであることを知りました。ジョウは、ベスが病気になつて、はじめてベスの美德を知りました。ほかの者のために生き、手近の仕事をして家庭をたのしくしようとする、そのあたたかい心持は、才能や財産や美しさよりもたつといことを知りました。エミイは、早く帰ってベスのためにはた

らきたいと思いました。労苦をいとわぬベスが、じぶんのなおざりにしておいた仕事を、いかにたくさん片づけてくれたかを考えて後悔しました。

ローリイは、おちつきを失って、家のなかをうろつき、ローレンスは、ベスがじぶんをなぐさめてくれたピアノを思い出すのにたえられなくて、グラランド・ピアノにかぎをかけてしまいました。牛乳屋もパン屋も肉屋も、みんながベスのことを尋ねました。

ベスのすがたが見えないさびしいのでした。

ベスは、ぼろ人形をそばにおきました。子ねにもあいたがりましたが、病気がうつるのを心配してがまんしました。すこし気分がいいと、手紙を書きたがりました。けれど、そのうちに、病状はわるくなり、意識が不明となり、うわ言をいうようになりました。バンクス先生は、一日に二回も来ました。メグは、机のひき出しに電報用紙を用意しました。十二月一日は、冬らしい日で、風が吹き雪がふりました。その朝、バンクス先生は診察をすますといいました。

「おくさんが御主人のそばをはなれられるようなら、およびしたほうがよろしいです。」ハンナは、うなずきました。メグは、イスにぐったりたおれました。まっさおになったジヨウは、電報用紙をひつつかんで、吹雪のなかへとび出していきました。まもなく帰つ

て来たとき、ローリイが来て、おとうさんがまた快方にむかったという手紙を持って来ました。けれど、ジョウの顔が悲痛にあふれているので、

「どうしたの？　ベスわるいの？」

「ええ、おかあさんに電報うって来たの。もうあたしたちの顔がわからないのよ。おとうさんもおかあさんもいらっしやらないし、神さまも遠くへいっておしまいになった！」

ジョウの顔に、涙がたきのように流れました。よろけそうなので、ローリイはその手をつかみ、なにかなくさめの言葉をかけようとしたが、言葉もないので、ジョウの顔をやさしくなでてやりました。ジョウは無言の同情を心に感じ、やっとおちついて、感謝にみちた顔をあげました。

「ありがとう。もうだいじょうぶ、万一のことがあっても、こらえられるわ。」

「ぼくはベス死ぬと思わない。あんなにいい子だし、ぼくたちこんなにかわいだっているんだもの、神さまがつれていらっしやるわけではない。」

「やさしい、かわいい子は、いつでも死んでしまうんだわ。」

「きみ、つかれてるんだ、心ぼそく思うの、きみらしくないよ。ちよっと待ってて。」

ローリイは、階段をかけあがり、まもなくいっばいのぶどう酒を持って来た。ジョウは

につこり笑って、ベスの健康のために飲むわといって飲みました。

「あなたいい医者ね。そして、ほんとに気持のいいお友だちね、どうして、お返しできるかしら？」

「いずれ勘定書を出すよ。そして、今夜はぶどう酒より、もったきみの心をあたためるものをあげるよ。」

「なんなの？」

「昨日、電報うったのさ。そうしたらブルック先生から、すぐ帰るといふ返電さ。だから、おかあさんは、今晚お帰りになる。そうすれや、万事好都合だろう。ぼくのやったことにいらない？」

ジヨウは、狂喜してさげびました。

「おおローリー！　おかあさん！　うれしい！」

ジヨウは、ローリーにしがみつき、めんくらわせてしまいました。けれど、ローリーは、おちついて、ジヨウのせなかをさすり、気がおちつくのを見て、二三度はずかしそうにキッスをしました。それで、ジヨウはきゆうにわれにかえり、やさしくかれをおしのけ、息をはずませながらいいました。

「だめよ、あたしそんなつもりじゃなかったのよ。いけなかったわ。でもハンナがあんなに反対したのに、電報うって下すつたと思うと、うれしくて、とびつかずにいられなかったの。きつとぶどう酒のせいだわ。」

ローリイは、笑いながらネクタイをなおしました。

「かまわないさ。ぼくもおじいさんも、とても心配でね。もしもバスに万一のことでもあれば、申しわけない、だけどハンナは、ぼくが電報をうつというど、どなりつけたんだ。それでぼくかえって決心して、うってしまつたんだ。終列車は、午前二時につくからぼく迎えに行く。」

「ローリイ、あなた天使だわ。どんなにおれいいっていいかわからないわ。」

「じゃ、もう一度とびつきたまえ。」と、ローリイがいたずらそうな顔をしていました。「いいえ、もうたくさん、おじいさんがいらしたら、とびついてあげるわ。さ、あなたは迎えにいつて下さるのだから、早く帰つてお休み下さい。」

ジヨウは、そのまま台所へかけこみ、そこにいたねこにまで、うれしいお知らせをいつて聞かせました。ハンナは、

「おせっかいな小僧さんだが、かんべんしてあげましょ。おくさまが早くお帰りになるか

ら。」と、いいました。

新しい空気がさつと流れこんで来たようなよろこびでした。あらゆるものが希望にみちて来ました。姉妹たちは、顔を合せるごとに、おかあさんが帰っていらっしやるのよと、はげまし合うようにささやきました。バスだけは、見るも痛ましく、おもくるしい昏睡状態におちていましたが、それでも姉妹たちは神さまとおかあさんを信頼していますので、今までほど心は苦しくありませんでした。

吹雪の一日が暮れて、とうとう夜が来ました。バンクス先生が来て、よくなるか、わるくなるか、いずれにしても、ま夜中ごろ変化が起るだろうから、そのころまた来るといつて帰っていききました。

ハンナはつかれきつて、ソファに横になつてねてしまいました。ローレンス氏は客間をあちこち歩きまわっていました。ローリーはストーブの前に横わつて、じつと火を見つめていました。姉妹たちは、すこしもねむくなくて、一生忘れることのなさそうな、ひきしまつた気持でベスのそばにいました。

「もし神さまがバスをお助け下さつたら、あたしもう二度と不平をいわないわ。」
メグが熱心にささやくと、ジヨウも

「あたしは、一生、神さまにお仕えする。」と、答えました。

やがて、十二時が鳴りました。二人はベスのやつれた顔に、なにか変化が起ったような気がしたので、われ知らず病人の顔を見まもりました。家のなかは死のように静まり、むせび泣くような風の音だけが聞えました。一時間がすぎましたが、ローリーが停車場へ迎えに出かけたほか、なにごともしませんでした。さらに一時間すぎました。吹雪のために汽車がおくれたのでしょうか、それとも、おとうさんに大きな悲しみでも起ったのではないかしら。あわれな姉妹たちは、また心をなやましはじめました。

二時まで、ジョウは窓のそばへいつて、外を見ていましたが、ふとふりかえると、メグがひざまずいています。あ、ベスが死んだがメグはこわくてあたしにいえないので考えると、さつとつめたい恐怖が全身に通りすぎました。ジョウは、すぐにベスのそばにいきました。苦しそうなうすは消えていかにも安らかな顔です。ジョウは泣く気にも、悲しむ気にもなれず、かわいいベスの上に身をかがめて、そのしめった額に唇をあてました。

「さようなら、ベス、さようなら！」

その気配でハンナが目をさまし、いそいでベッドのそばへ来て、手にさわったり、唇に耳をあてて息をしらべたりしていました。

「ありがたい、熱がさがりました。すやすやねていなさる。肌もしめっているし、息もらくになりました。」と、いいました。

姉妹がこのうれしい変化を信じかねているうちに、バンクス先生が来て保証してくれました。危険は通りすぎた。よくねむらしてあげなさいという、言葉を聞いたとき、お医者さんの顔は神さまの顔のように思われました。

お医者が帰ってから、メグとジョウとハンナは、大きな安心のなかで、抱いたり、手を握り合ったり、よろこびのなかで、ゆめのような時間をすごしました。

冬の夜は、ようやく明けはじめました。メグは、咲きかけた白ばらの花を持って来て、「あの子が目をさましたら、このかわいいばらと、おかあさんの顔が、一ばんはじめに見えるようにしてあげよう。」と、いいました。

メグとジョウは、長い、悲しい一夜を明かし、おもいまぶたに、あかつきの空をながめたとき、こんな美しい朝を見たことがないと思いました。メグが、

「まるで、おとぎの国みたいねえ。」と、いつてほほえむと、ジョウがとびあがって、「あら、お聞きなさい！」と、いいました。

そうです。ベルが鳴り、ハンナとローリーのうれしそうな声、

「おかあさんのお帰りですよ！」

第十九 エミイの遺言状

家でこういうことが起っているあいだ、エミイは、マーチおばさんの家で、まことにつらい日を送っていました。エミイは、まるで島流しにあつたようなわが身をふかく悲しみがわが家でどんなにかわいがられていたかということ、生れてはじめて感じました。

マーチおばさんは、親切でしたが、けつして人をあまやかすようなことをしませんでした。エミイはしつげがいいので、たいそう気に入りました。それで、エミイをかわいがり、幸福にしてやりたいと思いましたが、ざんねんながら、その方法がまちがっていました。

マーチおばさんは、すべて命令ずくめで、きちようめんで、くどい長いお説教で、エミイを教育しようと思いましたが、これがまたエミイをすっかり不幸にし、まるでじぶんはくものあみにかかったはえのようだと思いました。

エミイは、まい朝、茶わんをあらひ、スプーンや湯わかしを、ぴかぴかに光るまでみがかなくてはなりませんでした。それから、おそうじ、おばさんはちり一つ見のがさないの

で、なんとまあおそうじはつらかつたでしょう。それから、おおむのポーリーに餌をやり、ちんの毛をくしけずり、足のわるいおぼさんの用事を、なん度も召使のところへいいにいたり、階段をのぼったりくだったり、それがやつとすむと、勉強をさせられます。その後の一時間！ そのとき運動か遊びを許されるので、どんなにたのしかったでしょう！

ローリイは、まい日訪ねて来て、エミイの外出を許してもらうように口説きたて、やつと許されると、二人は散歩したり馬車にのったりして、たのしい時をすごしました。お昼の御飯を食べてから、おぼさんに本を読んで聞かせます。おぼさんがねむってしまった、じつとしてすわっていないければなりません。おぼさんは、はじめの一ページでいねむりをやりだし、たいてい一時間はねむりました。それから、夕方まで、つぎはぎ仕事などをしなければなりません。夕飯までしばらくのあいだ遊びますが、夕飯をすましてからは、マーチおぼさんのわかいときの話やお説教を聞かされたいくつしてしまいます。そして、やつと話がおわると、エミイはねるのですが、つらい身の上を思いきり泣こうと思つても、一二滴の涙しかこぼさないうちに、いつもねむってしまいます。

もしローリイと、エスターばあやがいなかったら、こんなおそろしいまい日を、がまんできないとエミイは思いました。おおむのポーリーだけでも、エミイを発狂させるほどで

した。ポーリーはエミイの髪をひっぱったり、そうじしたばかりのかごに、ミルクをひっくりかえしてこまらしたりしました。また、ふとつたむく犬も、エミイの手にかかることばかりやりました。

エスターばあやだけは、エミイをほんとかわいがってくれました。ばあやはフランス人で、マーチおばさんと長年暮らし、おばさんもこのエスターをいなければならぬ人と思っていました。ばあやは、エミイにフランスにいたころのめずらしいお話を聞かせてたのしませました。また、広い家のなかを勝手に歩きまわらせて、大きな戸だなや、古風なたすにしまいこんだものを、自由に見させてくれました。なかでも宝石箱には、真珠の首かざりやダイヤの指輪、そのほか、ピンやロケットなどいくつも、目もまばゆいばかりのものがありません。

「もしおばさんが遺言なさる場合、あなたはどれがほしいと思いますか？」と、そばについて、かぎをおろすエスターが尋ねました。

「あたし、ダイヤモンドが一ばん好き。だけど、ダイヤモンドの首かざりはないから、この首かざり」と、エミイは答えて、金と黒たんのじゅ玉でできて、さきに十字架のついた首かざりに見とれました。

「あたしも、これが一ばん好きですが、首かざりにはもつたない。あたしのような旧教の信者はおじゆずに使います。」

「あなた、お祈りするのたのしそうね。」

「ええ、あなたもお祈りなさるといいですよ。化粧室を礼拝堂につくつてあげましょう。おばさんがいねむりをなさっているあいだに、じつとすわつて、神さまにおねえさんをおまもり下さるように、お祈りあそばせ。」

エミイは、その思いつきが氣にいら、礼拝堂をつくるように頼みました。

「マーチおばさんがおなくなりになったら、この宝石はどうなるのかしら？」

「あなたと、おねえさんたちのところへいくのですよ。遺言状を見ました。あたしは。」

「まあ、うれしい。今、下さればいいのに。」

「今は早すぎます。はじめに結婚なさるかたに真珠、それから、あなたがお帰りになるときには、トルコ玉の指輪、おくさまはあなたが、お行儀がいいといって、ほめていらっしやいました。」

「ほんと？ あの美しい指輪がいただけるの。まあ、うれしい。やっぱりおばさん好き。」
と、エミイは、うれしそうな顔をして、それをきつと手にいれようと心をきめました。

その日から、エミイは、おとなしく、なんでもいうことを聞いたので、マーチおばさんはじぶんのしつけが成功したと思つて、たいそう満足しました。エスターは、礼拝堂をつくってくれ、聖母の絵をかいてくれました。エミイは、心をこめてここに祈り、バスの病気をなおし、じぶんを正しく導いて下さるよう願いました。

エミイは、善良になるために、マーチおばさんのところに遺言状をつくらうと思ひました。遊び時間に、エスターから法律上の言葉を教えてもらつて、じぶんの所持品を公平にわけるところを書きました。

エスターは証人となつて署名してくれました。エミイは、ローリイに、第二の証人になつてもらつてもりでした。ところで、この部屋には、流行おくれの服がいっぱいあった。ダンスがあつて、エスターはエミイに、それで自由に遊ばせました。その服を着て、長い姿見の前をいったり来たりして、わざとらしくおじぎをしたり、衣ずれの音をさせたりするのが、おもしろくてたのしみでした。

この日は、そんなことを、あまり夢中でやっていたので、ローリイの鳴らしたベルにも気がつかなくなつたし、そつと来てのぞいたのも知りませんでした。エミイは、青色のドレスと黄色の下着をつけもも色のふちなし帽子をかぶり、扇子を使つてすましてねり歩いた

のでした。ローリイが、後でジョウに話したところによると、エミイがそうやって気づいて歩いていくあとから、おおむのポーリーがそのまねをして歩き、ときどき立ちどまって、「きれでしょ、あつちいけ、おぼけさん、おだまり、キッスして！ ハッ！ ハッ！」と、どなりましたが、それはとてもおかしな光景だったということでした。

ローリイは、おかしさのあまり、ふき出しそうになるのを、やっとこらえました。そして、ていねいに迎えられる、これを読んでよと、あの遺言状を見せられました。

遺言状

わたし、エミイ・カーチス・マーチは、正気にて所有物全部を左記の如く分配します。

父上には一ばんいい絵、スケッチ、地図、額ぶちづき美術品。

母上には、衣類全部、ただしポケットのある青いエプロンはべつ。それから、わたしの肖像画とメダルを真心こめて。

メグねえさんには、トルコ玉の指輪（もしいただいたら）鳩のついている緑の箱と、首かざりのためのレース、姉上をかけたスケッチ。これは姉上の愛する妹のかたみ。

ジョウねえさんには、一度なおした胸ピンと、青銅のインクつぼ（ふたはおねえさんが

なくした)それから、原稿を焼いたおわびに一ばん大切な石膏のうさぎ。

ベス(もしわたしの後まで生きていれば)には、人形、小さなダンス、扇子、麻のカラ
ー、それから病気がよくなり、やせてなければ、新しいスリッパ、それから、わたしが
いつも古ぼけたジョアンナのことをからかったことを、ここで後悔しておきます。

お友だちであり隣人であるローリーには、紙のかばんと、首がないようだとおっしゃっ
たが、粘土細工の馬。つぎに心配のときに親切にして下さったお礼に、わたしの絵のなか
で気に入ったものさしあげます。ノートルダムが一ばんよくできています。

大恩人ローレンス氏には、ふたに鏡のついた紫の箱、ペン入れによろし。わたしたち一
家、ことにベスへの御厚意をありがたく思っていることを思い起させるでしょう。

なかよしのキティ・ブライアントには、青色のエプロンと、金色のじゅず玉の指輪を、
キツスとともにあげる。

ハンナには、ほしがっている紙箱と、つぎはぎの細工を全部、わたしを思い出してもら
うためです。

わたしの大切な所有品を全部処分せり、みなみな満足して死者を非難せざるよう望む。
わたしはすべての人を許し、最後のラッパの鳴りひびくとき、みな再会することを信ず。

アーメン、この遺言状は、千八百六十一年十一月二十日、わが手によって認め封印す。

エミイ・カーティス・マーチ

証人 エステル・ベルノア

セオドル・ローレンス

最後の名は鉛筆で書いてありました。エミイはかれにそれをペンで書きなおして、正式に封印してほしいとしました。

「どうしてこんなことを思いついたの？ ベスが形見わけでもするということのようなことを、たれから聞いたの？」

エミイは、そのわけを話してから、

「ベスはどうですって？」と、訪ねました。

「いいかけたからいうけど、ベスこのあいだ大へんわるくなって、ジョウにいったの。ピアノはメグに、あなたに小鳥を、かわいそうな古い人形はジョウに。ジョウに人形をかたみとしてかわいがってほしいって。ベスは、あまり人にあげるものないといって悲しがって、ぼくたちには髪を、おじいさんには愛だけをのこすんだって、でもベスは遺言状のこ

とはなんにも考えていなかった。」

ローリイは、そういいながらサインしていると、大きな涙のつぶがおちて来ました。はつとして顔をあげると、エミイの顔には苦痛の色があふれ

「遺言状には、二伸みたいなものをつけていいでしょうか？」

「いいでしょう。追伸というんでしょう。」

「じゃ、書きいれてちょうだい。あたしの髪みんな切ってお友だちに分けるって。へんなかつこうになるけど、そのほうがいいわ。」

ローリイは、エミイの最後の大きな犠牲にほほえみながら書き足し、一時間ほど遊びました。

「ベスは、ほんとに、そんなにわるいの？」

「そうらしいんだ。よくなるように祈ろうねえ、泣いちやだめですよ。」

ローリイは、にいさんのように、エミイの肩に手をかけてなぐさめました。ローリイが帰ってしまったと、エミイは小さな礼拝堂にはいり、夕ぐれのあかりのなかにさわって、涙を流しながらベスのために祈りました。もし、このやさしい小さい姉をうしなったら、たとえトルコ玉の指輪が百万もらっても、あきらめられないと思われました。

第二十 うち明け話

おかあさんと、娘たちの対面を語る言葉はないようです。こういう世にもうるわしい光景は、描写するにむずかしいものです。そこで、それはいつさい読者のみなさんの想像にまかせておいて、ただここでは、家のなかに真に幸福がみちあふれ、メグのやさしい望みがかなえられて、ベスが永いねむりからさめたとき、その目にうつった最初のものは、小さな白ばらの花と、おかあさんの顔であったということだけを述べておきます。

ベスは、おとろえていたので、まだ氣力がなく、ただにっこりと笑って、おかあさんに身をすりよせましたが、また、ひっそりとねむってしまいました。そのあいだに、ハンナのよろこびでつくった朝のすばらしい御飯を、メグとジョウがお給仕しながら、おかあさんがあがりました。あがりながらおかあさんは、おとうさんの容態、ブルック氏が後にのこつて看病をしてくれること、帰りの汽車が吹雪でおくれたこと、ローリーが希望にみちた顔で迎えに出ていてくれたので、つかれと寒さでくたくたになっていたが、口にいえないう安心をしたことなどを、ひそひそと話しました。

その日はなんと、ふしぎな気持よい日でしたらう。外はまばゆいばかり、雪に日が照っていましたが、家のなかはおちついて、看病といねむりだけで、安息所みたいでした。ローリイは、エミイにおかあさんの帰ったことを知らせにきました。エミイは一刻も早くあいたいの、す早く涙をかわかしてその気持をおさえたので、ローリイは一人前の婦人みたいになりつばな態度だとほめ、マーチおばさんも心から同意しました。そして、エミイは、ローリイに散歩につれて行ってほしく思いましたが、たいへん疲れているようなので、それもがまんして、ローリイをソファにかけさせて休ませじぶんはおかあさんに手紙を書きました。書きおわつてもどつてみると、ローリイはぐうぐうねむってしまい、そばにマーチおばさんが、いつになく親切心をあらわして、じつとすわつていました。

ところが、エミイのよろこぶことが起りました。おかあさんが来て下すつたのです。おかあさんのひぎにすわつて苦しかったことをうち明け、それをなぐさめる微笑と愛撫を得たとき、エミイはこの市で一ばん幸福だったでしょう。二人は礼拝堂でありましたが、おかあさんは、エミイのこの思いつきをほめました。

「家へ帰つたら、戸だなのすみに、聖母とあかちゃんの絵をかいてかざるつもりです。イエスさまの前にはこんな小さいあかちゃんだと思つと、そんなに遠くはなれていらつしや

るかたではなく、いつもお助け下さるような気がします。」

おかあさんは、ほほえんでうなずきました。

「ああそうだ。おぼさんが、今日キツスしてこれをゆびにはめて下さいました。そして、お前はわたしのほこりになるほどいい子だから、そばへおきたいとおっしゃいました。これはめてても、よろしいでしょうか？」

「美しいですね、でもまだ小さいんだから、すこし早すぎるように思えますね。」

「虚栄心を起さないようにします。ただ美しいからはめたいのではなく、あることを思い出すための。」

「マーチおぼさんのこと？」

「いいえ、利己主義になつてはいけないということ。」

おかあさんは、エミイのまじめは顔つきを見て笑うのをやめました。

「あたし、このごろ、じぶんのわるいお荷物の中かで、利己主義が一ばんいけないと思いました。ベスねえさんは利己主義でないから、あんなにかわいがられ、なくなると思うと、みんなはあんなに心配するんですわ。あたしベスのようになりたいんです。それで、これをはめてみたらと思うんです。」

「よござんすよ、だけど、戸だなのですみのほうが、もったいいでしょう。よくなるうとまじめに考えたら、半分やりとげたようなものです。では、おかあさんはバスのところへ帰ります。元気でいなさいね。すぐに迎えに来ますからね。」

その晩、メグが安着の知らせる手紙をおとうさんへ書いているとき、ジヨウは二階のベスの部屋にそつといきました。おかあさんを見るとたちどまり、なにか心配するようなうすで、ゆびで髪をかきました。

「どうしたの？」と、おかあさんが手をさしのべてやりながら、尋ねました。

「お話したいことがありますのよ。」

「メグのことですか？」

「まあ、おかあさんの察しの早いこと！ そうなんです。あたし気になるもので。」

「バスがねむつてますから、小さい声でね。あの、まさかマフオットが来たのではないでしょうね？」

「あんな人來たら門前ばらくわせてやりますわ。」と、ジヨウはおかあさんの足もとにすわりながらいいました。「この夏ね、メグねえさんがローレンス家へ手袋を忘れて來たんです。片方もどつて來ましたが、ローリイが片方をブルックさんが持っているといつて

くれるまで、あたしたちそんなことを忘れていたんです。あの方それをチョッキのかくしにいられていて、それを落したのをローリイが見つけてかかったんです。そうしたら、メグは好きだけど、まだ年はわかいし、じぶんは貧乏だからいい出せないって白状なされたそうです。こと重大ではないでしょうか？」

「メグはあのかたを好いていると思いますか？」

「まあ！ 恋とかなんとか、そんなくだらないこと、あたしわかりませんわ。小説だといろいろ人目にたつ変化があるわけですが、メグにはちっともそんなことはなく、食べたり飲んだり、ふつうの人のように夜もよくねむりますわ。あのかたのこと、あたしがいつても、あたしの顔をまともに見ますし、ローリイが恋人なんかのじょう談をいっても、すこし顔をあかくするだけです。」

「それでは、メグがジョンさんに興味を持っていないとお思いなのね？」

「だれに？」と、ジョウはびつくりしました。

「ブルツクさんのこと。かあさんはあの人のこと、このごろジョンさんといってるんです。病院でそんなふうによぶようになったもので。」

「まあ、そう、おかあさんはあの人のこと、味方するでしょう。あの人はおとうさんに親

切にしたんだし、もしメグさんが結婚したいといえ、おかあさんはあの人をしりぞけないでしよう。ああ、いやしい！ おとうさんのお世話をし、おかあさんにとりいって、じぶんを好きにさせるなんて。」とジョウはまたいらだたしそうに髪をかきむりました。

「まあ、そんなに怒らないでね、どういう事情か話してあげます。ジョンさんは、ローレンスさんに頼まれて、かあさんといっしょにいつて、つききりで看病して下すつたので、あたしたちは好きにならずにはいられません。あのかたはメグについては公正明大で、メグを愛しているが、結婚を求める前にたのしく暮せる家を持てるように稼いでおきたいとおっしゃるんです。あのかたは、メグを愛し、メグのためにはたらくことを許してほしい。そして、もしメグにじぶんを愛させるようになったら、その権利を許してほしいとおっしゃった。あのかたは、りっぱな青年です。かあさんたちはあのかたのいうことに耳をかたむけずにはいられません。けれど、メグがあんなにわかくて婚約するのは不承知です。」

「もちろんですわ。そんなばかな話。なにかわるいこと起つてると思つてました。これじや予想していたよりもつとわるいわ。いっそのこと、あたしがメグと結婚して家庭のなかに安全にしておきたいわ。」

このおかしな考えに、おかあさんはほほえみました。けれど、またまじめな顔になって、「あなたには、うち明けましたが、メグにはいわないで下さい。ジョンが帰って来て、二人があうようになったら、メグの気持ちもつとはつきりわかると思いますからね。」

「おねえさんは、とても感じやすいから、あの人の美しい目を見たら、一たまりもありませんわ。すぐに恋におちてしまって、家の平和もたのしみもおしまいになります。ああ、いやだ。ブルックさんはお金をかきあつめて、おねえさんをつれていき、家に穴をあけてしまいます。あたしつまらない。なぜあたしたちは、みんな男の子に生れなかつたんでしょう。」

「ジョンは、いかにもおもしろくないというふうなようすをして、言葉をつづけました。

「おかあさんも、あんな人おっぱらって、メグには一言もいわないで、今までのようにみんなでおもしろくしましょうよ。」

「ジョン、あなたがたは、おそかれ早かれ、家庭を持つことが、しぜんな正しいことです。でも、かあさんはできるだけ長く、娘たちを手もとにおきたいから、この話があんまり早く起つたのを悲しく思います。メグは十七になったばかりだし、おとうさんもあたしも、二十までは約束も結婚もさせないことにしました。もしたがいに愛し合うなら、それまで

待てるでしょうし、待っているあいだに、その愛がほんものかどうかどうかもわかりません。」

「おかあさん、おねえさんをお金持と結婚させたほうがいいと思いませんか？」

「かあさんは、娘たちを財産家にしたとか、上流社会へ出したいとか、名をあげさせたとか考えません。身分やお金があるかたが、真実の愛と美徳を持っていて、迎えて下さるならよろこんでお受けもしましょうが、今までの経験からいえば、質素な小さな家に住んで、日々のパンをかせぎ、いくらか不足がちの暮しのほうが、かずすくないよろこびをたのしいものにしてくれるものです。かあさんは、メグがじみな道をふみ出すのを満足に思いません。メグは、夫の愛情をしっかりとつかんでいける素質があつて、それは財産よりもっといいものです。」

「おかあさん、よくわかりました。あたしはメグをローリーと結婚させて、一生らくにさせてあげようと、計画していたんです。」

「ローリーは、メグより年下です。」

「そんなことかまうもんですか、あの人は、年よりふけているし、せも高いし、それで、金持で、親切で……」

「だけど、かあさんは、メグにふさわしいほどローリーが大人とは思いません。そんなこ

と計画するものではありません。」

「では、よします。人間は、頭にアイロンでものせておけば、大人にならないものならいいけど、つぼみは花になるし、子ねこはおやねこになるし、ああ、つまらない。」

そこへ、書きあげた手紙を持って、メグがそつとはいってきました。

「アイロンとねこが、どうしたの？」

「つまらない、おしやべりをしてたの。あたし、もうねるわ。いらっしやいな。」

おかあさんは、手紙に目をとおして、

「けっこうです。きれいに書けました。ジョンによろしくって、かあさんがいってると、書きそえて下さい。」

「あのかたのこと、ジョンとおよびになりますの？」と、メグはにこにこして尋ねました。「そうです。あのかたは、家の息子みたいな気がします。あたしたちは、あのかたが、とても気にいりましたよ。」

「そう聞いて、うれしいと思いますわ。あの人、さびしいかたです。おかあさん、おやすみなさいませ。おかあさんが家において下さると、口でいえないほど安心ですわ。」

おかあさんが、メグにあたえたキツスは、やさしく、メグが出ていくと、つぶやきまし

た。

「まだジョンを愛していないけど、まもなく愛するようになるでしょう。」

第二十一 ローリーのいたずら

あくる日、ジョウはむずかしい顔をしていました。れいの秘密が心の重荷になったのです。メグはわざと尋ねないで、一人でおかあさんの世話をしました。そして、おかあさんは、ジョウに、あなたは永いあいだ家にとじこもっていたから、外へ行って思いきり運動でもしなさいといいました。そこで、ジョウは、ローリーのところへ遊びにいきましたが、このいたずら好きの少年は、ジョウがなにか秘密をもっているのをかぎつけて、本音をはかせようとし、なあにすっかり知っているといたりそんなことは聞きたくないといったり、しつこい努力を重ねたすえに、とうとうその秘密がメグとブルック氏に関するかどうかということをつかめました。そして、ローリーは、じぶんの家庭教師が、その教え子に秘密をうちあけてくれないのを怒り、無視されたその侮辱に、なにかしえしをしようと思いたちました。

ところで、メグにかわったようすがありました。メグは、話しかけられるとびっくりしたり、人から見られると顔をあかめたり、なやましそうな顔をして裁縫をしたり、おかあさんが尋ねると、どこもわるくないと答え、ジョウが尋ねると、ほっておいてちょうだいと答えました。

「メグねえさんは、あれを空気のなかで感じたんです。あれって恋のことですよ。そして、どんどん進行していくんです。ふきげんで、食慾がなく、夜はねむらないし、「小川の声は銀鈴のようにささやく。」とうたっていたし、ねえ、おかあさん、どうしたらいいんでしょう?」

「待っているほかはありません。親切にしてあげて、おとうさんが帰っていらっしやれば、なにもかもかたがつかます。」

そのあくる日、ジョウがれいの郵便局にはいついたものを配達して、

「メグねえさんのところへお手紙よ。ローリイ、なんだってこんなにかめしく封をしたんでしょう?」

メグは、手紙を読むと、ただならぬ声をあげ、おびえたような顔をしました。おかあさんもジョウもおどろいてしまいました。

「まあ、ひどい、あなたが書いて、あの不良少年が手伝ったのでしょ。よくもあなたは、あたしたち二人に、こんならんぼうな、いやしいまねができたものねえ。」と、メグは、胸がつぶれでもしたように泣きました。

ジヨウは、おかあさんといっしょに、その手紙を読みました。

最愛のマーガレットへ、

わたしはもう熱情をおさえることができなくなりました。帰宅する前にじぶんの運命を知りたく思います。まだ御両親には話さないでいますが、わたしたち二人が愛し合っていることがわかれば、御承認下さると思います。ローレンスさまは、必らずわたしを適当なところへお世話下さるでしょう。そのときは、愛する少女よ。わたしを幸福にして下さるでしょう。なお、御家族にはなにごともおもらしなきよう。ただ希望の一言をローリーさんの手をおしてお送り下さい。あなたにささげたジョンより、

「まあ、まあこのいたずら小僧！ あたしがおかあさんとの約束をまもっているしかえしなんだ。いつて、うんと怒って、ひきずって来てあやまらせる。」と、ジヨウは、かつとなり、すぐにもとび出しそうにしましたが、おかあさんが、ひきとめきつい顔をしていました。

「ジヨウ、お待ち、まずあなたが、じぶんの証をたてなければなりません。あんたは、これに関係ありませんか？」

「いいえ、おかあさん。けつして。あたし今までにこの手紙見たこともなく、なんにも知りません。もし関係したのなら、もつとうまく、もつとじょうずに書きます。あたしだって、ブルツクさんがこんな手紙書かないことわかってますわ。」と、ジヨウはいまいました。それに、その手紙を床にたたきつけました。

「あのかたの書いたのと似ています。」と、メグはそれをじぶんの手にあるのを見くらべながら口ごもりました。

「メグ、まさかあなたは返事は出さなかったでしょうね？」と、おかあさんはせきこんでいうと、メグは、はずかしそうに、

「出しましたわ。」

ジヨウは、

「あたし、あのいたずら小僧をひっぱって来て白状させ、うんとしかつてやります。」と、ふたたび走り出そうとしました。

「およし、考えていたよりも、こまったことになりました。メグ、みんなお話しなさい。」

おかあさんは、メグのそばに腰をおろし、ジヨウをしつかりとつかまえました。

「はじめの手紙をローリイから受取つて、おかあさんにうち明けるつもりでしたが、ブルックさんが好きだとおつしやつたこと思い出して、四五日くらい秘密にしようかと思いましたが、お許し下さい、ばかなまねをしたばつです。二度とあのかたに顔を合すことができません。」

「それで、なんとお返事しましたの？」

「そんなことを考えるのはまだ年がわかしいし、それにおかあさんに秘密を持ちたくないから、おとうさんにいつて下さい、御親切はありがたいと思いますが、ただのお友だちとしてつき合いをしていきたいと申しあげましたの。」

おかあさんは、いかにも満足そうにほほえみ、ジヨウは手をたたいて、

「おねえさんは、つつしみ深いわ、メグ、いつてちようだい、あの人、なんといつてよかったですか？」

「恋文なんて出したおぼえはないし、いたずら好きの妹さんが、わたしたちの名を勝手に使うのは遺憾だと書いてありました。親切なお手紙でしたけれど、あたしはずかしくて。」

メグはしおれておかあさんによりそい、ジヨウはローリイをののしりながら部屋を歩き

まわりましたが、ふとたちどまり、二通の手紙をとりあげて見くらべていましたが、

「二つともブルックさん見ていないと思うわ。ローリーが二つとも書いて、あたしが秘密をいわなかったものだから、おねえさんのをとつておいて、あたしをやりこめようというんだわ。」

「ジョウ、秘密なんか持つてはだめよ。」と、メグがいました。

「いやだわ、おかあさんから聞いた秘密よ。」

「いいの、ジョウ、かあさんはメグをなくさめますから、あなたはローリーをつれていらつしやい。すっかりしらべて、こないたずらやめさせます。」

ジョウはかけ出していき、おかあさんはメグに、ブルック氏のほんとの気持ちを、すっかり話して聞かせました。

「それで、あなたの気持はどう？あの人があなたのために家庭がつくれるのを待っていますか？ それとも、なにもきめないでおきますか？」

「今度のことで心配させられたので、これからずっと、もしかしたら、いつまでも、恋人なんかのことにかかわりたくありません。もしあのかたが、こんなばかげたことを御存知ないなら、いわないで下さい。ジョウとローリーにも口どめして下さい。あたし、だまされ

れたり、からかわれたりしたくありません。ほんとに、はじきらしですわ。」

やさしいメグが、いつになく怒っているのを見て、おかあさんは、けっしてしゃべらせぬこと、これからもよく注意するといつて、なだめました。

ローリーの足音が聞えると、メグは書斎にかけこみました。ジョウは、かれが来ないといけないと思って、なんの用事か告げませんでした。おかあさんの顔を見たとき、すぐに察して帽子をひねくりまわしました。ジョウは、部屋から出ていくようにといわれ、犯人の逃亡をふせぐために、玄関へ来ていましたから、会見のもようは、メグにもジョウにもわかりませんでした。話がすんで二人が部屋によびこまれたとき、ローリーはいかにも後悔しているようでした。メグに、ローリーは謝罪し、ブルック氏がこのいたずらについては、なにも知らぬと保証しました。メグはそれでほっとしました。なお、ローリーは、きつぱりといいました。

「ぼくは死んでもブルック先生に話しません。どうか許して下さい。だけど、一ヶ月くらいあなたから口をきいてもらえなくても、しょうがないと思っています。」

「許してあげますわ、でも、あまり紳士らしくないやりかたですわ、あなたが、こんな意地わるをなさろうとは思いませんでした。」

ジヨウは、そのあいだも、ひややかな態度で立っていました。非難の気持をゆるめないようにつとめました。ローリイは、すっかり感情をそこね、話がすむと、おかあさんとメグにあいさつして出ていってしまいました。

ジヨウは、ローリイにもつと寛大にすればよかったと思いました。おかあさんとメグが二階へいってしまつと、ローリイにあいたくなくなり、返す本をかかえておとなりへ出かけていきました。女中にむかつて、

「ローリイさん、いらつしやいますか？」と、尋ねると、在宅だがあわないでしょうといえます。病気かと重ねて尋ねると、

「いいえ、じつはおじいさまと口論なさいまして、お怒りになって、お部屋へ閉じこもつてしまつて、食事の支度ができたので、扉をたたいたのですが御返事ありません、おじいさまもお怒りで、まったく、こまつております。」と、いう返事でした。

「あたしいつて、ようす見て来ましょう。二人ともこわくないから。」

ジヨウはあがつていき、ローリイの部屋の扉をたたき、よせといつても、かまわずたたき、扉を開けたとき、さつととびこみました。そして、床にひざまずき、へりくだつて。

「意地わるしてごめんなさい。仲なおりに来たの、仲なおりするまで帰らない。」と、い

いました。

ローリイは、すぐに仲なおりして、ジヨウを立たせました。だが、まだぶんぶん怒っています。どうしたのか尋ねると、「きみのおかあさんから、だまっていろといわれたことを、しゃべらなかつたもので、おじいさんからこづきまわされたのだ。おじいさんは、ほんのことをいえというが、メグのかかり合いさえなければ、ぼくのやっていたはずだけは、いうつもりだったが、それができないから、だまってがまんしたんだ。だけど、しまいにえり首をつかまえたんで、ぼくはかっとなつて、なにをやり出すかわからないので、部屋からとび出したんだ。」

「そうよ、きつとおじいさんも後悔していらつしやるわ。仲なおりなさい、あたしもいっしょにいってあげるから。」

「だめだ、わるくないのに、二度もあやまるのはいやだ。だいたい、おじいさんは、ぼくをあかんぼあつかいになさる。かれこれ世話をやいてほしくないということを、おじいさんに知らせてやるんだ。」

「では、あなたこれからどうするの？」

「おじいさんがあやまつて、ぼくが、どんなことがあつたのか話せないといったら、信用

してくれればいい。」

「それや、むりだわ。あたしできるだけ説明してあげるわ。あなたも、ここにいつまでもいて、芝居がかったまねをして、なんの役にたつのよ？」

「ぼくは、いつまでも、ここにいるつもりはないよ。そつと家出して、旅行にいつちやうんだ。おじいさんは、ぼくがいなくて、さびしくなったらわかるだろう。」

「そうかもしれないけど、とび出しておじいさんに心配かけるのわるいわ。」

「お説教はよしてくれ。ぼくはワシントンへ行って、ブルック先生にあうんだ。あすこはおもしろいよ。いやな目にあつたんだから、うんと遊ぶんだ。」

「いいわね、いつしよにいければ、いいんだけど。」と、ジョウが忠告者である立場を忘れてそういうと、ローリイは、

「来たまえ、すばらしいぞ、びつくりさせるんだ、お金はぼく持つてるし。」

ジョウの趣味になつた突飛な計画でしたから、いきたかつたのですが、窓からじぶんの家を見ると、首をふつて、

「だめ、あたし男の子だつたら、いつしよにいくんだけど。」

ローリイは、なおすすめました。もうジョウはじぶんの立場をまもつて、

「おだまんなさい、このうえ、あたしに罪を重ねさせないでちょうだい。それよか、もしおじいさんに、あなたをいじめたお詫びをさせたら、家出をやめる？」

「ああ、だけどそんなこと、きみにできないよ。」

けれど、ジョウは、やれると思つて、ローレンス老人の部屋へいききました。そして、本を返し、つぎの第二巻を借りるために、梯子にのつて書庫のたなをさがしました。そして、なんといつて話を切り出そうかと思つていると、老人のほうから、ジョウがなにかたくらんでいると見てとつたらしく、

「あの子は、なにをしたのかね？ なにかいたずらをしたにちがいないが、一言も返事をせぬからおどしついたら、じぶんの部屋にはいつてかぎをかけてしまった。」

「あのかた、わるいことをしたのです。けれどみんなで許してあげました。そのことは、母にとめられていますから、申せません。ローリイは白状して、ばつを受けました。わたしたちは、ローリイをかばいませぬ。ある人をかばうために、だまっていますのです。ですから、おじいさまも、どうかこのことには立ちいらなひで下さい。かえつて、いけません。」

「だが、あんたがたに親切にしてもらつていながら、わるいことをしたのなら、わしはこ

の手でたたきのめしてやる。」

老人の心は、なかなかとけませんでしたが、ジヨウは、そのわるいことが、たいしたことでないように、事実につれないで、かるく話し、やつとうなずかせました。けれど、この際、すこし老人にもじぶんのしうちを考えるようにしてあげたいと思つて、

「おじいさまは、ローリイに親切すぎるくらいですけど、ローリイがおじいさまを怒らせたりするときには、すこし気がみじかくはないでしょうか？」と、正直にいいました。

「いや、あなたのいうとおりじゃ、わしはあの子をかあいがつているが、がまんのならぬほどわしをじらすようなこともする。こんなふうだと、どうなるかな。」

「申しあげましょうか？あの人、家出しますわ。」

老人の顔は、さつと青くなり、美しい男の肖像画を見あげました。それは、わかいころ家出して、老人の意にそむいて結婚したローリイの父母でありました。ジヨウは、老人がくるしい過去を思い出しているのを察し、あんなこといわなければよかったと後悔しました。それで、ジヨウはあわてていいました。

「でも、あの人、よつぼどのがないこと、そんなことしませんわ。ただ勉強にあきると、そんなことをいっておどかさだけなんです。わたしだって、そんなことしたいと考えます。」

髪をきつてからよけいそうです。だから、二人がいなくなったら、二少年をさがす広告を出して、インドいきの船をおさがし下さい。」

ジヨウは、こういつて笑ったので、老人もほつとしたようでした。

「おてんば娘は、とんでもないことをいいなさる。子供はうるさいが、いなくちやこまる。もうなんでもないといつて、食事にあの子をつれて来て下され。」

ジヨウは、わざと、すなおにいうことをきかないで、詫状を書いて形式的にあやまれば、ローリイは、じぶんのばかもわかり、きげんをなおして来ますといつわりました。

「あなたは、なかなかくえない子じや。でも、あなたやバスに、いいようにされてもかまわん。さ、書こう。」

老人は、本式の詫状を書きました。ジヨウは、それを持ってローリイの部屋にいき、扉の下からそれをなかへいれ、きげんをなおして、おりて来るようにいきました。ローリイは、すぐおりて来ました。階段のところまで、

「きみは、えらいな。しかられなかつた？」

「よく、わかつて下すつたわ。さ、新しい出発よ。御飯を食べれば気もはれる。」

ジヨウは、さつさと帰り、ローリイはおじいさんにあやまり、おじいさんもすつかりき

げんをなおし、この事件はすっかり片づきました。

けれど、メグは、この事件のために、ブルック氏へ近づいたのです。あるとき、ジョウは、切手をさがすために、メグの机のひき出しをさがすと「ジョン・ブルック夫人」という落書のある紙片がありました。ジョウは、悲しそうなうめき声とともに、その紙片を火になげこみ、ローリーのいたずらが、じぶんにとっての、不幸な日を、早めたことをしみじみと感じました。

第二十二 たのしい野辺

その後の数週間は、あらしが吹き去った後、日光がさしたようでした。おとうさんは、新年になれば帰宅するといつて来ました。ベスは、書斎のソファまでいって横になることができるようになり、子ねこと遊んだり、人形の服をぬったりしました。ジョウは、まい日ベスを散歩につれ出し、メグはおいしい料理に腕をふるいました。エミイは、ねえさんたちに、できるだけのたからものをあげ、その帰宅を祝福されました。

クリスマスが近づくにつれ、いろんな計画がはじめられました。ジョウは、このいつも

とちがうおめでたいクリスマススを祝うために、とてつもない、ばかげたお祭りを提案して、みんなを大笑いさせました。ローリイも、とつぴな計画をたて、勝手にさせておけば、花火でも凱旋門でも、こしらえかねないいきおいでした。

ただ者でないジョウとローリイは、妖精のように夜中に起きてはたらき、ベスのために、とてつもないものを庭先につくりあげました。それは、雪姫でひいらぎの冠をいただき、片手には花や果物を入れたバスケットをさげ、片手には新らしい譜本を持ち、肩に赤い毛布をまきつけ、口からクリスマススの祝歌を書いた吹流しを出していました。ベスは窓ぎわまでかつがれていき、この雪姫を見てどんなに笑ったでしょう。

祝歌というのは、こうです。

ユングフラウからベスへ、

ベス女王さま おめでとう

ちつともくよくよなさらずに

たのしく平和にすこやかに

お祝いなされよクリスマス

はたらき蜂さん果物食べて

お花のにおいをかきなさい

譜本はピアノをひくため

毛布はおみ足つつむため

ジョアンナの肖像は

ラファエル第二世がねっしんに

きれいで、よくにるように

かきあげたもの、いいでしょう。

あかいリボンもあげましょう

ねこの夫人の尾のかざり

アイスクリームはペグの作

桶にもりあがるモン・ブラン山

アルプス娘のこのわたし

つくったローリイとジョウ

雪の胸にひそませた

あつい情をお受け下さい

雪姫の贈りものを、ローリイがはこび、ジョウがそれを贈るために、こっけいな演説をしました。ベスは、雪姫の贈りもののおいしいぶどうを食べて、

「あたし幸福でいっぱい、これでおとうさんがいらしたら、もうどうしようもないわ。」と、いいました。

「あたしも幸福」と、ジョウも、前からほしがって、やっと手に入れた二冊の本アンディンとシントラムのはいつているかくしをたたきながらいいました。

「あたしだって、そうよ。」と、エミイはおかあさんからいただいたマドンナとその子の版画をながめながらいいました。

「もちろん、あたしも。」と、メグは生れてはじめて手にした絹のドレスにさわりながらいいました。それはローレンス氏が、くれるといつてきかなかったのです。

「かあさんだって、そうですよ。」と、おかあさんも満足そうにいつて、今しがた娘たちが胸にとめてくれたブローチをなでました。

ところが、それから三十分の後に、まるで小説にでもありそうな思いがけないうれしい

ことが起りました。それは、ローリイが興奮して客間をのぞき、

「さあ、マーチ家へまたクリスマス・プレゼントがどきましたよ。」と、いつて、すぐに、すがたをけたことからはじまりました。みんなは、はじかれたように、なにごとかと、ローリイの言葉にかくされたものを考えていると、首まきをしたせの高い人がもう一人のせの高い人の腕によりかかりながらあらわれました。あつと、みんなはさげんでおしよせ、たちまちとりかこみ、すがりつき、よろこびのうずが家のなかにまきかえりました。ああ、その人はおとうさんでした。そして、つづく笑い声、あんまりうれしいので、みんながいろんな、らちもないしくじりをしたのが、よけいおかしく思われました。やっと笑い声がしずまると、ブルック氏はローリイをうながして帰り、おとうさんとベス、二人の病人はしずかにソファにかけました。

おとうさんは、上天気になったので、医者が帰宅を許してくれたこと、それで、わざとふいうちに帰って来たこと、ブルック氏がよく世話をしてつれて来てくれたことなどを話しました。

ところで、その日のごちそうは、マーチ家では、はじめてのすばらしいクリスマスのごちそうで、七面鳥のむし焼き、ほしぶどういりのプディングゼリイなど、ハンナができる

かぎり腕をふるいました。そして、お客はローレンス老人、ローリー、それからブルック氏で、健康を祝して乾杯し、語りあい、歌を合唱しあつて、ごちそうを食べ、心ゆくばかりの楽しいときをすごしました。

食事をおわつてから、家族は炉のまわりに集りました。娘たちは、今年の思い出話をしました。じつと耳をかたむけていたおとうさんは、満足そうにいいました。

「小さい巡礼さんたちの旅としては、今年のあと半分はくるしい旅だったね。だけど、みんな勇ましく歩いて来たし、めいめいの重荷も、うまいぐあいにころげおちそうだね。」

「どうしておわかりですか？ おかあさんからお聞きになりました？」と、ジヨウが尋ねました。

「まだ、そんなに聞いてはいないが、わらの動きかたで風向きがわかるね。それで、おとうさんは、今日いろいろなものを発見した。まず、これが一つ。」と、おとうさんは、そばにすわっているメグの手をとつて、「あれた手だね。やけどもある、まめもある。だが、むかし美しかったときよりも、今のほうが美しいね。この手は家庭を幸福にしていく、勤勉な手だ。」

おとうさんは、にっこり笑つて、むかいがわにすわっているジヨウをながめて、

「髪をきつたが、一年前の息子のジョウではなくなった。身じまいもきちんとして、すっかり女の子になった。今は看病と心配のつかれで青い顔をしているが、ずっとおだやかな顔つきになった。むかしのおてんば娘がいなくなつて、すこしきびしいが、そのかわり頼もしい心のやさしい娘があらわれた。」

「こんどはベスね。」と、エミイはじぶんの番の来るのを待ちどおしく思いました。

「ベスは、病気でこんなに小さくなつたから、うっかりしやべっているあいだに、どこかへ消えてしまひそうだね、まあ、前ほどはにかまなくなつたようだが。」と、おとうさんは、もうすこしでこの子を失うところだと思ひ、しっかりとだきしめ、「ベス、どうかいつまでもじょうぶでいてほしいね。」

みんなだまつて、それぞれなにか考えていました。と、おとうさんは、足もとのエミイの髪をなでながら、

「エミイは、食事のとき、いつもとちがつて、鳥の足の肉をとつたし、またお昼からはお使いをしたし、しんぼうづくよく、みんなのお給仕もしたね、おしやれもしなくなつたし、指にはめてあるきれいな指輪のことも口に出さなかつたね。これでおとうさんには、エミイがじぶんのことより、他人のことをよけい考えるようになったことがわかつてうれしい

」。

おとうさんの話がすむと、ジヨウがバスにむかって尋ねました。

「バス、あなたなにを考えているの？」

「あたし、今日、天路歷程のなかで、クリスチャンとホープフルが、いろいろくるしい旅をつづけたあげく、年中ゆりの花のさいいてたのしい緑の野辺について、ちようど今のあたしたちのように、目的地にむかって、また出発する前に、そこでたのしく一休みするところを読みました。」と、バスはいつて、おとうさんのそばをはなれてピアノの前にかきました。

「お歌の時間でしよう。おとうさんのお好きな、巡礼の聞いた羊飼いの少年の歌、あたし作曲しましたの。」

そういつて、バスはピアノをひき、二度ともう聞けないかと思った美しい声で、バスにふさわしい古風な讚美歌をうたいました。

へりくだるものにおそれなく

ひくきにあるものにほこりなし

まずしきものは、とこしえに

神のみちびきえらるべし

われもつものにことたれり

たとえおおくもすくなくも

ああ、そのたるをしるころ

主のころにかなうべし

おもにはかたにおもくとも、

じゅんれいのたびをつづけつつ

このよのさちはうすくとも

主のしゆくふくをうけるならん。

第二十三 マーチおばさん

はたらき蜂が、女王蜂のまわりにむらがるように、おかあさんと娘たちは、そのあくる

日、ベスのそばの大きなイスに身体をうずめたおとうさんのまわりにたかり、あらゆる親切なお世話をしました。ただ一人、ふしぎなかわりかたはメグで、そわそわしたり、気がぬけたようになってしまいました。

午後、ローリーが、窓ぎわのメグを見て、雪のなかに片ひぎをつき、胸をうって髪をかきむしり、哀願するように、りよう手を組み合せて、拝むようなかっこうをしました。メグが、ばかなまねはおよしなさいというと、ハンカチで空涙をふいてしまいました。「おばかさん、なんのつもりかしら？」と、メグがいうと、ジヨウが

「あなたのジヨンが、こうなるといふ実演なのよ。あわれでしょう。」と、せせら笑っていました。

メグは、顔をしかめ、わたしをこまらせないで、今までどおりみんなで遊んでいればいいといひますと、ジヨウは、

「そうはいかないわ、おかあさんにもあたしにも、よくわかるけど、おねえさんはちつともおねえさんらしくなくなつたわ。遠いところへいっておしまいになつたみたい。あたしおねえさんみたいに、ぐずぐずしてるのきらい。だから、そうする気ならさっさとさきめるといいのよ。」

「あたしのほうからいい出せるものではないし、おとうさんはあのかたに、あたしのことわかすぎるとおっしゃったんですもの、あのかたもいい出せないわ。」

ジヨウは、メグが気がよわいから

「あの人にいい出されたら、なんていっていいかわからなくなり、泣き出すか顔をあかくするか、ノウがいえないで、あの人の思うようになってしまう。」と、いいますと、メグは

「あなたの思うほど、あたしばかでもよわ虫でもないわ。あたしにだって、いうことはいえるわ。」とやりかえました。

それから、恋愛についていろいろ話したあげく、メグは、もしいい出されたら、

「あたしすつかりおちついていうわ。ありがとうございます。ブルツクさま、けれど、まだ年がわかすぎますので、今のところ婚約などできませんの。父もおなじ意見でありますの。どうかなにもおっしゃらずに、今までどおりお友だちとしておつき合い下さいませ。」

「ほう、いえるかしら。あのかたの感情を害することを気にして、きつと敗けてしまうわ。」

「いいえ敗けるものですか、つんとすまして部屋を出ていくわ。」

そのとき、だれか扉をたたきました。開けると、それはジョンでした。

「こんにちは、こうもりがさをとりに来ました。あのう、おとうさんの御容態、今日はどうかと思ひまして。」

ジョンは、メグとジョウの、意味ありげな顔を見て、ややあわてながらいいました。

「たいそう元気でいますわ。かさたてにいますからつれて来ます。それから、あなたのお見えになったことも知らせて来ます。」と、ジョウは、かさと、おとうさんを、ごつちやにした答えをしながら、メグに例の口上をいわせ、つんとすまして部屋を出ていかせるために、じぶんは部屋を出ました。メグは、ジョウのすがたが見えなくなると、すぐに、

「おかあさんが、お目にかかりたたがつていますわ。どうぞおかけになって、すぐよんで来ますから。」

ジョンは、メグにむかつて、

「お逃げにならなくてもいいでしょう。ぼくがこわいんですか？」と、ひどく、感情を害したような顔つきでしたので、メグはびっくりして、

「父にあんなに親切にして下さったのに、どうしてこわがりましょう。どうしてお礼を申しあげたらいいかと思つていますのよ。」

「どうしてお礼をしていたかどうか、いつてあげましょうか？」と、ジョンは、メグの手を握りしめ、愛情をこめて見るので、メグは

「いいえ、いいえ、どうぞおつしやらないで。」と、やはりこわそうに手をひっこめようとしました。

「ごめいわくはかけません。すこしでもぼくに好意を持って下さるかどうか知りたいだけです。ぼくは心からあなたを愛しています。」

さあ、今こそおちついて、例の文句をいうべきでしたが、すべて忘れ、うなだれて、わかりませんわと答えただけで、それもあまりにひくかったので、ジョンは聞きとるために身をかめなければなりません。そして、ジョンは、すこしぐらいめいわくをかけたもいと思つたらしく、満足そうに、

「ぼく、いつか報いられるかどうか、うかがいたいのです。そうでないと仕事もできません。」と、いいました。

「でも、わたしまだわかすぎますから。」

「ぼくは待っています。そのうちに、ぼくを好きになるようになって下さい。ぼくは教えてあげたいのです。これはドイツ語よりやさしいのです。」

ジョンは、懇願するようでしたが、一面、なんとなく、たのしそうで、成功をうたがわぬというような満足そうなほほえみさえうかべていました。メグは、アンニイ・マフオツトのことを思いうかべ処女の優越感から気まぐれな気持ちにかられ、

「わたし、そんな気持ちになれませんわ。どうぞお帰り下さい。」と、いつてしまいました。それを聞いたジョンは、メグのそのふきげんにおどろき、

「本気でそうおつしやるのですか？」と、部屋から立ち去ろうとするメグを追って、心配そうに尋ねました。

「ええ、あたし、そんなことで気をもみたくありませんわ。父も気にかけないようにといいました。早すぎますし、そんな気になれませんわ。」

「あなたのお気持がかわって来てほしいものです。ぼくは待っています。ぼくをからかわないで下さい。」

「あたしのことなんか考えないで下さい。そのほうが、あたし、けっこうなのです。」

メグは、恋人の忍耐とじぶんの力を試そうとする気味のわるい満足を味わいながらいいました。ジョンは、青い顔になり、いかにもなやましそうでした。この興味ふかい場面に、マーチおばさんが、びっこをひきながらはいつて来なかつたら、そのつぎにはどんなこと

が起つたでしょう？

マーチお婆さんは、ローリイからマーチ氏が帰宅したことを聞くと、すぐさま甥にあいに馬車をのりつけました。びっくりさせるために案内も乞わずにはいつて来ましたが、たしかにメグとジョンはおどろき、メグはとびあがり、ジョンは書齋へ逃げこもうとしました。

「おや、まあ、これはいつたい、なにごとですかい？」と、老婦人は杖で床をたたき、二人がそこにいたのをあやしみました。

「あの、おとうさんのお友だちですの。」

「その男が、お前さんの顔をなぜあかくさせたかね？ なにかまずいことでもあつたね。」

「ただお話しただけです。ブルックさんは、こうもりがさをとりにいらしたので。」

「ほう、ブルック、あの子の家庭教師がね？ ああ、わかりました。ジョウがおとうさんのことづけをいいに来たとき、まちがえて口をすべらしたのを聞いた。お前さんは、承知しはしないだろうね？」

「しっ！ 聞えますわ、おかあさんをよんでまいりましょうか？」

「まだいい。お前にいうことがあります。お前がその男と結婚する気なら、わたしはびた

一文もあげないからね、よくおぼえておき、そして、りこうにおなりよ。」

老婦人は、どんなにやさしい人にも反抗心を起させる人で、今もメグは、強制的にそういわれると愛情と片意地で、ジョンを好きになろうと思ひ、いつになく強気で、

「あたしは、好きな人と結婚します、お金はあなたの好きな方にあげて下さいませ。」

「なんですって！ そんな口のききかたをして、今に貧乏人との恋にあきて後悔しますよ。」

「お金持と、愛のない結婚するよりましですわ。」と、メグはゆずっていません。

老婦人は、メグがこんなことをいい出したのでおどろき、今度はやわらかに説き伏せるつもりで、

「わたしは親切からいんです。お前さんはりっぱな結婚をして家の者を助けなければならぬのです。」

「いいえ。両親ともそんなこと考えません。両親ともジョンが好きです。貧乏ですけれど。」

「お前さんの両親は、世間知らずのねんねだからね。そのブルツクとやらは、貧乏で、金持の親類もないそうだね。」

「でも、親切な友だちがたくさんいますわ。」

「友だちがなんの力になるものか、それに、その男には職業もないんでしょう？」

「まだ、ありません。ローレンスさまがお世話して下さいます。」

「あんな変物が頼みになるものかね。とにかくお前はもうすこしりこうだと思っていたが
。」

「ブルックさんは、りっぱなかたです。かしこいし、才能もありますし、勇気もおありになります。わたしのこと思つて下さるのを、わたしは誇りにしています。」

「あの男は、お前に金持の親類があるから、それでお前を好きになつたんだよ。」

「まあ、どうしてそんなことおつしやるんですか？ わたしは、どうしても、あのかたと結婚します。」

メグは、そこまでいって、もしかジョンに聞かれたらと思つて、はつとして言葉をきりましたが、マーチおばさんはたいそう怒つて、

「よろしい、強情だね、あたしは、もうお前のおとうさんにあう気力もない。結婚したからって、あたしからなにかもらうなんて考えたつてだめです。永久におさらばだよ。」と、おそろしい顔つきで帰っていきました。のこつたメグが、ぼんやりつつ立っていると、ジ

ヨンが来て、

「メグ、ぼくのこと弁護して下さってありがとうございます。それから、おぼさんにはあなたがわざわざにしろぼくのこと愛して下さることを証明して下さいましたお礼をいいますよ。」

「おぼさんが、あなたのわる口をいい出すまでは、どんなにあなたを思っていたか、わたしにもわかりませんでしたわ。」

「では、ぼく帰らないで、ここにいて幸福になれますね、え？」と、ジョンがいました。ここでもつんとすまして立ち去るわけでしたが、メグは、ええとやさしくささやいて、ジョンの胸に顔をうずめ、ジョウの手前、永久に頭のあがらぬことになってしまいました。十五分ほどして、ジョウが二階からおりて来て、予期しなかった変化におどろき、まるで息の根がとまるほどでした。しかも、ジョンは、ぼくたちを祝って下さいというではありませんか。ジョウは悲痛なさげびとともにとび出し二階へかけあがり、

「ああ、たれか早く階下へいつて下さい。ジョンがおかしなまねをして、おねえさんがよろこんでいるわよ！」

おとうさんと、おかあさんは、いそいで階下へいきました。ジョウは、バスとエミイにおそろしいニュースを聞かせながら、ののしりわめきました。二人ともむしろそれをう

れしいニュースと考えていたので、ジヨウはじぶんの屋根部屋へいき、そのなやみをねずみたちにうち明けました。

その日の午後、客間でながあつたか、だれも知りませんでした。けれど、いろいろの話がかわされ、おとなしいジョンが、じぶんの望みや計画を非常な熱心さで話したことは、たしかでありました。

夕飯のベルが鳴り、みんなが食卓についたとき、ジョンとメグは、この上もなくたのしそうに見えたので、もうジヨウも、さつぱりと、じぶんの感情を流し、二人を祝福する気持になりました。むろん、エミイもベスも、心からよろこび、エミイは二人をスケッチしようと思いたちました。この古ぼけた部屋にこの一家の、最初のロマンスが、まばゆいばかりかがやき出し、たいしたごちそうはありませんでしたが、それはそれはたのしい食事でありました。

おかあさんがいいました。

「今年は悲しみをおいかけられるように、よろこびがやって来る年らしいですが、その変化がはじまったようです。でも、すべてうまくいきそうで、けっこうです。」

「来年は、もっといい年になればいいと思います。」と、ジヨウにはメグをうばわれたこ

とは、いい年とは思えませんでした。

「ぼくは、さ来年が、もつといい年になってほしいと思います。ぼくの計画が進んでいけば、きつとそうなります。」と、ジョンがメグにほほえみかけながら、そういうと、結婚の日が早く来ればいいと待ち遠しく思っているエミイが尋ねました。

「待ち遠しくありません？」

「勉強することがありますから、みじかいくらいですわ。」と、メグが答えました。

「あなたは、ただ待っていて下さればいいんです。はたらくのはぼくがやります。」と、いつて、かれは仕事の手はじめとして、メグのナプキンをひろってやりました。

それを見てジヨウは、気にくわなかつたのですが、そのとき、玄関の扉がぱたんと開いたので、

「ローリイだわ、これでやつと気のきいた話ができそうだわ。」と考えましたが、ローリイが来たときすつかりあてがはずれたことがわかりました。というのは、この事件のすべてがじぶんの考えで成立したというような、あやまった考えを起して、ジョン・ブルック夫人のために、結婚式用の大きな花束をかかえて来たからです。

「ぼくは、ブルック先生が、じぶんの考えどおりになさることがわかっていました。いつ

だって、そうなんです。やりとげようと決心なさると、空がおちて来ようと、やりとげておしまいになります。」とローリイは、花束とお祝いの言葉とをささげながらいいました。「おほめにあずかって恐れいります。ぼくはそれを未来のよい前ぶれとしてお受けいたします。そして、ぼくたちの結婚式には、あなたを招待することをきめましょう。」

「地球の果てからでもまいります。そのときのジョウの顔を見るだけでも、大旅行して来るねうちがあります。きみは、うれしそうな顔をしていませんね。どうしたの？」と、客間のすみのほうへいくジョウの後についていきました。みんなは、ローレンス氏を迎えるために、そこへ集っていきました。

「あたし、この結婚に不賛成だけど、がまんすることにしたら、一言も反対はいわない。だけど、メグをやってしまうの、どんなにつらいか、あなたにはわからないわ。」と、いったジョウの声はかすかにふるえていました。

「やってしまふんじゃない。半分だけのこることになる。」

「ううん、もとのとおりにはない、あたしは一ばん大切な友だちをなくしたのよ。」
「だけど、ぼくがいる。たいしてやくにたたないけど、一生きみの味方をする！」

「それや、わかってるわ。ありがたいと思うわ。ローリイ、あなた、いつだって、あたし

をなぐさめてくれたわね。」と、ジヨウは感謝をこめてローリーの手をにぎりました。

「さあ、いい子だから、うかぬ顔をするのおよし。メグさんは幸福になるし、ブルツク先生は就職なさるし、おじいさまはよくめんどろを見てあげる、メグがいつちまつたら、ぼくも大学を卒業するしそしたら、いつしよに外国を漫遊するか、どこかへすてきな旅行をしよう。なぐさめになるよ。」

「そりや、いいなぐさめねえ、でも、三年のあいだに、どうなるかわからないわ。」

「そりやそうだが、きみは未来をのぞいて、ぼくたちがどうなるか見たかない？」

「あたし、見たくないわ、なにか悲しいことが見えるかもしれないもの。今はみんな幸福だけど、これ以上、幸福になれると思わないわ。」

ジヨウは、そういつて部屋を見まわしましたが、かがやくばかりにたのしそうなありさまに、ジヨウの目もかがやきました。

おとうさんとおかあさんは、二十年前にはじめられたじぶんたちのロマンスの第一章を、心しずかによみがえらしてすわっていました。エミイは、二人の恋人がみんなからはなれて、じぶんたちだけの美しい世界にすわっているすがたを写生していました。ベスは、ソファに横になって、ローレンス老人とたのしそうに語っていました。老人は、ベスの手を

にぎりしめ、その小さい手がじぶんを、彼女の歩いて来た平和な道にみちびいてくれるような気がしていました。

ジヨウは、彼女らしい、きりつとしたしずかな表情で、ひくいイスによりかかり、ローリイはそのイスのせにもたれ、あごを彼女のちぢれ毛の頭とならべ、二人をうつしている長い鏡のなかの彼女にほほえんでうなずいていました。

こうして、メグとジヨウとベスとエミイが、たのしくしているとところへ幕はおりました。この幕がふたたびあげられるかどうか、それは、この「愛の姉妹」とよばれる家庭劇の第一幕が、いかにお客さまがたに、迎えられるかによるのであります。

おわり。

青空文庫情報

底本：「若草物語」京屋出版社

1948（昭和23）年6月1日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の置き換えをおこないました。

「勝ち↓がち　かも知れ↓かもしれ　給↓たま　（て）見↓（て）み」

また、底本では一部連濁の「づ」が「ず」になっていますが、「づ」に統一しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年10月16日作成

2010年11月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

若草物語

LITTLE WOMEN

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 ルイザ・メイ・オルコット L. M. Alcott
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks
青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>